

国史跡 山王囲遺跡

発掘調査報告書Ⅲ

1998

一迫町教育委員会

国史跡 山王廻遺跡

発掘調査報告書Ⅲ



1 山王園遺跡 P 区全景 (東から)
View of excavated trench from the east



2 山王園遺跡第15号土器埋設土壤
Pit15 with buried pottery

図版 2



1 山王圓遺跡 P 区第 3 号配石造構半截状況（南から）

Bisected Stony feature 3 looking from the south



2 山王圓遺跡 P 区第 5 号配石造構半截状況（南から）

Bisected Stony feature 5 looking from the south



1 山王園遺跡Q西区土器出土状況 24層 一括土器No.292～297（北から）

View of excavated pottery from the north



2 山王園遺跡Q西区第1号竪穴状遺構（北から）

Pit 1 excavated at the Q west trench

図版4



1 山王園遺跡Q南区・Q北区全景（南から）

View of excavated Q north and south trench from the south



2 山王園遺跡S区全景（西から）

View of excavated S trench from the west

序

平成7年度より開始いたしました山王田遺跡の発掘調査も、本年度で第3次を迎えました。今回の調査では、昨年度の第2次調査に引き続き、弥生時代前期の遺構群が発見されたほか、縄文時代晚期の有機質土層が非常に良好な状態で保存されていることが確認されるなど、山王田遺跡の価値をあらためて知ることができる結果がでております。

また、町では今年度より文化庁、宮城県の補助をいただきながら「埋蔵文化財センター」の建設を開始いたしました。平成10年度完成のこの「埋蔵文化財センター」は、一迫町における発掘調査と史跡整備の拠点となるべき施設であり、文化財の保護と積極的な活用に取り組むための拠点でもあります。

先人の残した財産である文化財を保護し、後世に伝えていくことは我々の責務です。

今回の調査の成果が広く活用され、地域の歴史の解明と文化財の保護の一助となれば幸いです。

最後に調査にご参加いただいた皆様方、本書を作成するにあたってご助言、ご協力をいただきました諸先生方、ならびに関係機関の方々に厚く御礼申し上げます。

平成10年3月

宮城県一迫町教育委員会

教育長 遠藤昭吉

例 言

- 1 本書は宮城県東原郡一迫町字山土に所在する同史跡山王団遺跡の第3次発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、一迫町教育委員会が調査主体となり、遺構分布確認のための国庫補助事業として平成9(1997)年7月28日から同年11月14日にかけて面積約1,400㎡の調査対象地について行った。

3 調査体制

調査担当	一迫町教育委員会
調査指導	須藤 陸(東北大学文学部教授) 加藤道男(宮城県教育庁文化財保護課調査第一係係長)
調査指導・協力機関	文化庁 東北大学文学部考古学研究室 宮城県教育庁文化財保護課
調査員	阿子島香(東北大学文学部助教授) 村田亮一(宮城県教育庁文化財保護課技術主査) 大場亞弥(一迫町教育委員会生涯学習課学芸員)
調査補助員	水見淳哉(東北大学大学院博士課程)、荻原研一、西村 力、高橋 哲、玉橋さやか、藤原弘明、高木暢亮、小山有希、坂田由紀子、西井 亨、鹿又喜隆、熊谷宏靖(東北大学大学院修士課程)、福壽規人、鈴木 隆、北村浩貴、杉山陽亮、池谷考史、川口貴史、千葉直樹、三上紅美子、丹羽美智子、京野恵子、廣田英一郎、藤田直行、真田朱美、竹ヶ原亜希、小原恒夫、神田和彦、飯塚洋介、鎌田英司、羽石智治、早瀬亮介、馬場龍一郎、荒井 誠、小野章太郎、神野高慶、斎藤慶史、山崎 錠(東北大学文学部)
調査作業員	佐藤幸一、津田小砂、曾根義秋、篠川義春、門伝保輝、佐藤運之丞、佐藤ひさよ、松田セツ子、三浦精喜、苦原清喜、門伝千恵子、三浦清男、佐藤道子
調査参加者	中鉢琢也(奈良大学)

- 4 編集は須藤 陸の指導のもとに、大場亞弥、水見淳哉が担当した。一迫町教育委員会、東北大学文学部考古学研究室の構成員が協力して整理・分析・図化、属性観察表の作成等の作業を行った。

資料整理・分析作業の体制

整理参加者 高橋 哲、玉橋さやか、小山有希、荻原研一、西村 力、藤原弘明、高木暢亮、坂田由紀子、西井 亨、鹿又喜隆、熊谷宏靖、福壽規人、鈴木 隆、北村浩貴、澤田純明、杉山陽亮、池谷考史、川口貴史、栗野昌之、千葉直樹、三上紅美子、丹羽美智子、京野恵子、廣田英一郎、

藤田直行、真田朱美、竹ヶ原亜希、鈴木寿幸、小原恒夫、神田和彦、飯塚洋介、鎌田英司、羽石智治、早瀬亮介、馬場龍一郎、荒井 誠、今井あゆみ、大橋 純、小野草太郎、神野高慶、齊藤慶史、佐藤 恵、種石 悠、松田瑞穂、山崎 健（東北大文学部）、斎藤幸子、佐藤勝子、皆原みさ子、阿部辰江、池田道子、井上文子、大豆田睦月、鈴木明美、曾根義秋、佐藤運之丞（一迫町）

- 5 本報告書の各章・節の分担執筆者は、文章末（ ）内に付記した。
- 6 発掘調査および報告書をまとめるにあたって、次の方々のご協力とご助言をいただいた。
小井川和夫氏、富岡直人氏、吉川昌伸氏
- 7 地形および地質の調査と分析については阿子島功氏（山形大学）に依頼した。
- 8 植物の鑑定と分析は鈴木三男氏（東北大）に依頼した。
- 12 石材の鑑定は蟹澤聰史氏（東北大）に依頼した。
- 13 自然科学分析は（株）パリノ・サーヴェイに委託した。
- 14 地図は建設省国土地理院発行の1/50,000「岩ヶ崎」を複製、使用した。
- 15 土色については『新版十色帖』（小山正忠・竹原秀雄：1994）を使用した。
- 16 遺物図面、写真図版中の（ ）内の番号は遺物観察表中の登録番号に対応する。
- 17 平成9年3月発行の『国史跡山土圓遺跡発掘調査報告書Ⅱ』で報告した第7号溝跡については、この第3次調査によってその北部が2本に分岐することが確認された。この新たに確認された溝跡の名称を第8号溝跡とした。

目 次

はじめに	1
第1章 調査の目的と経緯	3
第2章 調査の概要	7
第1節 調査の方法	7
第2節 発掘調査区の設定	7
第3節 調査の経過	8
第3章 調査の成果	10
第1節 層序	10
第2節 遺構	18
第3節 出土遺物	29
第4章 考察	59
第1節 P区検出配石遺構・土壤の性格と時期	59
第2節 V字溝の時期と性格	59
第3節 Q西区堅穴状遺構と包含層について	60
第4節 Q区包含層出土赤生土器	61
第5節 出土石器について	67
結語	69
引用・参考文献	70
付章1 山王町遺跡の灰白色火山灰の分析結果	71
付章2 山王町遺跡出土木材の樹種	74

付 表

付表 1 山王畠遺跡出土土器観察表	86
付表 2 山王畠遺跡出土土製品観察表	91
付表 3 山王畠遺跡出土石器・石製品観察表	91

図 版

第 1 図版 山王畠遺跡発掘区配図	第 10 図版 山王畠遺跡出土石器
第 2 図版 山王畠遺跡遺構配置図 (E~S 区)	第 11 図版 山王畠遺跡出土石器
第 3 図版 山王畠遺跡遺構配置図 (Q~R 区)	第 12 図版 山王畠遺跡出土石器
第 4 図版 山王畠遺跡出土土器実測図	第 13 図版 山王畠遺跡出土石器
第 5 図版 山王畠遺跡出土上器実測図	第 14 図版 山王畠遺跡出土石器
第 6 図版 山王畠遺跡出土上器実測図	第 15 図版 山王畠遺跡出土石核
第 7 図版 山王畠遺跡出土土器実測図	第 16 図版 山王畠遺跡出土石核・剥片
第 8 図版 山王畠遺跡出土土器実測図	第 17 図版 山王畠遺跡出土接合剥片
第 9 図版 山王畠遺跡出土土器・土製品実測図	

写 真 図 版

PL. 1 P 区第 3 号配石遺構・第 15 号土器埋設上塙および P 区第 1 号焼土遺構	PL. 16 山王畠遺跡出土土器
PL. 2 1965 年時調査区北壁	PL. 17 山王畠遺跡出土土器
PL. 3 Q 束区全景および第 1 号近世墓	PL. 18 山王畠遺跡出土土器
PL. 4 R 区蓋形土製品出土状況およびビット 402	PL. 19 山王畠遺跡出土土器
PL. 5 山王畠遺跡出土土器	PL. 20 山王畠遺跡出土土器
PL. 6 山王畠遺跡出土土器	PL. 21 山王畠遺跡出土土器
PL. 7 山王畠遺跡出土土器	PL. 22 山王畠遺跡出土土器
PL. 8 山王畠遺跡出土土器	PL. 23 山王畠遺跡出土土器
PL. 9 山王畠遺跡出土土器	PL. 24 山王畠遺跡出土土器
PL. 10 山王畠遺跡出土土器	PL. 25 山王畠遺跡出土土器・土製品
PL. 11 山王畠遺跡出土土器	PL. 26 山王畠遺跡出土石器・土製品
PL. 12 山王畠遺跡出土土器	PL. 27 山王畠遺跡出土石器
PL. 13 山王畠遺跡出土土器	PL. 28 山王畠遺跡出土石器
PL. 14 山王畠遺跡出土土器	PL. 29 山王畠遺跡出土石器
PL. 15 山王畠遺跡出土土器	PL. 30 山王畠遺跡出土石器

はじめに

国史跡山王廻遺跡は、晩期縄文時代の低湿地遺跡として全国的によく知られている。1964・65年に、この遺跡の「泥炭層」が調査され、植物質の自然遺物、生活資材が豊富に出土したことから遺跡の重要性が明らかになり、国史跡に指定されたものである。ことに、その晩期後半の2mにおよぶ包含層から出土した装飾的で精巧な作りの籠胎漆器は、極めて貴重な縄文時代の工芸品として、その評価が確立している。

また、低湿地包含層の下部に形成された「泥炭層」と呼ばれる有機質土層からは、膨大な量の亀ヶ岡式土器、石器とともに、精巧な朱漆塗りの櫛が多数出土している。この櫛は、細いヒゴと組で極めて複雑に組み立てられ、漆が繰り返し厚く塗り重ねられている（中里他 1971）。これらの漆塗り製品の存在によって、縄文時代晩期における漆塗り技術の優れた水準が明らかになった。さらに、この縄文時代晩期後半の有機質土層からは大型のヌマガイに朱漆を厚く塗った容器が出土している（伊東他 1985）。このような遺物は、この地域の縄文人がその生活域の資源をきわめて効率的に活用していたことを裏づけるものである。

さらに、この低湿地包含層からは編布の断片が出土している。この編布もきわめて重要な資料である。縄文人の衣服がどのような材料でどのように作られていたのか、この布の断片は、縄文時代の布についての得がたい情報を探求するうえで、非常に重要な資料である。1965年度の発掘調査を指導した故伊東信雄東北大名誉教授は、この資料を入念に研究し、この布が編物であることを明らかにした（伊東 1966）。その編み方は、近年まで新潟県津南町などで編み続けられてきた「アンギン」（本山他 1963）ときわめてよく類似していることが伊東の観察で初めて確認された。また、この編布を詳細に調べ、アンギンの編み機、コモツチを用いて縄文時代における編み方を実験した（伊東 前掲）。その編み方は、米俵、炭俵、ムシロの編み方と共に通するものである。同様な編布の断片は、北海道朱円後期縄文遺跡などからも出土しており、また、九州では長崎県雲仙岳東麓にある山ノ寺遺跡から晩期後半の土器に山王廻資料と類似した編布痕跡のみられる土器底部が早くから知られている。さらに、山王廻遺跡の1965年度調査の後、秋田県五城目町中山遺跡（高橋他 1984）、青森県亀ヶ岡遺跡、福島県三島町荒岸敷遺跡（渡辺 1990）などの低湿地遺跡における調査でも山王廻遺跡出土編布と共に通した資料が出上しており、その類例が確実に増加している。このような資料によって、縄文時代後、晩期には日本列島において広く山王廻遺跡の編布の編み方と共に通した技術が発達していたことが明らかになった。

最近、東北大学考古学研究室では、この編布の材質、保存状況を検討するために、東北大学理学部植物園の鈴木二男教授に資料の分析と拡大写真撮影を依頼した。顯微鏡観察では、この編布の撚糸が、漆と推定される透明な樹脂様物質で厚く覆われ、その皮膜によって撚糸の安定した保存環境が維持されていたことが明らかにされている。

漆と推定される樹脂様物質の付着状態から、この編布は、秋田県五城目町中山遺跡出土の編布と同様に、漆を精製するための絞り布として使用されたと推定される。この編布を含めて山王廻遺跡出土の漆塗り関連資料の内容から、縄文時代の東北地方では広く漆製品の生産が盛んに行われていたこと、追川最上流域の山王廻遺跡においても木胎、籠胎漆器、櫛、耳飾り、彩色土器など、様々な漆塗り製品の製作が目覚しい発達を遂げ、精巧な漆塗り製品を日常的に生産していたことがあらためて確認された。

なお、この遺跡は、2500年前、地下水がきわめて安定した状態に保たれ、2～3m地下に埋没する有機質遺物、植物遺存体が最適条件のもとで保存されつけたと考えられている。このきわめて特殊な環境のもとに保存されてきた重要遺跡を永く後世に伝えるためには、地下水の流れが大きく変化することで遺物の保存状態が急速に劣化することのないように、地下水を安定した状態に管理し、環境を整備しておく必要がある。

さらに、山王岡遺跡は、追川流域の縄文時代晚期における拠点集落のひとつであり、多種多様な生活資材、物質文化が出土する。亀ヶ岡式土器、土偶、耳飾り、首飾り、腕飾りなどの土製・石製品、鹿角製装身具、石鏃など多様な打製石器、磨製石斧、石棒、石刀、独鉛石といった磨製石器、円盤状石器、磨石、凹石、石皿などの磨石器、骨角製の漁撈・狩猟具など、縄文時代晚期の出土遺物は実に多種多彩であり、縄文時代晚期の生活文化の豊かさをうかがうことができる。

また、植物の葉、茎、樹木、種子、ニホンジカ、イノシシ、サケ科魚類の椎骨などもみられ、出土する自然遺物の内容は多様であり、2500年前の人々の生活環境と身のまわりの資源の内容の豊かさを示している。

このように、山王岡遺跡は、縄文時代の人々の生活、文化、生業、集団関係、そして社会と自然環境に関するきわめて豊かな情報を提供する。ことに、本遺跡では実態のまだ明らかにされていない集落の構造とその変遷を調査することによって、晚期縄文社会に関する重要な手がかりが多数得られるものと期待される。

さらに、この遺跡の重要な特質のひとつは、縄文時代晚期から弥生時代前期にかけて継続して発展を遂げたこの地域の拠点集落の跡である点にある。本遺跡は、東北地方において縄文時代晚期から弥生時代前期にかけての変革期に人々がどのように生活し、いかなる文化、社会を構築したのかを追求することのできる、得がたい重要な遺跡である。この遺跡についての緻密な調査と研究によって、縄文時代から弥生時代にかけての文化・社会がどのような過程をへて展開したのか、変化したのかを明らかにし、さらに進んでその変動のメカニズムを解明することは、日本の歴史、文化の研究にとってきわめて重要であるといえよう。

なお、山王岡遺跡は、多種多様な有機質遺物、植物遺物を出土する埋沒有機質土層の厚い堆積が重要な特色となっている。この低湿地包含層は地下水の安定した保水状態によって保護され続けたものと考えられる。遺物・包含層・遺跡の保護にとって地下水が大きく変動せず、一定の状態を維持していることは大切なことと考えられる。今回の調査では、伊東の調査した1965年度の発掘区を確認し、その後の変化を精査し、今後の地下水保全のための対応策を併せて検討しておくことが重要な課題と考えている。(須藤)

註1 東北大学理学部植物園長鈴木三男教授の御教示による。現在分析途中であり、結果については、4次調査報告書で掲載予定である。

註2 名古屋大学文学部渡辺誠教授の御教示と写真提供による。

第1章 調査の目的と経緯

国史跡山王町遺跡は、宮城県栗原郡一迫町真坂山王に所在する。宮城、岩手、秋田の三県にまたがる、奥羽山系の秀峯のひとつである栗駒山（御川岳、最高峰大日岳、標高1628m）の西南麓、山裾を西から東南に開析する追川右岸の自然堤防上に本遺跡が立地する。遺跡は、東西240m、南北180mの広がりをもつ微高地にあり、北西を一迫川が流れ、南を長崎川が継ぐ。この微高地は、二つの河川にはさまれた合流点にあって、東西約10km、南北約5kmの一迫川沖積地のほぼ中央に位置する。遺跡の面積は、約62,000m²に及ぶ。遺跡の立地する自然堤防の標高は39m、周囲の沖積地や長崎川との比高は3m程度である。

1964年から1965年にかけて、東北大文学部考古学研究室は、伊東信雄教授の指導のもとに、3ヶ月間にわたる山王町遺跡の発掘調査を実施した。この調査で遺跡の北東に広がる低湿地の厚い包含層から多量の縄文土器、弥生土器、石器、朱塗り土製表身具、土偶、骨角器、漆塗り貝製容器、朱塗り櫛、腕輪、縫胎漆器、編布など、縄文時代晩期中頃から弥生時代前期にかけての多彩な遺物が層位的に出土し、この遺跡の重要性が明らかになった。ことに次のような重要な成果がえられた（伊東雄 1966）。

①厚さ3m程の包含層において50層を超す堆積層が認定され、層位的に晩期中頃から終末にかけての膨大な量の亀ヶ岡式土器が出土し、その型式変遷を明らかにできた。

②包含層最上層のⅢ層において、弥生時代初期の土器、石器などの遺物が多量に出土し、東北地方における成立期の弥生文化を理解する手がかりがえられた。

③包含層の下半は低湿地の有機質土層がシルト質砂土、粘土などと多数の互層となっており、縫胎漆器、朱塗塗り櫛、編布などの植物質文化遺物、タクミ、トチ、クリなどの堅果類、種子類、樹木、葉、茎といった植物遺存体が豊富に出土し、縄文時代の植物製の生活資材、表身具などの物質文化とその技術、植物質食料資源の内容を明らかにできた。

④晩期中頃から弥生時代前期にかけての土偶、土製・石製・骨角製の表身具、石製・骨角製の狩猟具といった多彩な資料がえられ、この変革期における物質文化の構成と変遷を捉えることができた。

1971年に、本遺跡は、縄文時代晩期の物質文化の豊かさと高い技術内容を知ることのできる得がたい低湿地遺跡として、国史跡に指定された。その後、一迫町教育委員会は国・県の補助によって、遺跡南東部を中心に戸隠公園の整備作業を進めてきた。しかし、遺跡の半分が一迫小学校の敷地であったため、全体的な整備にはいたらず、学校敷地を除いた公有地に盛土し、植栽を施し、あずま屋を設けるなどの部分的整備が進行した。

1995年に、史跡内西辺から中央部に敷地をもつ一迫小学校が移転し、その跡地全体が開地となり、史跡全面を整備することが可能となった。

この小学校跡地を含む史跡の整備に新たに取り組むにあたり、従来の調査資料では、全体的整備の計画を策定するには不十分であるため、遺跡における遺構群の埋没状態と範囲、遺物包含層の広がりと保存状態、形成時期、遺跡全体の微地形、有機質層の変性状況、地下水の滞水と流水、変動の状況をあらためて確認し、遺跡の範囲と構造を可能な限り正確に把握しておくことが急務となつた。ことに、今後の遺跡整備では史跡の活用といった観点からも、遺跡の古環境、住居跡、貯蔵穴、墓壙などの遺構復元が強く期待されており、史跡範囲内の遺構、



第1図 山王開遺跡周辺の縄文・弥生時代遺跡分布図 [Scale 1 : 50000]

(国土地理院発行「岩ヶ崎」「真板」転載)

包含層のあり方、古地形の確認調査が不可欠と考えられるにいたった。

また、木遺跡の特徴である低湿地包含層の保存を図るために、遺物を包含する有機質土層の保存状態、特に有機質遺物の保存に決定的な影響を与える地下水の状態を捉えておく必要が指摘された。さらに今後の整備のなかで、遺跡の古環境、ことに植生の復元を計画するうえで、包含層の埋没樹木、草本類など植物遺存体の調査が必要である、環境考古学的調査を含めた総合的調査が必要と考えられるにいたった。

1995年から、一迫町は、国、県の補助と指導をえて、今後の全体的史跡整備のために必要な遺跡構造の確認調査を、東北大文学部考古学研究室の協力のもとに1999年までの5ヵ年計画で開始した。第1年次には、遺跡南側の東西に亘る自然堤防の高まりの調査に取り組んだ。その結果、遺跡中央の散高地で、縄文時代晚期後半に属する住居跡の柱穴が多数検出された。ことに、K区の調査では、柱穴と焼土の広がりから住居跡2棟が確認された。さらに、K区東北隅では堅穴住居の壁と推定される掘り形が検出され、発掘区の北側と東側に遺構が広がることが確認された。また、K区南側の自然堤防南半部にも晚期の遺構群の広がりが予想された。

また、遺跡東部に設けたA～D発掘区では、縄文時代の陥穴、土塹、ピット、弥生時代の上塙、古代の住居跡、土壤などの遺構が検出された。しかし、遺構の密度は希薄であって、K区を中心とする縄文時代晚期居住域の東限が明らかになった。

さらに、北側、北西側に設けたE、F、G区の南北発掘トレンチでは、3棟の堅穴住居跡、配石遺構、5基の埋設土器などの晩期最終末から弥生時代前期にかけての遺構が次々と検出された。このような調査成果によって、本遺跡が縄文時代晚期中葉から弥生時代前期にかけての大規模な拠点集落跡であることがあらためて明らかになり、集落のひろがりについてもその主要部分が確認された。

1996年に第2次調査を行った。この調査では前年度に検出したK区の晩期遺構群の北側における広がりとF区

第1表 山王面遺跡周辺遺跡地名表

List of the prehistoric sites around the Sanno-gakoi site

No.	遺跡名	種別	西文	弥生	No.	遺跡名	種別	西文	弥生
1	埋場遺跡	包含地	早・前		22	国史跡山手溝遺跡	集落跡	晚	○
2	崎林H斜面跡	包含地	前		23	祇園遺跡	包含地	晚	
3	清水頭遺跡	包含地	○		24	町史跡向芳沢遺跡	包含地	前・晚	
4	鳴田前遺跡	包含地	中		25	小吉遺跡	包含地	前～後	
5	河童瀬遺跡	包含地	晚	○	26	町田遺跡	包含地	前・中	
6	青木畠遺跡	集落跡	中～晚		27	通羅下遺跡	包含地	縄文	
7	南沢町遺跡	包含地	中	○	28	小畠前遺跡	集落跡	前・中・晚	○
8	ぬ場宿遺跡	包含地	中・晚		29	上野原遺跡	包含地	○	
9	門前遺跡	包含地	中		30	上野遺跡	包含地	中・後	
10	法輪渓遺跡	包含地	○		31	堀川A遺跡	包含地	前	
11	青符八遺跡	包含地	早～中	○	32	堀川B遺跡	包含地	中	
12	青符B遺跡	包含地	中・晚		33	金矢遺跡	包含地	晚	○
13	青符C遺跡	包含地	○		34	御日船跡	包含地	城館なし	○
14	青符D遺跡	包含地	前		35	妙教寺遺跡	包含地	晚	
15	青符E遺跡	包含地	晚		36	穴ノ原遺跡	包含地	早・中	
16	妙円遺跡	包含地	晚		37	花栗遺跡	包含地	○	
17	宝ノ沢遺跡	包含地	晚	○	38	堂の沢遺跡	包含地	早・晚	○
18	鶴町A遺跡	包含地	○		39	北沢遺跡	包含地	晚	○
19	高田T遺跡	包含地	晚	○	40	探鉢遺跡	包含地	中	
20	高田T遺跡	包含地	晚	○	41	赤新田遺跡	包含地	早	
21	要害原遺跡	包含地	○		42	袖山遺跡	包含地	前	○

の前期弥生時代竪穴住居跡を精査した。K区の北側と東側に設けた発掘区では晩期後半の土壌群、ピット群が検出された。そして前年に竪穴住居跡の一部と推定された掘り形は弥生時代のV字溝であることが判明した。溝の幅は1.5m、深さは1mに及ぶ。さらに、複数のトレンチを設けてこの溝を追査した結果、V字溝は東南と西北にそれぞれ約70mのび、全長140mを超すことが確認された。

また、F区の弥生時代前期後半の2・3号竪穴住居跡については西側に調査区M区を設け、遺構全体の精査を行った。この住居跡には2条の壁溝がめぐり、2号住居が径約6m、3号が2号の拡張住居で径8m、深さはいずれも15cm程度である。炉跡は2基が重複している。5本柱、中央に地床炉をもつ住居であり、2棟がほぼ同一構造である。また、この住居の西側に約3m離れて同時期の8号住居跡が新たに検出された。

さらに自然堤防の北側にひろがる低湿地に臨むI区で、V字溝から北にのびる幅1~3.5m、深さ30cm程の浅い溝が検出された。この8号溝の埋上からは山王Ⅲ層式土器が出土し、溝は弥生時代前期に機能していたと判断された。また、溝の東側には土手状の高まりが旧河道にそっており、自然堤防と土手・旧河道との間のくぼ地に洪水面層と推定される灰白色シルト質土層の広がりが認められた。

この8号溝の南から北にのびる延長部の断面をI区北壁で掘り下げて検討した結果、溝が掘り込まれている下層の包含層601層から605層にかけて晩期終末から弥生時代前期前半の土器が出土した。さらに下層の606層から611層では大洞A式の中・古段階の土器が出土し、晩期後半の包含層が確認された。また、この611層からは、堅杵、加工木材など木製品が出土した。堅杵は晩期後半大洞A式期のもので、全国的にもきわめて貴重な資料である。仙台市中在家南遺跡(工藤地 1996)など弥生時代中期の堅杵とはまったく異なる特徴がみられる。また、611層からは、ヒエとアサの種子が出土しており、晩期後半にこの種の栽培植物がすでにこの集落で利用されていた可能性が指摘された。

第1、2次調査の成果をうけて、1997年の調査では、つぎのような調査目的が設定された。

- ① 遺跡中央部の低湿地に臨む平坦地にのびる8号溝と自然堤防との地形的関係の把握
- ② 遺跡東北部に広がる低湿地の微地形、1965年度発掘区周辺堆積層の把握
- ③ 8号溝北側にひろがる低湿地における利用状態－水路跡、水田遺構など－の把握
- ④ 北西部を流れる旧河道と低湿地との関係の解明
- ⑤ 晩期遺構の北西部への広がりの確認
- ⑥ 弥生時代生活面の広がりの確認
- ⑦ 遺跡東北部にのびる自然堤防上における遺構の確認

こうした縄文時代晩期中葉から弥生時代前期にかけてのII王畠遺跡において営まれた集落の構造、規模、その変遷について十分な検討資料を確保するために、第3次調査では、1、2次調査地をさらに北側と西側へひろげより広い範囲で、層位的、平面的に遺構の検出、精査確認を進めた。さらに、遺跡の北端部では1965年度に調査された低湿地の有機質遺物包含層の現状把握に努めた。

(大場、須藤)

第2章 調査の概要

第1節 調査の方法

第3次調査では、1996年度までの調査で確認された史跡中央部の低湿地、旧河道から南側を東西に引なりにのびる自然堤防の高まりにかけての微地形の把握を目的に、1996年度のI区の北側に東西24m、南北12mの発掘区P区を設けた（第1・2回版）。この調査区において西辺にのびる旧河道の東と8号溝の北側にひろがる灰白色シルト、砂質土の広がりを確認し、旧河道の一部とともに層位的に掘り下げ、その河道が機能した時期、シルト、砂質土による埋没の過程を確認することをめざした。

また、灰白色シルト質土層の広がるくぼ地（第9号溝跡）では、水田土壤の可能性を検討するため、イネのプランツオパールの採集と分析を行った。分析資料の採集は、1m方眼区域割で、灰白色シルト質土層の下に広がる灰色粘土層から採集し、50地点で資料のサンプリングが行われた。採集土壤に汚染を生じないように極力注意し、資料採集と分析はバリノ・サヴェイに依頼した。

さらに、P区東半で検出された群衆の集中・配石遺構について、遺構確認のため、実測のち、土壌の検出、精査、断面観察を行った。特に埋設土器、埋土出土遺物を精査した。掘り下げた土壤の上層は東北大考古学研究室で2mmの金属篭装置で水洗し、微細遺物の抽出と検討を行った。

遺跡北東部の低湿地では、一迫小学校体育館の基礎部分の内側に東西36m、南北23mの範囲で発掘区Q区を設定し、1965年度発掘調査区の掘り形を確認するとともに、この調査区の北、東、西側において遺構、包含層の検出に努めた（第1・3回版）。また、旧発掘区については、包含層の堆積状態を確認するために、北壁と西壁を掘り出し、検討した。また、低湿地包含層における植物遺存体の包含状態、湿地埋没の進行状態などを明らかにする目的に、植物学、地理学の専門家に包含層の土壤分析を依頼した。

遺跡東北部に設けた調査区Q区の西側において、遺跡の北側への広がりを確認するために土器包含層、土壤などの遺構の調査を入念に進めた。Q区東側に広がる自然堤防の高まりに、発掘区R区を設けて包含層と遺構の検出を行った。この地区は1962年に明治大学の杉原莊介教授が弥生土器の調査を目的に発掘し、縄文時代晩期の土壤群が検出された場所に相当し（明治大学考古学博物館 1991）、晩期遺構の存在が予想された。

また、P区の南、1996年度に行った第2次調査のK区拡張区の北西にS区を設けて7号溝の北西方向への延長部分を追求し、西端部の精査を行った。

第2節 発掘調査区の設定

調査のための基準点は国土座標第X系に基づいている。山王廻遺跡地内には、1987年および1996年にコンクリート杭による基準点が設置されており、今回の調査ではそのうちのA点、B点、基準点1～3を使用した。各点の座標値を第2表に示す。なお、第1次および第2次発掘調査で任意に設定した基準点は、仮設の基準杭を使用しており、数年にわたっての原位置保持に耐えられるものではなかったため、本次調査では基準としていない。

第2表 山王遺跡内基準点一覧

List of bench marks in the Sanno-gakoi site

点名	座標値		
	X	Y	Z
基.1	-140109.529	10324.855	38.240
基.2	-140009.607	10412.411	38.815
基.3	-140000.693	10418.339	37.821
基.4	-139997.982	10202.832	37.964
L1L1.111-4	-139985.753	10386.946	-

また、トータルステーションの使用により座標値の有効桁数に制限が生じるため、以下の式で国土座標値を3桁に変換し、調査の際の座標値としている。

$$X \text{座標値} = (\text{国上方眼座標の} X \text{値}) + 140,000$$

$$Y \text{座標値} = (\text{国上方眼座標の} Y \text{値}) - 10,000$$

以下座標値については、この調査座標値を用いる。

グリッドの設定にあたっては、第1次、第2次調査と同様の基準で行った。遺跡の南西に原点を設定し、南北を基軸とした辺3mのグリッドを基準としている。東西軸には北に向かってAA、AB、AC、…南北軸には東に向かって1、2、3、…と名称をあたえた。グリッド名は南側の東西軸名および西側の南北軸名をその区名としている。原点(AA, 0)の座標値は(-153, 198)である。

原則的にはこの座標軸を使用したが、一部Q区に関しては、設定箇所である小学校体育館跡地に建物の基礎が残っているため、基礎の形に沿って軸を設けた。この場合の原点の座標値は(-5.5, 339)である。3mおきに、西北-東南軸にX1、X2、…、南西-北東軸に、Y1、Y2、…と名称を付した。グリッド名は他調査区と同様に南西の交点軸名をあてている。

測量については、トータルステーションおよび平板を使用した。平面図については遺構および遺物包含層の分布と遺物の出土状況を記録した。あわせて写真撮影を行った。また、遺物の出土地点、垂直位置については、トータルステーションによる記録を可能な限りもれなく行った。

なお、植物の種子、骨、貝、玉類などの微細遺物を悉皆採集するために、遺構の埋土、包含層の一部を東北大考古学研究室製作装置の改良型フローティション装置2台と2mm金属筋によって水洗し、人工遺物、自然遺物の選別を行った。

第3節 調査の経過

第3次調査の発掘区はO・P・Q・R・S区の5地点である(第1～3回版)。

このうちQ区については1995年度に解体した一迫小学校の体育館基礎の内側に設定した。これは1964・65年の調査区を全体的に取り込んだものである。このQ区の表土除去を7月28日から行った。表土の除去中、体育館のほぼ中央で径20～30cmの円礫が方形に敷き詰められていることが判明したため、礫の敷き詰められた中央とその東西とを三つの区に分けて調査することとした。7月30日までに中央区の礫を撤去した。この中央区をさらに円礫の多い南側と比較的少ない北側とに区分けし、Q区をそれぞれQ東区、Q西区、Q北区、Q南区とした。翌、31日にはQ東区の残った表土を除去し、遺構確認面まで掘り下げを進めた。

8月4日に、P区発掘区を設定するとともに、Q西区の表土を除去した。Q東区では5層からの精査、Q西区においても11層から層位的に慎重に調査を行った。

8月5日にP区北区と南区の境に幅60cmのベルトを設定した。Q東区では5層上面で近世の墓や、第10号土器埋設土壙などの遺構を検出した。

8月6日にはP区の東西ペルトの3a層から石庖丁破片1点が出土し、P区発掘区東半で弥生時代の包含層である8a層を検出した。P区発掘区南壁及び北壁に沿って幅50cmのサブトレントを設定し、下層の堆積状況を確認した。8月6日から8日にかけてQ東区の近世墓の精査を行った。

8月18日にP区では10層（黒褐色土層）を検出した。この層において配石遺構、土器埋設土壙、焼上遺構が検出され、弥生土器など多くの遺物が出土した。遺跡の微高地東北端に設定されたR区では1962年の明治大学の発掘区を確認した。

8月19日に、Q西区南端および南西端にトレントを設定し、下層の堆積状況を確認した。R区では多くの遺構が検出された。8月21日にQ西区で確認された第14号土器埋設土壙を精査した。R区では遺構の性格を十分に検討するため、R（東）区の西端で南北方向にのびるトレントをT字形に拡張してR西区の設定を行った。8月22日にR区の2b層中から縄文晩期十隅の上半部とともに晚期後半の土器、石器などの遺物が出土した。8月25HにP区の南北ペルトを除去した。8月26日にQ南区で1965年の発掘区の西北部を検出した。8月27日には、P区において第3号配石遺構を検出し、精査を行った。またR西区において4層を検出面とした遺構群の精査を開始した。この調査区における精査は9月9日まで行った。

8月28日にP区で第4、5号配石遺構を検出し、精査を行った。また、Q西区では南東壁に沿って小トレントを設定し、包含層、遺構、埋土の確認を行った。8月29日にP区において裸群のひろがりの中で第3号焼土遺構を検出した。R西区では2b層中から土製品が出土した。9月1日～15日にQ南区で1965年の発掘区を掘り下げ、発掘区の北壁を精査し、観察、記録した。9月2日にP区で第1、2号焼上遺構を検出した。9月8日にP区西側の河川跡南端に深掘区を設定し、9日から精査を行った。9月12日にはQ西区で竪穴状遺構を検出し、24、25日に精査を行った。埋土から樹木の炭化物破片が比較的多く出土した。

10月28日にP区で第11、12、13、15号土器埋設土壙を検出し、遺構の半截掘り下げを行い精査した。

8月22日に山形大学阿子島功氏が来跡し、地形の分析を行った。9月11日および10月4日に弟木二男氏、吉川昌伸氏が来跡し、植物遺存体の出土状況について観察を行った。また、有機物遺物処理の方法について助言をいただいた。9月11日、バリノ・サーヴェイによる自然環境分析を目的とした土壤サンプルの採取が行われた。9月13日午後2時から現地説明会を開催した。

遺構および遺物の出土状態の実測、写真撮影、記録については8月8日から11月13日にかけて随時行った。

11月13日に遺構、発掘区壁面包含層堆積関係の実測図、土層観察表の作成を終了した。

（大場）

第3章 調査の成果

第1節 層序

P区における層序関係

P区の堆積層の関係は複雑であるが、基本的に広範囲の整地盛土を挿土すると、旧耕作土、表土がひろがり、この旧表土、耕作土、旧水田床土層の下に遺物を包含する堆積層、無遺物層が堆積している。この盛土、旧表土以下の層を1層から2、3a、3b、4、…、12層まで22枚の堆積層を認定した（第3～5図、第3表）。

1層は白色砂粒や鉄分を含んだ灰黄褐色シルト層である。2層は、暗褐色シルト層で、やはり白色砂粒と鉄分を含んでいる。これらの層は、1995年に行った第1次調査のE～J区で検出された2層に対応し、河川氾濫土壌と推定される。

3層は黒褐色で粒度、含有物の違いからa、bの2層に細分される。3a層は、黒褐色シルト層で白色粒子や鉄分を含んでいる。層中からは、土崩器が出土している。また、弥生時代中期の筋縫形石庖丁破片が1点出土している。この層は、E～J区の3層に対応する。3b層は、黒褐色砂質シルト層で白色粒子や鉄分、炭化物をわずかに含んでいる。3b層は3a層と4層の漸移層であり、P区北東部にひろがる。

4層は灰黄褐色シルト層でブロック状の灰白色火山灰を多量に含み、鉄分や白色粒子を少量含んでいる。4層は、遺跡をひろく覆っており、この灰白色火山灰は、10世紀頃の火山灰と推定されている（付章1参照）。

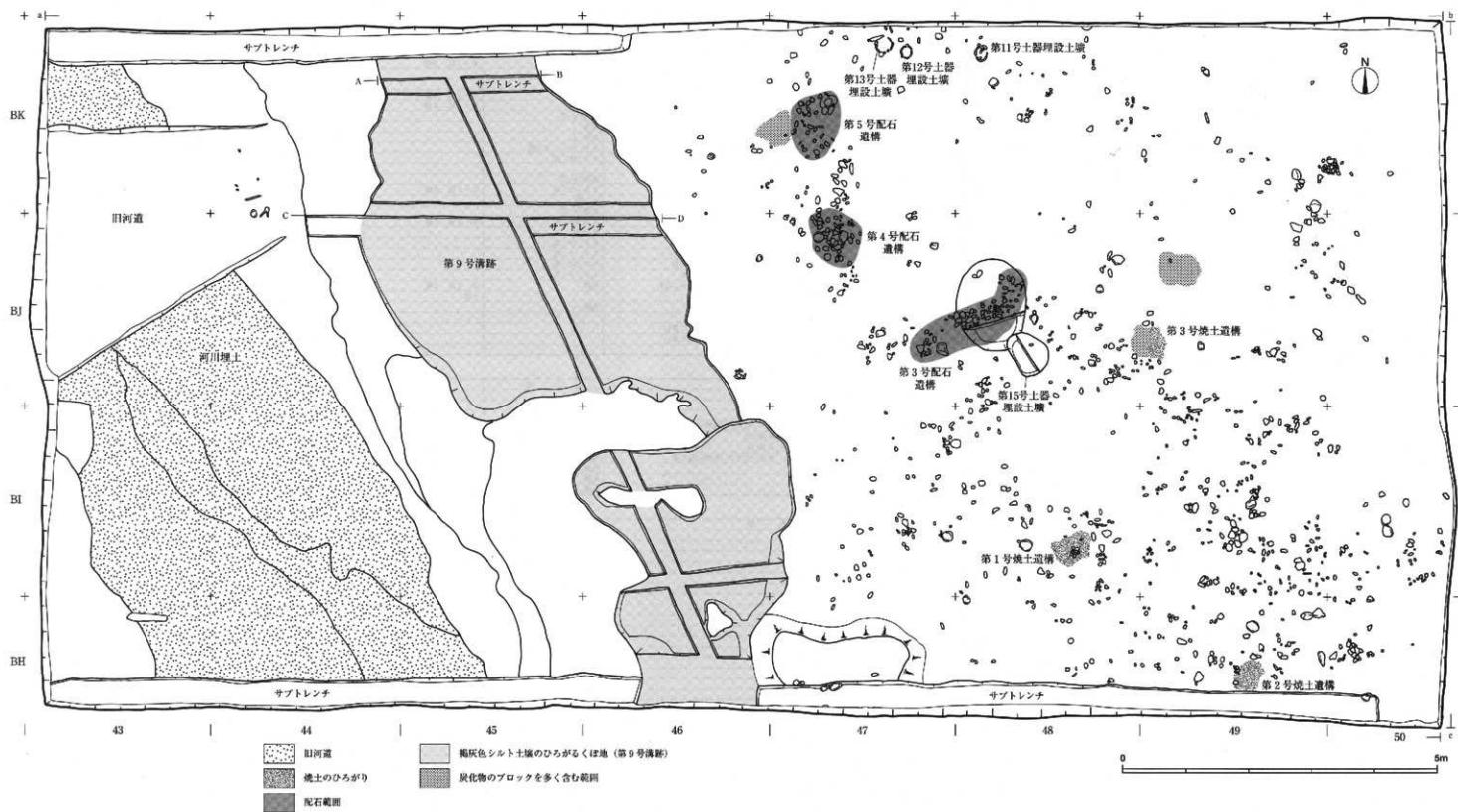
5層は灰黄褐色砂質シルト層で、鉄分の含有量の違いからaとbの2層に分けられる。5a層は、鉄分が多く、白色粒子、炭化物を含み、4層と5b層の漸移層といえる。5b層は、5a層より鉄分が多く、炭化物と白色粒子が含まれる。E～J区にひろがる5層に対応する。遺物は極めて少ない。

6層は、灰黄褐色シルト質砂層である。少量の鉄分とブロック状の砂が含まれる。6層は、P区西側で確認されている。

7層はシルト層で、土色や鉄分の含有量の違いからaとbの2層に識別された。7a層は暗褐色をおび、鉄分の含有量が著しく、炭化物と白色粒子が若干含まれる。7b層は褐灰色を呈し、7a層よりも鉄分が多い。

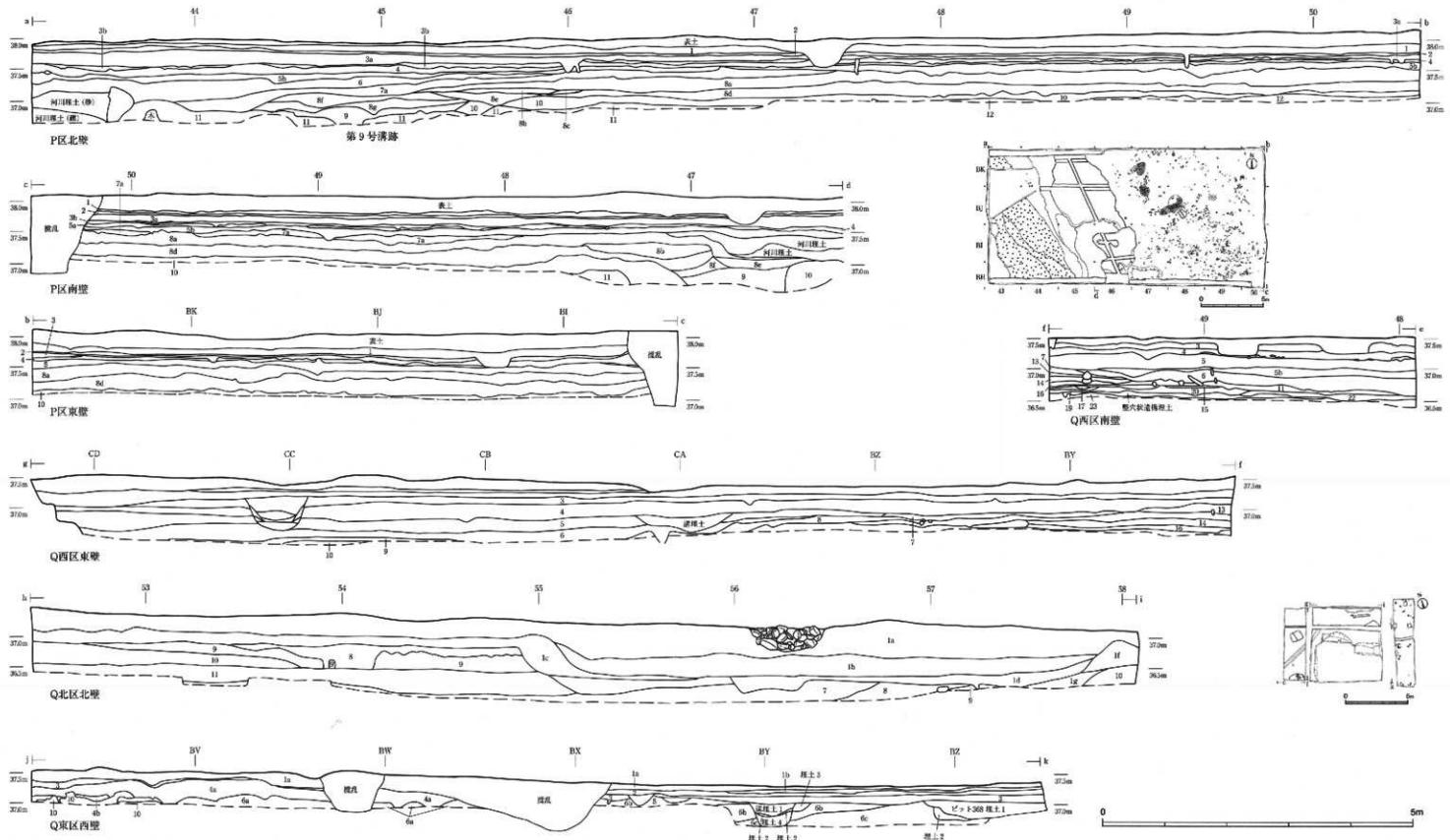
8層は灰黄褐色シルト層で粘性が強く、土色や鉄分の含有量の違いからa～hの8層に細分された。8a層は鉄分を多量に、炭化物をやや多く含む。8a層はP区東側で厚く、最大で25cmに達する。遺物は出土せず、洪水層と考えられる。G～I区の6層に対応する。8b層は灰黄褐色で鉄分が8a層よりも多い。8c層は灰黄褐色で鉄分を多量に含み、8b層よりも粘性が強い。8d層は灰黄褐色で鉄分が8a層よりも多く含まれる。H～J区にみられた7層に対応する。8e層も灰黄褐色で鉄分と炭化物を含む。P区西側にひろがる8b層の下層にひろがり、局的に分布している。8f層は褐灰色砂質シルト層で鉄分と炭化物を多量に含む。P区西側の7、8e層の下層にひろがり、分布範囲は8e層とほぼ一致する。8g層は褐灰色砂質シルト層で、鉄分と炭化物を含む。P区西側の8f層の下層にあって、8e、8f層と分布範囲がほぼ一致する。8h層はにぶい黄褐色を呈し、鉄分や炭化物を含んでいる。

これらの層のうち、8b、8c、8e～h層は、P区にひろがる10層が西側に向かってゆるやかに傾斜する斜



第2図 山王園遺跡P区遺構検出状況平面図

Plans of archaeological features at the P trench in the Sanno-gakoi site



第3図 山王園遺跡P・Q区縦面図

Stratigraphic sections of the P.Q trench in the Sanno-gakoi site

面と河川跡の間の幅6m程に分布しており、ことに8e～h層は、第8号溝の北にのびるくぼ地（第9号溝跡）の覆土である。

9層は暗青灰色シルト層で鉄分と炭化物を含み、グライ化している。P区西側および旧河川の層位確認のために設定した北壁西部の小トレンチ内で検出された。

10層は黒褐色シルト層である。炭化物、鉄分、白色粒子を含み、径1～5mmの礫が含まれる。P区の遺物のはほとんどが10層から出土した。配石遺構、埴土遺構、土器埋設土壤も10層下で検出された。遺物は弥生II期の山王III層式土器が主体であり、この時期の生活面であったと考えられる。P区東側に分布する8d層の下層にあり、西側に向かって傾斜する。1995年に調査したG、I区の層序の8層に対応する。

11層は黒色シルト層で炭化物を多量に含み、径3mm程度の礫を含む。縄文時代統期V期（人洞A式期）～弥生II期の遺物が出上している。P区北西側に設けた小試掘トレンチと旧河川跡で確認された。

12層は砂礫層である。P区東側の10層の下層にひろがる。無遺物層である。

（水見、西片、福壽）

Q西区における層序関係

北東のQ発掘区では、1層から25層まで25枚の堆積層が確認されている。ここでは遺物包含層である12層から25層について記述する。12層は黒褐色シルト層である。鉄分を多量に、白色粒子と径5～10mmの木材の炭化物をまばらに含む。13層は黒褐色シルト層で、鉄分を多量に、白色粒子と径5～15mmの炭化物を含む。14層は多量の鉄分と径5～15mmの炭化物を含む黒褐色粘土質シルト層である。15層は黒褐色シルト質砂層で、鉄分と径3～5mmの炭化物をわずかに含む。16層は黒褐色シルト層である。下部は灰褐色を呈し、鉄分と白色粒子、径8～12mmの炭化物を非常に多く含む。17層は暗褐色砂層である。鉄分と径1～2mmの炭化物を若干、白色粒子をまばらに含む。18層は鉄分と径1～3mmの炭化物を若干含むにぶい黄褐色シルト質砂層である。19層は褐色シルト層で、鉄分と径2～3mmの炭化物を多量に、白色粒子をまばらに含む。20層は黒褐色シルト層で、鉄分と白色粒子、径7～15mmの炭化物を含む。21層は黒褐色シルト層で、鉄分と白色粒子、径5～10mmの炭化物をまばらに含む。22層は暗褐色シルト層で、鉄分と径5mmの炭化物を多量に、白色粒子を若干含む。

23層は褐灰色シルト層で、鉄分と径1～3mmの炭化物を比較的多く含む。23層上面で弥生IIa期の竪穴状遺構が検出され、竪穴状遺構は23、24、25層に掘り込まれている。24層は褐灰色シルト層で、鉄分と白色粒子、径1～2mmの炭化物をまばらに含む。25層にはぶい黄褐色シルト層で、鉄分をまばらに、径3mm程度の炭化物を比較的多量に含む。

10～25層は遺物包含層である。西側から東側に向かってゆるやかな傾斜をもってひろがっている。縄文時代晩期IV期から弥生時代IIb期の遺物が層位的に出土しており、10～17層が弥生IIb期に、20、22層が弥生IIa期に、24、25層が弥生I期の堆積層と考えられる。

（坂田）

Q東区における層序関係

1965年に泥炭層を調査した発掘区の東よりの調査区Q東区では、表土、盛土を除いて1a層から6c層まで10枚の堆積層が確認されている。

1層は灰黄褐色シルト層である。鉄分の含有量により、aとbに細分される。1b層の方が1a層よりも鉄分

を多く含む。2層は明灰黄褐色シルト層である。3層は灰黄褐色シルト層で炭化物や白色粒子を含む。4層はシルト層であり、土質と色調によりa～dに細分された。4a層が褐色、4b層がにぶい黄褐色である。4b層は区南端付近に分布する。5層はにぶい黄褐色砂質シルト層であるが、部分的に黄褐色や暗褐色の砂層となる。6層のくぼみに堆積している。第1、2次調査のE～J区基本層序の10層に相当する。6層は砂礫層であり、土色によって3層に細分される。6a層はにぶい黄褐色、6b層は赤褐色、6c層は暗褐色で、いずれも礫の大きさは径10cm程度である。6層は北から南に向かってゆるやかに傾斜している。いずれの層も遺物の包含は少ない。

5層上面で遺構が確認されている。

Q北区における層序関係

1層は旧体育館建設に伴う盛土、整地土層で、a～gの7枚で構成される。2層は鉄分を含むにぶい黄褐色砂質シルト層である。3層は灰黄褐色シルト層で、上部が酸化している。4層は灰黄褐色シルト層で灰白色火山灰の小ブロックを多量に含む。5層は暗褐色砂質シルト層で、鉄分、マンガンが多量に認められる。6層は純い黄褐色シルト層で、鉄分、マンガンを含む。5、6層には砂の薄い層がみられ、水成堆積層と考えられる。7層は灰黄色粘土層で上部に鉄分を多く含み、西側ではグライ化して灰色になる。8層は黄褐色砂層で、炭化物を含む。Q東区の5層、E～J区の10層に相当する。9層は炭化物を含む遺物包含層であり、黒色シルト層である。出土する土器は縄文晩期Ⅳ期の大洞C₂式期のものであり、9層は晩期中頃の堆積層と考えられる。10層はにぶい黄褐色砂礫層で、主に径5cm程度の小礫で構成されている。

Q北区では、8層から下の層は東から西へと傾斜して堆積している。

R区における層序関係

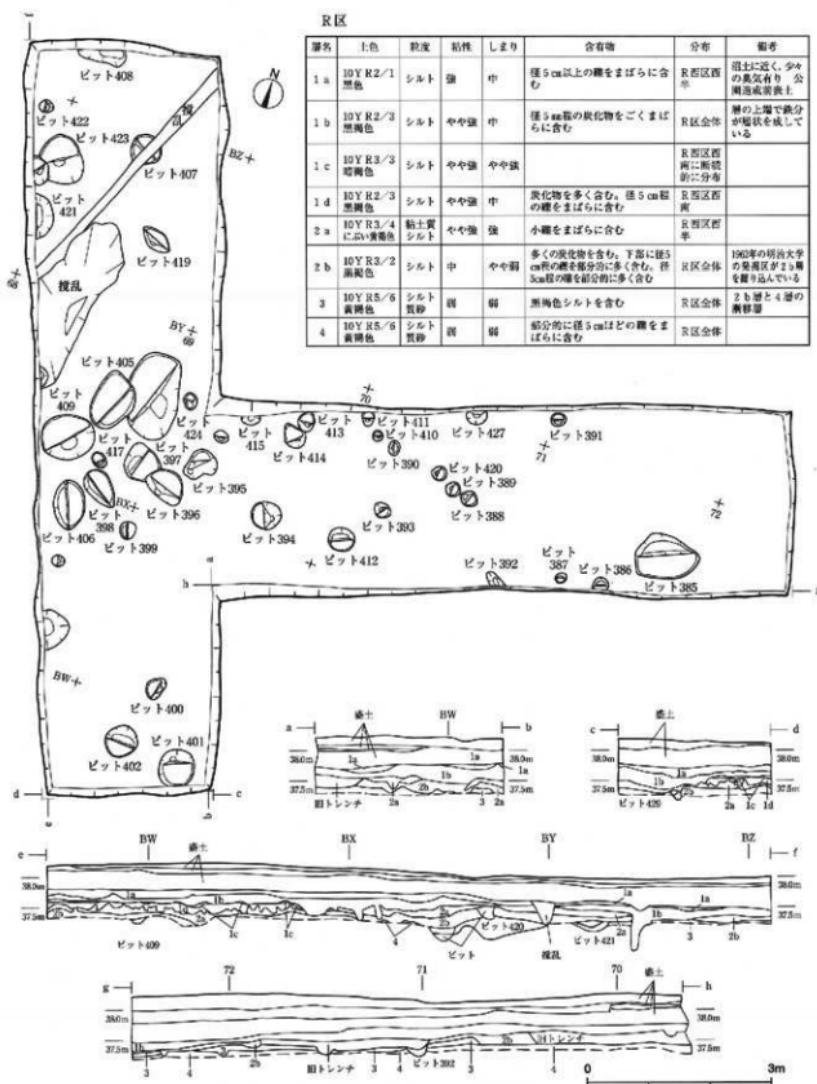
遺跡北辺のR区は自然堤防の突端にあたる。最上層は史跡公園造成時の50cm程の盛土が覆っている。盛土の下に1層から4層まで8枚の堆積層が確認された。1層はシルト層であり、色調やしまり、含有物によってa～dの4枚に細分される。1a層は黒色で、径2cm程の礫を含む。R西区に分布している。1b層は黒褐色で、層の上面に鉄分が酸化し、層状をなしている。しまりが弱く、径5mm程度の炭化物をまばらに含む。R区全体に分布する。1c層は暗褐色であり、R西区の南側にひろがる。1d層は黒褐色であり、炭化物を多く含む。R西区南側に分布する。

2層は粒度や色調によってa、bの2枚に細分される。2a層は2b層に比べると、粘性があり、にぶい黄褐色粘土質シルト層であり、礫をまばらに含む。R西区の南側に分布する。2b層は黒褐色シルト層であり、1b層に類似するが、より多くの炭化物を含む。下部に径5cm程度の礫を含む。R区全体にひろがる。

3層は2b層と4層の漸移層である。4層は黄褐色シルト層であり、R東区の西側からR西区の南側にかけて径5cm程度の礫を多量に含む。E～J区の10層に相当する。

1962年に明治大学が行った発掘区がR西区南側からR東区において一部検出されており、2b層から掘り込んでいる。また、1a～2b層からガラス片や陶器片が出土しており、この層は擾乱を受けていると推定される。遺物は2b層から最も多量に出土し、縄文晩期Ⅳ期（大洞C₂式期）から弥生Ⅱb期（山王Ⅲ層式期）までの土器が出土している。弥生Ⅱb期の遺物が多い。遺構は4層上面で検出されている。

（鹿久）



第4図 山王塙遺跡R区発掘調査区の検出遺構平面図とトレンチ壁面図

Plans and sections of the R trench in the Sanno-gakoi site

第2節 遺構

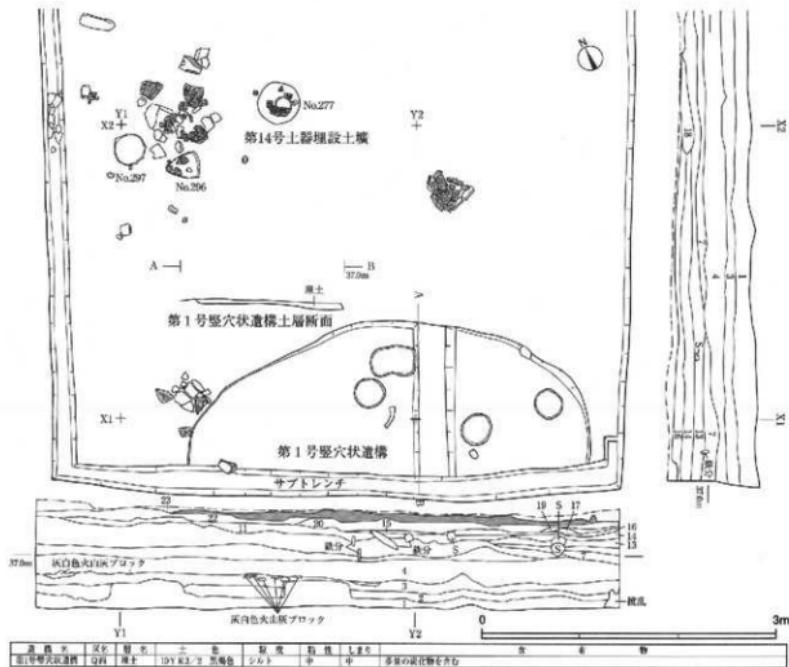
遺構の概要

第3次発掘調査では、Q西区で弥生時代前期の竪穴状遺構1基、P区で配石遺構3基、土器埋設土壙6基、弥生時代前期以後のものと推定される溝跡1条が検出された。また、第2次調査で検出された第7号溝跡の西側延長部を精査した。ピットは各調査区において多數検出されており、ここでは遺物の出土しているピット6基をとりあげた。これらの遺構の大部分が弥生時代に属するが、近世墓がQ東区において1基検出されている。

1) 竪穴状遺構

第1号竪穴状遺構 (第5図、図版3-2)

Q西区の南端において竪穴状遺構1基が検出され、その北半分を掘り下げ精査した。遺構は23層の上面から掘り込まれている。規模は、東西4.1m、南北1.5mで、全体のプランは径4m程度の不整円形を呈するものと推定される。北壁から東壁にかけて壁の立ち上がり認められ、東側で最大5cmである。ただし、西側では明確な立



第5図 山王開跡Q西区第1号竪穴状遺構・第14号土器埋設土壙平面図と発掘区南壁・東壁断面図

The excavated plans and sections of the western part of the Q trench in the Sanno-gakoi site

ち上がりが捉えられなかった。埋土は1枚で、多量の炭化物を含む。炭化物集中地点が数ヶ所でみられ、特に東側で多く認められる。遺構の底面には凹凸があるが、柱穴や炉跡は検出されなかった。

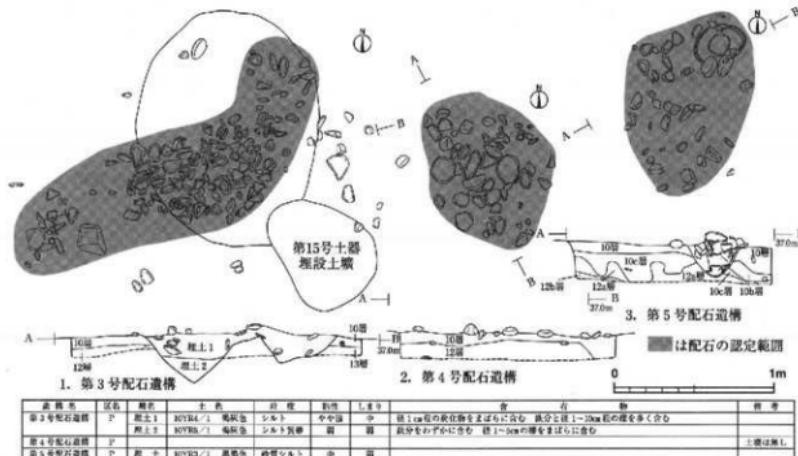
埋土中から土器、石器、樹木質の炭化物が出土した。土器は晩期VI期（大洞A式期）から弥生II期の深鉢（第16図7、8）、弥生I期（山王IV上層式期）からII期の甕（同図5）と壺（同図10）、弥生IIa期（青木畠式期）の深鉢（同図13）と高杯（第5図版7）、弥生IIb期（山王III層式期）の甕（第16図6）と高杯（同図9）がみられ、石器では石錐（第10図版21）、楔形石器（第11図版1）などが出土している。

この堅穴状遺構は、層位、出土遺物の検討から弥生IIa期に属すると判断される。（坂田、鈴木、羽石、真田）

2) 配石遺構

遺跡の所在する自然堤防の北西部に設けたP区からは中央付近と東半部において3基の配石遺構が検出された（第2図版、図版1-1、第2図）。これらの配石遺構は全て10層上面で確認された。第3号配石遺構はP区中央東よりB区48区で検出され、西側に2m程離れて第4号配石遺構、その北側に1.2m程の位置に第5号配石遺構がある。第5号配石遺構の北東に約80cm離れて第13号土器埋設土壙が検出されている。配石遺構はいずれも椭円形に疊が密集しており、形態、規模は共通している。第3、5号配石遺構では浅い不整椭円形の土壙が確認されている。配石の埋土や周囲からは土器や石器が多く出土している。検出層位、出土遺物から配石遺構群は縄文晩期VI期から弥生II期の遺構と考えられる。

山王廻跡では第1次調査で第1号配石遺構、第2次調査で第2号配石遺構が検出されている。第1号配石遺構はG区中央に位置し、9層（G区基本層序）を掘り込んでいる。今回検出されたP区の配石遺構群とは10m程



第6図 山王廻跡P区検出配石遺構平面図・断面図

The stone concentrations of the P trench in the Sanno-gakoi site

の距離である。第1号配石遺構の上部や周辺では弥生IIb期の山王III層式土器が出土しており、P区の配石遺構よりやや新しい遺構とみられる。第2号配石遺構はさらに西へ約40m離れたE区で検出された。配石の下に土壌が確認されている。

(西井)

第3号配石遺構(図版2-1、PL.1-1、第6図1)

P区東のB J 48区10層上面で検出された。配石の下部で土壌のひろがりを追求した。土壌は、12層まで掘り込まれていた。土壌は長軸1.4m、短軸1.1mの梢円形であり、深さは最大で30cmである。配石の範囲は、土壌南半部で幅60cm、長さ2m程のひろがりをみせる(第2、6図1)。配石は径5~12cmの円錐で構成され、特に土壌の西南側で長軸1.0m、短軸0.5mの範囲に密集している。土壌の壁はゆるやかに立ち上がる。埋土は2層確認された。埋土1は褐灰色シルト層で鉄分と炭化物をまばらに含む。配石を構成する謫が埋土1に落ち込んでいる。埋土2は褐灰色シルト質土層で鉄分を若干含み、径1~5cm程の礫を含む。掘り込みは明確であるが、底面は凹凸が著しい。

縄文晩期Ⅵ期の深鉢(第13図3)、弥生Ⅱ期の甕(同図1)、弥生Ⅱ期の長頸甕(同図2)が埋土1から出土している。配石中には蛤刃磨製石斧(第12図版2)、石皿(第13図版7)が含まれていた。

配石の下部の土壌は、出土遺物が多く、配石が埋土に落ち込んでいることなどから墓壙の可能性がある。この土壌の南側の一部は弥生I期から弥生II期に属する第15号土器埋設土壌と重複し、15号土器埋設土壙が新しい。第3号配石遺構は層位的関係、出土遺物、15号土器埋設土壙との遺構重複関係から弥生時代Ⅱ期に属すると考えられる。

(西井、小原)

第4号配石遺構(第6図2)

P区の中央付近のB J 47区の10層上面で検出された。礫のひろがりは長径1m、短径0.8mのはぼ梢円形を呈する。配石遺構の下部において土壙は確認できなかった。配石は径5~20cmの円錐で構成されている。

配石及び周囲からは器面に朱が塗布された弥生I~IIa期の高杯脚部(第4図版1)、弥生I期の深鉢(第13図4)、不定形石器(第11図版2)、石錐(第10図版19)が出土している。

第4号配石遺構は検出層位、出土遺物より弥生I期ないしII期に属すると推定される。(西井、福壽、竹原)

第5号配石遺構(図版2-2、第2図版、第2、6図)

P区の北東部B K 47区の10層上面で検出された。配石の範囲は、長径1.1m、短径0.8mの不整梢円形である。配石には径10cm程度の円錐が主として用いられ、磨石1点(第12図版4)が出土した。配石の下層の一部では炭化物の薄い層がひろがっている。配石から、弥生I期の深鉢(第13図5)が出土している。

配石下部の土壙は第5号配石遺構の北半に位置し、長径30cm、短径20cmの梢円形を呈する。10層上面で検出され、12層まで達している。深さは20cmである。土壙の埋土は黒褐色砂質シルト層であり、土器が埋設されていた。この埋設土器は外側に縄文時代晩期から弥生時代前期の深鉢の体部下半(第4図版2、PL.5-2)、内側に弥生I期とみられる深鉢(第4図版3、PL.5-3)が入れ子状に出土した。いずれも正立した状態である。内側の小型深鉢はほぼ完形であり、類い口頭部をもち、体部全体にLR縄文が施された上器である。外側の深鉢は底部が

わずかに残存している。

第5号配石造構は層位の関係、出土遺物によって、縄文時代後期VI期から弥生時代前期に属すると考えられる。

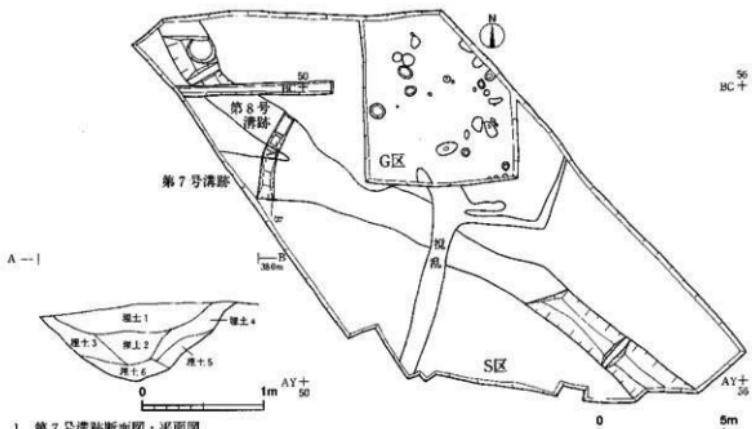
(鹿又、神田)

3) 溝跡

第7号溝跡（図版4-2、第2図版、第7図）

1996年度の第2次調査で精査された第7号溝跡の延長部分にあたる。N区の微高地中央部を南東から北西にのびる7号溝はS区西端において分岐し、北に折れてI南区の8号溝に連なる。また、一方（7号溝）は西にのびることが確認された。

S区における第7号溝の幅は約1.6m、確認面から底面までの深さは約65cmである。埋土は6枚堆積している。



第7図 山王遺跡7、8号溝跡平面図・断面図及び9号溝跡断面図

Plan and sections of the excavated Ditch 7, 8 and 9 in the Sanno-gakoi site

改修などの時期差は認められなかった。S区における第7号溝跡の埋土には、K区の溝底土と比較して礫が多く認められた。底面のレベルは標高約37mであり、I、N、K区の溝底面とはほとんどレベル差は認められない。

第9号溝跡（第2図、第7図）

P区西半において検出された。弥生時代前期の生活面である10層とその下層の11層を底面とする溝状の浅いくぼ地である。8号溝跡の北に連なる。

幅は約5.5m、確認された深さは25cm程度であり、底面の標高は36.7mである。明確な掘り込みは認められなかった。

このくぼ地状の幅広い溝の一部を埋めるように9層が堆積しており、9層中からは弥生IIa期の甕と高杯が出土した（第13図16-19）。さらに全体が8e～h層によって覆われているが、これらの層からは遺物は出土せず、第9号溝状遺構が埋没した時期は不明である。

第10号溝跡（第3図版、第8図）

Q西区において検出された第10号溝跡は確認面での幅約1.1m、底面の幅30～50cm、深さ約30cmである。遺物は出土しなかった。弥生時代前期の遺物包含層を掘り込んでつくられていることから、弥生時代前期以後の遺構であると考えられる。（大場）



第8図 山王塚遺跡Q区第10号溝跡平面図・断面図

Plan and section of Trench 10 (Q trench) in the Sanno-gakoi site

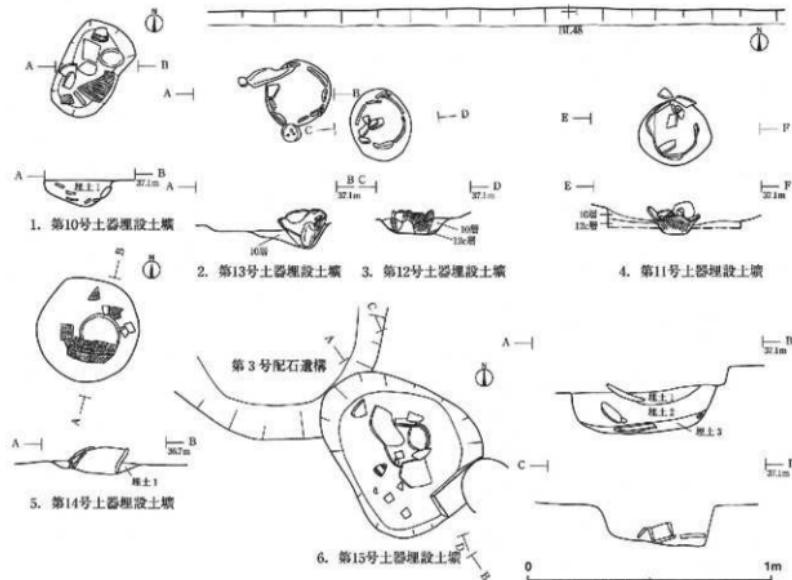
4) 土器埋設土壤

Q、P区では土器の埋設された小土壇が合わせて6基検出された。これらの遺構は晩期終末から弥生時代前期前半に属すると推定される。P区の埋設土器群は第5号配石遺構中の埋設上器を含め、発掘区の北壁中央付近の4m四方程の範囲に集中しており、墓域の一部を構成していると考えられる。

第10号土器埋設土壤（第3回版、第9回1）

Q東区BX58区の5層上面で検出された。長径40cm、短径25cmの橢円形を呈し、深さは10cmである。埋土は灰黄褐色シルト層である。遺物は土壇底面から出土している。平行沈線文を有する弥生II期の壺の口縁部（第23回4）と弥生I期の深鉢の口縁部（同図6）、深鉢の体部（同図5）、凹石（第13回版4）が出土している。

層位の関係、出土遺物から、第10号土器埋設土壤は弥生II期に属すると考えられる。（熊谷、鹿又、福壽）



遺構名	形状	層位	土色	地性	しまり	粒度	合 本 物	備 号
第10号土器埋設土壤	Q東 堆土1 堆土2	09784-2 09784-6	灰褐色 灰	砂質	シート	深25cmの灰褐色を含む 埋土は土壇底面に含む		
第11号土器埋設土壤	P	10層	09782-3	三海色	やや堅	やや固	深2-3cmの黄褐色を含む	
第12号土器埋設土壤	P	10層	09782-3	三海色	やや堅	シート	土壇底面を含む 0.5-1cmの褐色を含む 0.5-1cmの褐色を含む	10個が落ち込んで、10個が残っている
第13号土器埋設土壤	P	10層	09782-3	三海色	やや堅	シート	土壇底面を含む 0.5-1cmの褐色を含む 0.5-1cmの褐色を含む	
第14号土器埋設土壤	P	10層	09782-3	三海色	やや堅	シート	土壇底面を含む 0.5-1cmの褐色を含む 0.5-1cmの褐色を含む	
第15号土器埋設土壤	P	10層 堆土1 堆土2 堆土3	09782-3 09782-3 09782-3 09782-3	灰褐色 灰褐色 灰褐色 灰褐色	中 中 中 中	シート	深2cmの褐色を含む 底分を土壇底面に含む 底分を土壇底面に含む 底分を土壇底面に含む	

第9図 山王塚遺跡P、Q区土器埋設土壤平面図・断面図

Plans and sections of pits with pottery (P and Q trench) in the Sanno-gakoi site

第11号土器埋設土壤 (第2図、第9図4)

P区の北よりBK48区の10層上面で検出され、土壤底面は12層に達する。縄文時代晩期から弥生時代前期の深鉢の底部 (第4図版4、P.L. 5-4) が正立して出土している。

(鹿又、鎌田)

第12号土器埋設土壤 (第2図、第9図3)

P区BK47区の10層上面で検出された。平面形は長径30cm、短径25cmの梢円形である。深さは6~7cm程度である。深鉢 (第4図版5、P.L. 5-5) は口縁部と底部が欠損しており、体部が正立した状態で出土した。

(福壽、馬場)

第13号土器埋設土壤 (第2図、第9図2)

P区BK47区において第12号土器埋設土壤と並んで、10層上面で検出された。土壤底面は12層まで達している。平面形は直径27cmの円形を呈する。土壤の幅は土器よりもわずかに大きく、掘り込みは土器の周囲に接して確認された。縄文時代晩期後半から弥生時代前期の深鉢の底部 (第4図版6、P.L. 5-6) であり、正立した状態で出土した。第13号土器埋設土壤は縄文時代晩期終末から弥生I期に属すると考えられる。

(西井、馬場)

第14号土器埋設土壤 (第2図版、第9図5)

Q西区X2Y1区で検出された。確認面での平面形は直径約43cmの円形を呈している。上層では掘り形の検出が困難であったが、土壤底面近くで確認された。深さは約6~7cmである。晩期VI期から弥生I期の深鉢 (第5図版5、P.L. 6-6) が倒立した状態で埋設されていた。

(大場)

第15号土器埋設土壤 (第2図、第6図6)

P区B J48区で検出された。第3号配石造構の南東にその一部を横して掘りこまれている。上層での掘り形の検出が困難で、11層上面で確認された。確認面での平面形は長径70cm、短径55cmの長梢円形を呈しており、検出面からの深さは約25cmである。弥生I期の壺の上半部 (第4図版7、P.L. 6-1) が出土した。また、弥生II期の深鉢、弥生I期の鉢、晩期VI~弥生I期の鉢、晩期V~VI期の壺の破片 (第13図6~9) などが出土している。第15号土器埋設土壤は、出土した遺物から弥生I期から弥生II期に属すると考えられる。

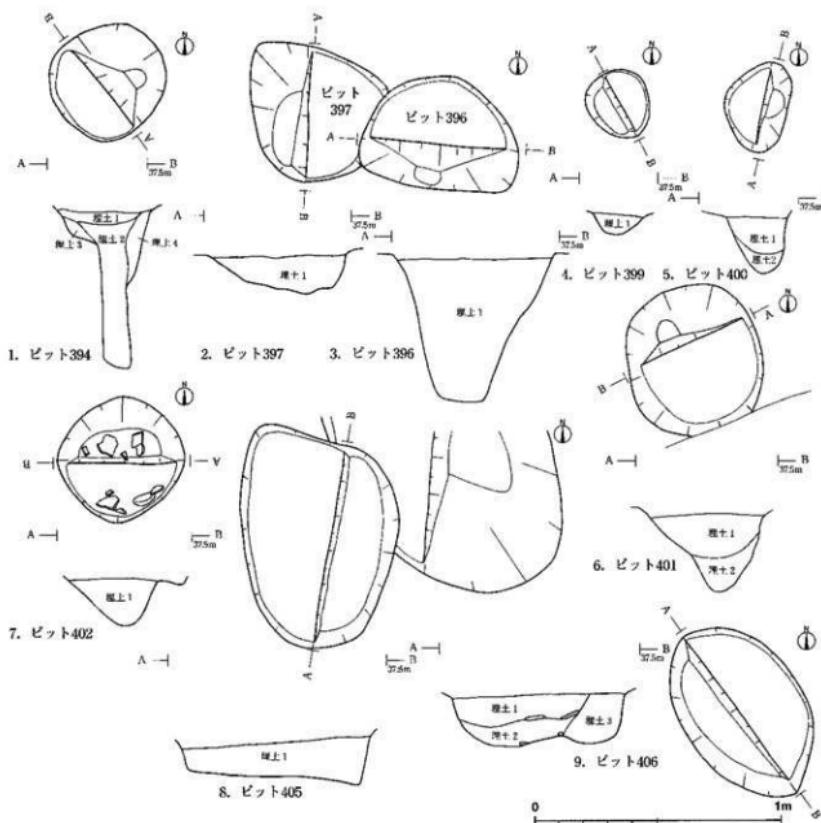
(大場)

5) ピット群

R区において4層上面で、44基のピットが確認された。(第4図)

ピット394 (第10図1)

ピット394は径47cm程の円形を呈し、深さは64cmである。径10cm、深さ60cmの柱痕跡が確認されている。他のピットには柱痕跡は確認されていない。



ピット番号	位置	性状	土	草	樹木	灌木	小	中	大	地	備考
ピット394 R(W)	柱上1 柱上2 柱上3 柱上4	2.7VBD-1 2.7VBD-2 2.7VBD-3 2.7VBD-4	黒褐色 黒褐色 黒褐色 黒褐色	シント雲母 シント雲母 シント雲母 シント雲母	弱 弱 弱 弱	弱	柱上1-3cmの隙をわずかに含む 柱上2-3cmの隙をわずかに含む 柱上3-3cmの隙をわずかに含む 柱上4-3cmの隙をわずかに含む			柱上1-3cmの隙をわずかに含む	柱上1-3cmの隙をわずかに含む
ピット395 R(W)	柱上1	10VBD/1 10VBD/2	黒褐色 黒褐色	シント シント	弱 弱	弱	柱上1-3cmの隙をわずかに含む			柱上1-3cmの隙をわずかに含む	柱上1-3cmの隙をわずかに含む
ピット397 R(W)	柱上1	2.7VBD/1	黒褐色	シント	中	中	柱上2-3cmの隙、黒色土層をわずかに含む			柱上1-3cmの隙を含む	柱上1-3cmの隙を含む
ピット396 R(W)	柱上1	2.7VBD/2	黒褐色	シント	中	中	黒色土層、柱上2cmの隙を少含む			柱上1-3cmの隙を含む	柱上1-3cmの隙を含む
ピット399 R(W)	柱上1	2.7VBD/3	黒褐色	シント	中	中	柱上2-3cmの隙を含む			柱上1-3cmの隙を含む	柱上1-3cmの隙を含む
ピット400 R(W)	柱上1 柱上2	2.7VBD/4	黒褐色	シント	中	中	柱上2-3cmの隙を含む			柱上1-3cmの隙を含む	柱上1-3cmの隙を含む
ピット401 R(W)	柱上1 柱上2	10VBD/1	黒褐色	シント	中	中	柱上2-3cmの隙を含む			柱上1-3cmの隙を含む	柱上1-3cmの隙を含む
ピット402 R(W)	柱上1	10VBD/2	黒褐色	シント	中	中	柱上2-3cmの隙を含む			柱上1-3cmの隙を含む	柱上1-3cmの隙を含む
ピット405 R(W)	柱上1	10VBD/3	黒褐色	シント	中	中	柱上2-3cmの隙を含む			柱上1-3cmの隙を含む	柱上1-3cmの隙を含む
ピット406 R(W)	柱上1 柱上2 柱上3	10VBD/4	黒褐色	シント	中	中	柱上2-3cmの隙を含む			柱上1-3cmの隙を含む	柱上1-3cmの隙を含む

第10図 山土間遺跡R区検出ピットの平面図・断面図

Plans and sections of pits in the R trench of the Sanno-gakoi site

ピット396（第10図3）

ピット396は長径65cm、短径46cmの椭円形を呈し、深さ60cmである。埋土は黒褐色シルト層であり、弥生IIa期の高杯（第23図9、10）と調整剝離の入念に施された横型石匙（第10図版23）が出土している。

ピット397（第10図2）

ピット397は径56cmの円形で、深さは15cmである。埋土は黒褐色シルト層であり、弥生IIa期の甕（第23図11）、縄文晩期VI期から弥生II期の深鉢（第23図12）、弥生IIa期の高杯脚部（第23図13）が出土している。

ピット399（第10図4）

ピット399は径28cm程の円形を呈し、深さは9cmである。埋土は黒褐色シルト層であり、弥生I期の高杯の体部（第23図14）が出土している。胎土、浅い縄文施文の特徴からこの高杯は砂沢式土器と近似する。

ピット400（第10図5）

ピット400はR区の西南部にある長軸37cm、短軸26cmの椭円形を呈し、深さは25cmである。埋土が2枚あり、ともに黒褐色シルト層である。棒状石錐（第10図版18）と剥片が出土している。

ピット401（第10図6）

ピット401はR区西南部にあり、径60cm程の円形を呈し、深さは34cmである。埋土は2枚あり、ともに黒褐色シルト層である。円盤状石器（第14図版4、PL.28-10）が出土している。

ピット402（第10図7）

ピット402は径52cm程の円形を呈し、深さは20cmである。埋土は黒褐色シルト層である。弥生IIa期の鉢（第24図3）、弥生II期の甕（第23図15）とIIb期の高杯（第24図1）、弥生II期の高杯脚部（第24図2）が出土している。

ピット405（第10図8）

ピット405は長軸84cm、短軸67cmの椭円形を呈し、深さは20cmである。埋土は灰褐色シルト層であり、晩期VI期から弥生I期と推定される高杯口縁部（第24図4）が出土している。

ピット406（第10図9）

ピット406は長軸79cm、短軸48cmの椭円形を呈し、深さは20cmである。埋土は3枚あり、埋土1、3が黒褐色シルト層、埋土2が黒褐色砂質シルト層である。弥生II期の高杯（第24図5）が出土している。

R区の遺構群は発掘区の北西隅、中央、南端部、南東部に密集する。このうち中央と南端のグループのピットからは弥生時代II期の土器が比較的多く出土している。これらのピットは、出土遺物から、弥生II期に属するものが主体であると推定される。

（鹿又）

6) 焼土遺構

P区の東南部では礫の散在する範囲において3ヶ所の焼土のひろがりが認められた(第2図)。焼土のひろがりの付近に柱穴は確認されておらず、特に住居との関わりはないと判断した。P区東半部にひろがる礫集中群、土器埋設土塊群、土壤を伴う礫群などの遺構群と深く関わりをもつものと考えられる。

第1号焼土遺構(第11図1)

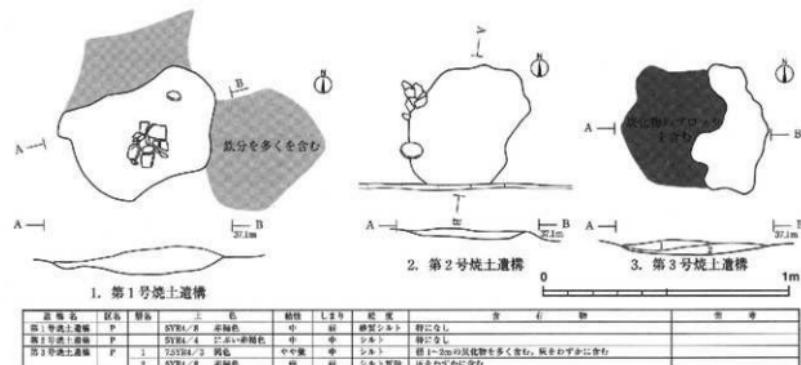
P区のはば中央南よりのB I 48区の10層において検出された。平面形は長軸60cm、短軸40cmの不整橢円形を呈する。断面はレンズ状であり、最大厚は10cmある。炭化物は含まれていない。長期に使用されたものと推定される。焼土上面から剥片が出土している。3号焼土遺構と共に性格を考えられる。

第2号焼土遺構(第11図2)

P区の南壁東よりのB H 49区において12層上面で検出された。平面形は長径58cm、短径38cmの不整橢円形を呈する。浅いくぼみに焼土が堆積しており、3cm程の厚さをもつ。炭化物は含まれていない。遺物は焼土上面から大型の剥片(第16図版3、17図版4)が2点出土している。このうちの1点石器№66(第17図版4)は近接して出土した剥片№64、65(同図版2、3)2点と接合した(同図版1)。この接合資料は、焼土遺構の性格を推定するうえでの重要な出土遺物といえる。第2号焼土遺構は層位の関係から縄文晩期VI期から弥生I期に属すると考えられる。

第3号焼土遺構(第11図3)

P区の東より中央のB J 49区の10層上面で検出された。12層まで掘り込んでいる。平面形は、長径50cm、短径30cmの不整形を呈する。焼土面は中央部で深さ6cm程あって浅いくぼみとなっている。焼土層は10、12層が熱を受けて変化したものであり、この変化した10層には径1~2cmの炭化物が多く含まれ、灰が混じる。なお、12層



第11図 山王園遺跡P区検出焼土遺構平面図・断面図

Plans and sections of burned soil features (P trench) in the Sanno-gakoi site

も灰をわずかに含んでいる。

第3号焼土遺構の西半部分に炭化物の集中区域が確認されている。平面形は長軸50cm、短軸40cmの不整形を呈する。この炭化物の集中地点は焼土遺構と重複関係が認められ、焼土遺構の上に炭化物の集中域が検出されている。

これらの遺構は、焼土と灰を含み、炭化物の分布域が重なり合っている関係から、比較的長期にわたって繰り返し火を焚いた跡と推定される。第3号焼土遺構は層位的関係から縄文晩期VI期から弥生II期に属すると考えられる。

(西井、早瀬、竹ヶ原)

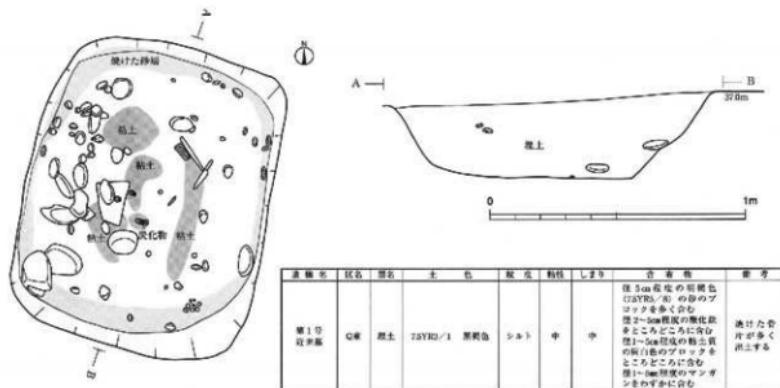
7) 旧 河 道 (第2図、第2図版)

P区西端において検出された。幅は6mを超える。旧河道を埋める砂層は5b層及び6層によって覆われている。これより更に上層の4層中で十和田a火山灰と推定される火山灰が検出されていることから、10世紀までに埋没したと考えられる。

(大場)

8) 近 世 墓

Q東区の北東隅において、近世の墓壙1基が検出された。5層の上面で確認された。平面形は、長軸1.2m、短軸0.95mの隅丸長方形を呈し、深さ36cmである。埋土は黒褐色シルト層で、明褐色の砂のブロックを多量に、灰白色土粒と鉄分、炭化物、マンガンを若干含む。埋土中からは焼けた骨片が出土している。底面からは古錢が計7枚、うち墓壙中央付近から出土した古錢は3枚の施着錢で、孔に紐の一部が残存していた。また、表面には編物状の布が付着していたことより、紐で結ばれ袋に納められていたと考えられる。他に煙管1点、刀子1点、鉄製の管1点、不明鉄製品1点、不明木製品2点が出土している。煙管は木製の羅字部分が残存しており、その



第12図 山王廻遺跡Q東区検出第1号近世墓

Grave 1 in the Edo era of the Q trench in the Sanno-gakoi site

側から出土した木製品は梗草入れの可能性がある。刀子は、刃部が長さ8cm、幅1.8cm、柄の幅は1cmである。これらの出土品は副葬品と考えられる。また底面からは、有機物が腐食したと考えられる褐色の粘土が検出されている。墓壇底部付近には焼けた多量の穀が認められ、底面や壁面には焼けた砂も認められる。この墓壇の時期は、出土した寛永通寶の年代より江戸前期頃と推定される。この近世墓は、北側の段丘崖にひろがる可能性があるが、地形的にみて小規模なものと推定される。

(坂田)

第3節 出土遺物

(1) 出土遺物の概要

第3次調査では、自然堤防の北西部にP区、1964、65年の調査区の上に建設された体育館跡地にQ区、遺跡のひろがる自然堤防の北辺にR区と3ヶ所の調査区を設定し、発掘調査を進めた。

これらの調査区からは、縄文時代晩期中葉から弥生時代前期までの遺物が多量に出土した。ことに、P、Q、R区いずれの発掘区からも弥生時代I期とII期の土器が豊富に出土している。弥生時代前期に、自然堤防の広い範囲で生活が営まれ、住居、区画溝などの遺構群と遺物包含層が形成されたことが確認された。

第3次調査では、P区において遺物包含層の下から配石遺構、燒土遺構などが検出され、縄文時代晩期終末から弥生時代前期の土器、石器が出土した。さらに、晩期終末、弥生前期の埋設土器が4基、配石遺構群のなかで検出されている。また、包含層からは弥生前期後半の山王Ⅲ層式土器が主体的に出土し、さらに晩期後半の山王Ⅴ層式、終末の山王Ⅶ下層式、前期前半の山王Ⅸ上層式土器など多様な型式の土器が出土している。なお、わずかであるが、弥生時代中期前半の寺下圓式相当の土器が出土している。

なお、P区からは、多数の打製石器とともに、整った形態の磨製石斧が出土した。2点は始刀石斧とみられる。さらに、3層からは弥生時代中期と推定される鉗錐形の粘板岩製石庖丁の破片1点が発見された。山王圓跡では、この資料を含めて2点の石庖丁が出土したことになる(須藤 1986)。これらの資料は、宮城県における北限資料である。

遺跡北辺に設けたQ区では、その西区から径4m程の堅穴状遺構が1基検出され、その埋土から豊富な量の山王Ⅲ層式の上器、石器が出土した。また、遺構を覆う包含層からもこの弥生II期の土器が豊富に出土した。さらに、下層においても晩期終末から弥生I期の遺物がまとまって出土している。

さらに、1962年に明治大学が調査した自然堤防の北東辺に設けたR区では、旧発掘区の位置が確認された。このR区では多数のビットと小土器が検出されたが、この遺構とそれを覆う遺物包含層から縄文時代晩期後半から弥生時代前期の土器、晩期後半の飾髪土偶、蓋形土製品などの遺物が出土している。

(2) 土器

出土土器は、全てで平箱22箱分、重量で80kgに達した。ここでは、主要な包含層と遺構から出土した資料を整理し、そのうち、口縁部を有する土器、有文土器破片を抽出して、その型式内容を検討することとした。出土資料についての属性の特徴は、土器観察表に掲載した。観察表にかけた「時期」、「器種」、「口縁部の特徴」、「文様帶」、「主要文様帶の特徴」といった項目は、基本的に第1次、2次調査報告書に記述した事項を受け継いだ(付

表1)。なお、装飾要素の分類では「変形T字文」を、O型、P型、A1型、A2型に、そしてC型を6類に区分して記述した(須藤 1986)。

P区出土土器

P区からは、総計5箱分、24kgの土器が出土している。出土土器の大半は、8、9、10層から出土しており、晩期V期から弥生II期までの土器型式に属する。弥生時代中期前半のⅢ期と考えられる土器(第14図1、2、第5図版3)がわずかに出土している。口縁部外反の甕(第14図2、PL.13-1-2)には、カナムグラと推定される植物茎を回転した擬似縄文(須藤他 1984)が施されている。P区8層から11層出土土器については、型式の判定できる54点を図に掲載した。10、11層では、晩期V期の台付鉢(第15図17)、Ⅵ期の鉢(同図11、12)、弥生I期の高杯(同図13、18)などが目につく。

次に遺構毎に出土遺物を検討する。

第3号配石遺構出土土器(第13図1~3、PL.12-1-2, 4, 5)

P区の中央付近に検出された第3号配石遺構からは、晩期終末と弥生時代の甕と深鉢が出土している。第13図1は弥生I期ないしIIa期の短い平坦口縁の甕で、口頭部はナデで調整されている。体部にはLR斜行縄文が施される。第13図3は晩期VI期の小波状口縁の深鉢で、口頭部が軽く外反し、体部上半はゆるやかに内彌する。頭部には沈線が1条めぐり、体部にはLR斜行縄文が施され、内面はナデによって調整される。

第4号配石遺構出土土器(第13図4、第4図版1、PL.5-1, 12-1-3)

第4号配石遺構からは、深鉢と高杯の脚部が出土している。第13図4は晩期VI期から弥生IIa期の小波状口縁の深鉢で、体部にはLR斜行縄文が施される。器面はナデの後、横方向の籠ミガキによって仕上げられている。第4図版1は弥生I期からIIa期の高杯の脚部で、裾部に向かってひらく。底部との境と裾部に平行沈線文が施されている。ミガキが加えられ、朱が塗布されている。

第5号配石遺構出土土器(第13図5、第4図版2, 3、PL.5-2, 3, 12-1-6)

第5号配石遺構からは、甕と深鉢が出土している。第13図5は晩期VI期から弥生I期とみられる深鉢で、口縁部には、頂部に押圧のある2個1対の小さな山形突起が飾られる。長い口頭部は軽く外反し、体部上半はゆるやかに膨らむ。頭部に太い匹字文めぐる。口頭部はミガキによって調整され、朱が塗布されている。体部にはLR斜行縄文が施されている。他に大型の深鉢の体部下半1点(第4図版2)と高さ17cmの深鉢1点(同図版3)が出土している。後者は平坦口縁で短い無文の口頭部をもつ。いずれもLR斜行縄文が施されている。弥生前期I期の深鉢と推定される。

第11号土器埋設土壙出土土器(第4図版4、PL.5-4)

第11号土器埋設土壙からは、深鉢の体部下半から底部にかけての土器が出土している。底径7cm、体部にはLR斜行縄文がみられる。内面はミガキによって整えられている。胎土には海綿状骨針が含まれている。時期は、

器形、施文、調整などから、縄文晚期終末から弥生前期Ⅰ期までに属すると推定される。

第12号土器埋設土壙出土土器（第4回版5、P.L. 5-5）

第12号土器埋設土壙からは、縄文時代晚期終末から弥生時代前期とみられる深鉢の体部下半が出土している。L R 斜行縄文が施され、内面はかるく磨かれている。底部を欠く。

第13号土器埋設土壙出土土器（第4回版6、P.L. 5-6）

この土壙からは、縄文晚期終末から弥生前期と推定される深鉢の体部下半が出土している。底径は11cmで、L R 斜行縄文が施され、内面は軽いナデによって調整されている。底部には木葉痕がみられる。

第15号土器埋設土壙出土土器（第13回6～9、第4回版7、P.L. 6-1、12-1-1, 2-1, 2, 7）

この土器埋設土壙からは、深鉢、鉢、壺が出土している。第13回7は、晚期終末Ⅵ期から弥生Ⅰ期の小波状口縁の深鉢で、口頸部が粗く、直立し、体部上半が膨らむ。体部にはL R 斜行縄文が施され、内面はナデとかる、ミガキで仕上げられる。鉢は2点出土しており、いずれも口頸部から体部にかけて軽い彫りをもつ。第13回6（P.L. 12-2-1）は、弥生Ⅰ期の装飾鉢で、体上部に変形工字文A 2型が展開する。この変形工字文は小さな貼付粘土粒をもつ。さらに丁寧なミガキが加えられ、朱が塗布されている。胎土には海綿状骨針がみられる。第13回8は、平坦口縁の鉢で、口縁部に5条の平行線がめぐり、口縁部内面に1条沈線が施されている。体部下半にL R 斜行縄文が施されている。器面はナデとかるミガキによって調整される。

第4回版7（P.L. 6-1）は、口頸部がほぼ直立し、肩部が強く張る大型壺で、高さは35cm程度と推定される。弥生Ⅰ期に属すると考えられる。頸部は太く、比較的長い。口縁部と頸部の境に4単位の凹字文が施され、丁寧なミガキによって仕上げられている。器面には朱が塗布されている。弘前市砂沢遺跡、福島県葛料遺跡、あるいは秋田県源訪台C 遺跡などの弥生Ⅰ期の壺に共通した様相がみられる（須藤他 1984、利部・和泉 1990、村越他 1991）。

P区包含層出土土器（第13回10～第16回4、第5回版1～4、P.L. 6, 12-14）

P区の4層、8a層、9層、10層、11層から、縄文晚期Ⅴ期から弥生Ⅲ期の土器が出土している。出土土器には層位的に明確な相違はみられず、各層を通して主体となるのは弥生Ⅱ期の山王Ⅲ層式の古段階（青木復式）の上器である。

4層からは弥生Ⅱ期の深鉢が1点確認されている（第13回10）。平坦口縁で、口頸部は軽く外彎する。比較的小型であり、器面は磨かれ、炭化物が付着している。

8層では晚期Ⅵ期の鉢が1点出土している（同回11）。体部上半に4条の平行沈線文がめぐる。8a層からは、型式の判定できる4点の土器が出土した（同回12～15）。壺は平坦口縁で、器面は内外面ともに磨かれている（同回12）。深鉢は、口縁に、頂部に笠押圧のある山形突起が飾られ、頸部に太い沈線が1条施されている（同回14）。突起の形状などから、弥生Ⅰ期からⅡa期に属すると考えられる。第13回15は、高杯脚部である。変形工字文C 1型が施されている。器面はナデ調整され、朱が塗布されている。弥生Ⅱa期に属する。

9層からは、弥生Ⅱa期の上器が4点出土している（同図16～19）。甕は平坦口縁で、口縁部が3cm前後のもの（同図17）と、1cm程度の短いもの（同図16）がみられる。高杯、または鉢には平坦口縁で、体部から口縁部にかけて屈曲なく広がる類型がみられる（同図18）。体部には平行線文が展開し、弥生Ⅱa期のものと推定される。第13図19の鉢は平坦口縁で、屈曲なく広がる（PL.12-2-13）。体部に変形工字文C1型が展開する。器面は丁寧に磨かれ、朱が塗布される。口縁部の内外面には炭化物が付着している。この鉢は、弥生Ⅱa期に属する。

10層からは、晩期Ⅴ期から弥生Ⅲ期の土器が35点出土している（第14図1～13、第15図1～19、第5図版1～3、PL.6-2, 3, 7）。

弥生Ⅲ期の土器には、甕、壺がみられる。甕には平坦口縁で、短い口縁部がほぼ直立し、肩が強く張る類型（第14図1、PL.13-1-1）がみられる。口縁部に太い平行線、体部上半には1列の円形刺突列と太い平行線がめぐる。体部にはLR斜行繩文が施される。谷起島遺跡などから出土する磨消繩文手法と列点文手法の併用された上器群と類似しており、弥生Ⅲ期の土器と推定される。また、口縁部が外反する平坦口縁の甕は、体部にカヌムグラの茎の回転圧痕と推定される擬似纏文が施されている。口縁部はミガキによって調整されている（同図2、PL.13-1-2）。弥生中期前に半に拵形四式期に発達する擬似纏文がすでにこの地で出現していたことが確認され、重要な資料である。壺は広口壺で、体部中位に最大径を有し、磨消繩文手法による波状文帯が展開する。纏文が沈線帯中に文様に沿って展開する手法が特徴的である。内外面に朱が彩色され、内面には炭化物が付着している（第5図版3）。この土器は、弥生中期前半のⅢ期に属すると推定される。

さらに10層からは弥生Ⅱ期の甕、壺、晩期Ⅳ期から弥生Ⅱ期の深鉢、高杯、鉢、壺が出土している。第14図3、13の甕は、平坦口縁で、口縁部が3～5cmと比較的長い。口縁部は直上あるいは緩やかに外彎し、体部上半が張る。体部には横走するLR繩文が施されている。器面はナゲ調整が加えられ、内外面に炭化物が付着している。弥生Ⅱ期のものとみられる。同図4の深鉢は、口縁部が1.5cm程度で短く、口縁部の屈曲も弱い。第15図3、4は、口縁部が軽く外反する小波状口縁の深鉢である。これらは、晩期終末から弥生Ⅰ期に一般的な土器である。同図6の鉢は、体部に変形工字文C1型が施され、器面は丁寧に磨かれている。弥生Ⅰ、Ⅱ期の高杯が鉢と推定される。また、第14図5は体部が緩やかに広がる鉢である。器面が磨滅しているが、比較的細い沈線で変形工字文、連弧文あるいは菱形文が施されている。高杯には3条の平行線による文様がめぐるもの（第14図7）、変形工字文C2型が展開する類型（第14図10）などがみられる。器面は丁寧に磨かれ、胎土には金属母が混和されている。変形工字文C型が施された脚部が出土している（第14図11）。これらの高杯は、弥生Ⅱa期の土器と考えられる。

弥生Ⅰ期の鉢、高杯が若干出土している。高杯は、円窓状粘土版の貼り付けのある大きな山形突起をもち、体部に変形工字文A型が施されている（同図8、PL.14-1-6）。また、第15図10は、高杯の装飾口縁と推定され、頂部に押凸が加わる大きな山形突起が施されている。第15図13は口縁部が内彎するし、体部には変形工字文A2型が展開する。

同図16は、強くひらく浅鉢で、平行線が口縁部外面に5条、内面に1条めぐる。弥生時代Ⅰ期からⅡa期に属すると推定される。第15図18は、平坦口縁で、口縁は内彎し、変形工字文A1型が施されている。高杯と推定される。

晩期Ⅳ期の土器としては深鉢、鉢が出土している。深鉢は短い口縁部をもち、小波状口縁で口縁部は軽く外反する（第15図14、15）。鉢は平坦口縁で、口縁部が屈曲なく広がり、体部には変形工字文A2型が展開する（第15

図11、12)。

晩期V期の上器には、深鉢、鉢がみられる。深鉢は口唇部に刻みが加えられ、口縁部に2条の平行沈線文が施される(同図19)。第15図17の鉢は、口縁部が強く内轉し、山形突起が飾られる。体部上半には上下に対向する四字文が2段施される。器面は丁寧に磨かれ、朱が塗布されている。低い小壺の台をもつとみられる。

11層からは、繩文晩期V期から弥生IIa期の土器が10点出土している。第15図22(P.L.15-1-1)は、口縁に大きな山形突起が施され、くの字に屈曲する口頸部をもつ。体部には変形工字文C1型が展開し、器面は磨かれている。また、平行線文のめぐる高杯脚部(第5図版4、P.L.6-5)や、透しのある波状文の台部(第15図21、P.L.14-2-13)が出土している。これらの土器は、比較的よく深い沈線によって文様が描かれ、器面が入念に磨かれ、内面はナデで調整されている。このような特徴から弥生IIa期の土器群と判断される。

第15図23は、体部上半が内轉し屈曲する器形の高杯である。口縁には頂部に押圧のある大きな山形突起が施される。口縁端面には、深い沈線が加えられ、内面には突起に沿った沈線が1条めぐる。器形、突起の形状から弥生I期の上器と考えられる。また、第15図24は、口縁部がわずかに内轉して立ち上がる。平坦口縁で、変形工字文の一部とみられる沈線が6条めぐる。この土器は晩期V期新段階からVI期に属すると推定される。

第16図21は、晩期V期新段階からVI期の大型鉢である。口縁端面に沈線が加えられ、2個1対の低い山形突起が配される。体部上半には四字文が1段展開し、器面には朱が塗布されている。

同図1、3は晩期V期の深鉢である。1は、押圧による小波状口縁をもつ。口頸部は比較的長く、体部には横走するL R繩文が施されている。V期の中段階あるいは新段階に属すると推定される。同図3は、小波状口縁で、口頸部は短く直上する。口頸部は磨かれ、体部にL R繩文が施されている。V期新段階に属するとみられる。

同図4は、口縁部が軽く内轉して直上する深鉢である。口縁部は軽く肥厚し、端面が平坦に仕上げられている。L R繩文がやや浅く施されている。このような口縁部、繩文施文の特徴は繩文時代晩期前半から弥生時代の深鉢にはほとんどみられない特徴である。

(坂田、京野、須藤)

Q区出土土器

Q区では平箱で11箱分、約36kgの上器が出土している。特にQ西区の南半では10層から25層において豊富な資料が出土した。また、堅穴状遺構、浅い土壙から完形に近い十器がまとまって出土している。東区では生活面、包含層が削平されており、弥生、繩文時代の堆積層は確認できなかった。Q区中央は1965年度の調査発掘区の確認のために掘り下げたもので、出土遺物の大部分が2次堆積層の遺物である。ここでは、Q西区の晩期後半から弥生前期の上器について記述する。

Q西区出土土器(第16図5~17、17~22図、23図1~3、第5図版5~10、6~8図版、9図版1)

Q西区では、第14号土器埋設土壙、堅穴状遺構、包含層の10~17層、20層、22層、24~25層において、繩文時代晩期後半から弥生時代中期前半の土器が133点出土した。これらの資料を検討したところ、弥生時代前期の上器型式の変遷が層位的に捉えられた。すなわち10~17層では、主に弥生時代IIb期(山王Ⅲ層式)の土器が出土している。20、22層では、弥生IIa期(青木畠式)に属する土器が多数みられる。そして、23層を掘り込む堅穴状遺構では、弥生IIa期に属する土器が出土している。24層、25層では、弥生I期(山王Ⅳ上層式)の土器が土

体である。

第14号土器埋設土壙出土土器（第5図版5、P.L. 6-6）

第14号土器埋設土壙からは小波状口縁の深鉢が出土した。口径が17cm、器高は23cmあり、体部にはLR斜行縞文が幾分横走気味に施される。口縁部端面をヘラによる押圧で小波状とし、口頭部をナデによって調整している。内面に接合痕が1~1.5cm幅でみられる。また、外面では体部上半に、内面では体部下半に炭化物が付着している。この土器は晩期Ⅳ期から弥生Ⅰ期に属すると推定される。

豊穴状遺構出土土器群（第5図版6、7、P.L. 6-4、8、第16図5~13、P.L. 15-2）

Q西区の豊穴状遺構からは上に弥生前期Ⅱa期の土器が出土している。そのうち、II点を掲げた。第16図13（P.L. 15-2-3）は、口頭部から肩部にかけて軽く膨らみをもつ深鉢である。口縁部は短く直上する。口縁部外面に3条、内面には1条の沈線がめぐる。頭部の膨らみには1条の太い沈線が緩やかな波状に展開する。体部は、円筒形を呈するのが一般的である。この類型の深鉢は、一迫町青木畑遺跡、名取市十三塚遺跡、山形県酒田市生石2遺跡、聖沢遺跡、秋田県秋田城跡（加藤 1982、恵美 1979、安部 1987、加藤他 1986、須藤 1997、小松他 1979）などから出土している。弥生Ⅰ期からⅡa期に属する特徴的な深鉢である。

第5図版7の高杯は、口縁部が上方に立ち上がり、頸部でかるく内凹し、体部が緩やかに内凹して広がる。太い脚部をもつ。口縁部と体部には3条の平行線が施され、体部上半に無文帯がめぐる。体部下半には、LR斜行縞文が施されている。胎土には金玉粋が混和され、器面には朱が彩色されている。焼成は良好である。このような特徴をもつ高杯は、青木畑遺跡、岩手県糸川町馬場野Ⅱ遺跡、和当地1遺跡など、北上川水系に広く分布する（工藤他 1986、高橋他 1997）。高杯の脚部には、3条の波状文が施されるもの（第16図12）と、磨消縞文手法による垂下文の施されたもの（同図9）がみられる。前者は、山下岡遺跡1965年度調査のⅢc、Ⅰ層などⅢ層下層に多く、弥生時代Ⅱ期古段階に盛行する類型である。後者は、Ⅲa、k層などⅢ層上層から多く出土し、Ⅲ期の新段階に発達する類型である（須藤 1983）。

10~17層出土土器群

この地区の包含層のうち、10~17層では弥生Ⅲ期の土器が主体である。壺、深鉢、鉢、高杯、壺、蓋が出土している。壺は倒卵形で、外反あるいは直上する口頭部をもつ。口縁は大半が平坦で、幅2~3cmある。第6図版4（P.L. 9-1）は、発掘区南東部のX1Y2a区の15層から出土した壺で、平坦口縁をもち、頭部で強く肩曲し、口縁部は軽く外凸気味に立ち上がる。肩部は強く膨らむ。口径は26cm、体部の最大径は32cmあり、高さは40cm程度とみられる。比較的大型的な壺である。体部には全体に炭化物の付着がみられる。第20図1は、16層から出土した波状口縁の壺である。口頭部は短く軽く外凸する。肩部がわずかに膨らむ。第16図14、17も押圧による小波状縁の口頭部で、この類型に属するとみられる。

深鉢には、頸部に平行線がめぐり、強く膨らむ肩部をもつ類型（第5図版8、第19図13）と、口縁部に屈曲がなく緩やかに内凹するか、直ぐに立ち上がり、体部から底部にかけてわずかに内凹し、すぼむ砲弾形深鉢（第6図版3、第17図3、10、11）が出土している。第5図版8は、口径35cm、器高が37cmあり、比較的大型である。頸

部から肩部に4条の平行線が施されている。口縁部には、2個1対の低い山形突起が6単位飾られている。突起の下には4~6cmの長さの刻線が1条施され、内面に1条の沈線がめぐる。外面ともに炭化物の付着がみられ、特に内面では体部下半に顕著である。第19図13は、口頭部に4条の平行線が施され、口縁部には2個1対の山形突起が飾られる。器面は軽く磨かれ、体部外面に炭化物が付着している。突起の形状などから、弥生Ⅱa期の山王Ⅲ層式古段階（青木様式）に属するとみられる。

蓋には笠状の器形で台状の摘みの付く類型がみられる。器外面にLR繩文が施されるもの（第18図1、第20図12、13、14、第6図版5）、無文のもの（第19図14、第20図16、第5図版10、PL.7-2）、有文のもの（第19図16、PL.18-2-6）が出土している。繩文施文のものが主体であるが、無文の蓋も目につく。蓋の口縁部付近内面に炭化物が帯状に付着している。第18図1、第19図14、第20図13、16の場合、内面に口縁から3~4cmの幅で帯状に炭化物の付着がみられ、外面では2~3cmの範囲に黒色変化が観察される。これらの蓋は、甕などに口縁部端がわずかにはみ出すように被せられ、使用された結果、物の煮たきによって炭化物が付着したものとみられる。第5図版10（PL.7-2）の無文蓋は、外面ともに帯状の炭化物付着がみられるが、口縁部付近の約1cm幅に炭化物の付着は認められない。

第19図16は、口縁部にLR繩文が施され、口縁に沿って2条の平行沈線がめぐる。体部に連続山形文が展開する。LR繩文は磨消されている。内面には炭化物が付着し、口縁から約1~4cmの範囲に集中している。この同一個体破片が1965年の発掘調査資料（第30図19）にみられる。体部には沈線による複雑な入糸文が施され、沈線区画外には、LR繩文が施される。宮城県角田市鶴沼遺跡（志賀 1971）から多数出土する平底鉢を伏せたような円筒摘みのない類型の蓋である可能性が高く、直上口縁の砲弾形の袋蓋深鉢にセットになるとみられる。

高杯は、口縁部から体部にかけて明瞭な屈曲がなく緩やかに広がる器形が多い。磨消繩文手法、充填繩文手法を伴った変形工字文C2、3型が施される。第17図14（PL.17-1-8）は変形工字文C3型が展開し、繩文が充填されている。変形工字文の一部が入組的に崩れ、その無文部に先端半円形の工具によって刺突列が1条加えられている。この刺突列は、体部下限の平行線にもみられる。器面は丁寧に磨かれ、朱が施されている。胎土には金雲母が含まれている。これと同一個体の破片が1965年発掘調査資料に確認されている（PL.17-1-9）。第18図8（PL.17-1-10）は、太い沈線によって変形工字文C2型が描かれ、磨消繩文手法で飾られる。文様内に充填される沈線が上段では欠落している。中期に盛行する「王字文」へ文様の変化する様相がうかがえる。器面は丁寧に磨かれ、朱が彩色されている。

高杯の脚部は、中位に軽い影らみをもつ円筒形を呈する。磨消繩文手法、充填繩文手法を用い、垂下文や波状文が施される。第6図版1（PL.7-1）は、磨消繩文手法で山形文と垂下文が組み合った幾分複雑な文様が施されている。また、第17図2（PL.16-1-4）は、充填繩文手法を用いた垂下文が展開する。胎土には、山王Ⅲ層式上器に特徴的にみられる金雲母が混和され、器面全体に朱が塗布されている。第18図9、10、第20図3は、磨消繩文手法を伴う波状文が施され、器面には朱が塗布されている。また、同図4は2条の沈線によって波状文が描かれている。繩文は施されず、器面が丁寧に磨かれている。第18図9、第20図4には胎土に金雲母が混和されている。高杯脚部の内面は、調整が粗く、幅1.5~2cmの接合痕が明瞭に認められる。

第5図版9（PL.7-3）は無文の小型甕である。外面と体部下半の内面はナデによって調整されている。体部上半の内面は、口頭部から指で押さえて成形されており、幅1~1.5cmの粘土紐の接合痕がみられる。このよ

うな土器は、山王廻遺跡Ⅲ層、秋田県原跡台C遺跡、地蔵田B遺跡などからも出土している（菅原他 1986）。第20図10（P.L.19-2-2）は、体部上半に変形工字文C 5型（須藤 1983）に類する文様が描かれた壺である。変形工字文の反転部からのびる2条の斜線は横方向には連続しない。器面には朱が塗布されている。

20層、22層出土土器（第21図2～9、22図1～15、P.L.20、21-1、21-2-1～5、7～9）

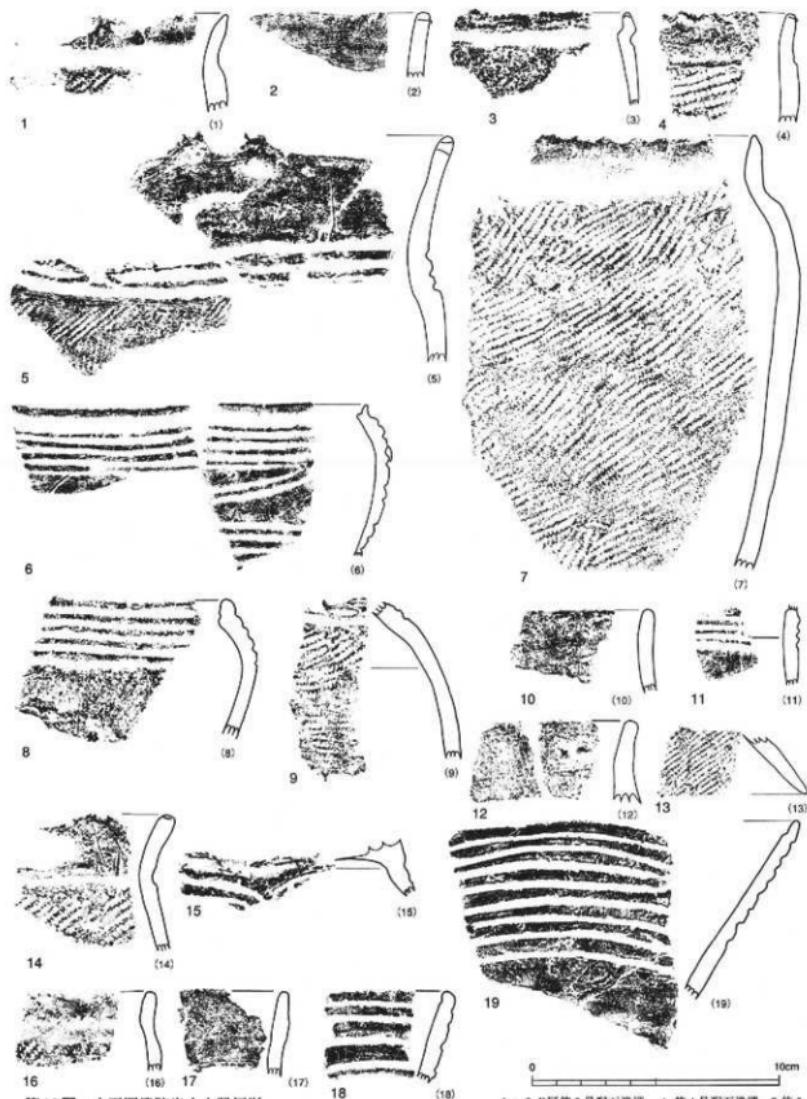
包含層の20～22層からは、下として弥生時代Ⅱ期の資料が出土した。器種には甕、深鉢、高杯、壺、蓋がみられる。第20図15は、平坦口縁の甕である。口縁部はほぼ直上する。頸部の括れは強く、肩部が弧る。体部には、L R原体にr燃りの縄を巻きつけた付加条縄文が施されている（P.L.20-2-1）。山王廻遺跡では弥生前期の土器に施される縄文は、一般的にL R縄文であり、付加条縄文、無節のR縄文は極めて稀である。第6図版6（P.L.8-2）は口径15cm、器高22cmで、比較的小型の甕である。体部にL R斜行縄文が施され、外反する口縁部は無文である。第21図6は、平坦口縁の甕である。口縁部外面はミガキによって仕上げられている。内面は調整が粗く、幅約1.5～2cmの粘土紐接合痕がみられる。内外面ともに体部上半に炭化物が付着している。

第20図17（P.L.19-2-1）の深鉢は、頸部に1条の沈線がめぐり、器面に朱が塗布されている。口縁部外、内面の調整は、磨きによって丁寧に行われている。第7図版1（P.L.8-3）は、口縁が強く内彎する砲弾形の深鉢である。縦走L R縄文がみられる。縄文晩期終末から弥生前期の山王廻遺跡出土土器には、L R斜行縄文と横走縄文が一般的で、縦走縄文の十器は稀である。内面は、ナデ調整されている。内外面に炭化物が付着している。第22図11の深鉢は、押圧による不規則な小波状口縁をもつ。第22図15は、縄文晩期Ⅳ期の深鉢である。口縁部には押圧が加えられ、頸部と口縁部内面に1条の沈線が施されている。器面は非常に丁寧に磨かれている。

第21図5の蓋は、無文で内外面ともに軽い磨きによって調整されている。内面には炭化物が口縁から約4cm軸で帯状に付着している。第22図10の蓋は、外面に縄文が施され、内面は磨きによって調整されている。口径は14cmで小型である。炭化物は内外面ともに口縁から2～2.5cmの範囲に帯状に付着している。

高杯には変形T字文C 1型とA型が展開する。第21図4は変形工字文C 1型が施文されている。意匠の反転部の横にのびる沈線は調整によって消されることが多いが、この土器はそのまま残されている。胎土には金雲母が混和され、器面には朱が彩色されている。体部上半に炭化物の付着がみられる。第22図14は変形工字文A型が施され、縄文晩期Ⅵ期から弥生Ⅰ期の上器と考えられる。高杯の脚部には、第21図9（P.L.20-2-5）のように磨消縄文手法を伴う3条の沈線による波状文が施されたものがある。外面は沈線を描いた後に、磨きによって仕上げられ、内面はナデで調整されている。胎土には金雲母が混和され、外面には朱が塗布されている。

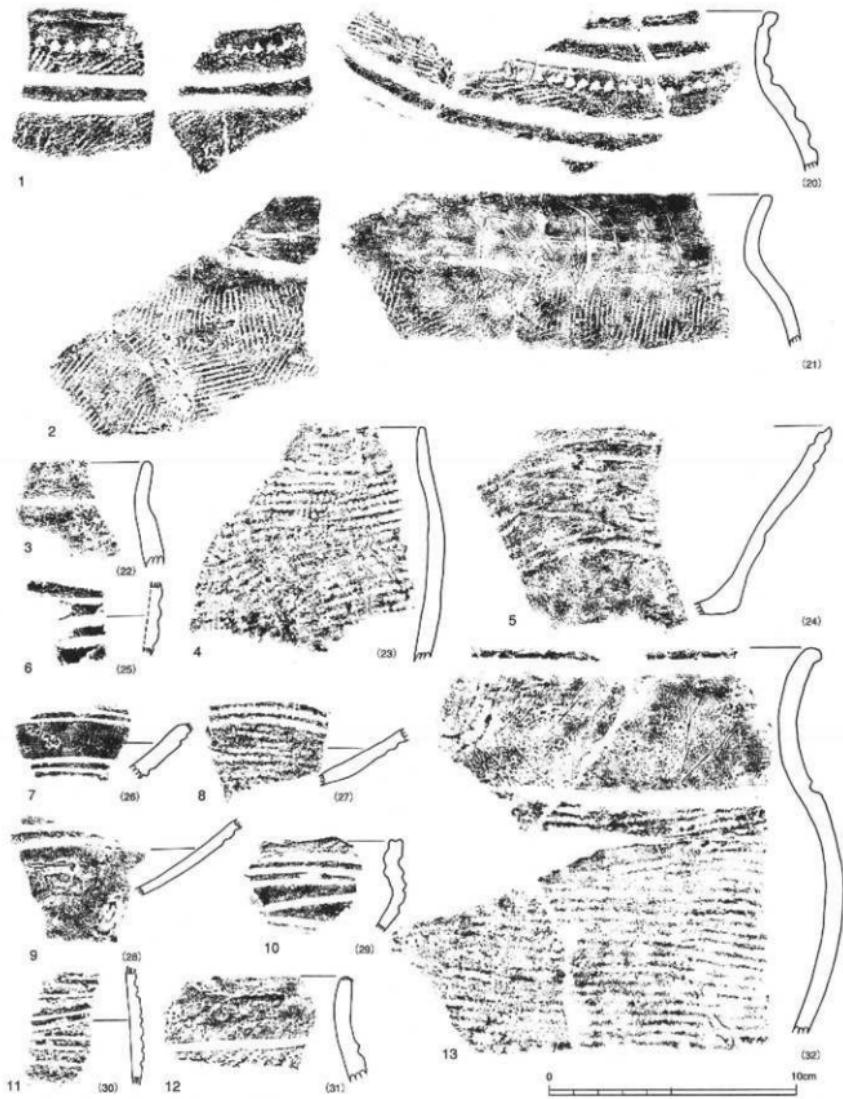
鉢には、比較的多様な器形がみられる。第21図2（P.L.20-2-2）は、直線的に広がる鉢である。L R縄文を施した後、変形工字文C 2型が描かれている。器面には朱がみられる。類例が宮城県青木畠遺跡から出土している。第7図版2（P.L.8-4）は、外反口縁の小型鉢である。外面に幅1.5～2cmの粘土紐の接合痕がみられる。外面にはL R斜行縄文が施され、内面はナデによって調整されている。第21図8は、口縁部と内面が丁寧に磨かれている。体部上半には部分的に浅い縄文がみられる。胎土に金雲母が混和され、器面には朱が塗布されている。第22図6（P.L.21-1-1）は広口壺である。弥生Ⅱ期と推定される。類例は岩手県湯舟沢遺跡、上村貝塚などにみられる（島野他 1991）。第22図12は、口縁部に2個1対の山形突起が配され、口縁部端面に沈線が施される。口縁から体部には3条の平行線が施され、内外面ともに磨き調整されている。



第13図 山王閣遺跡出土土器拓影

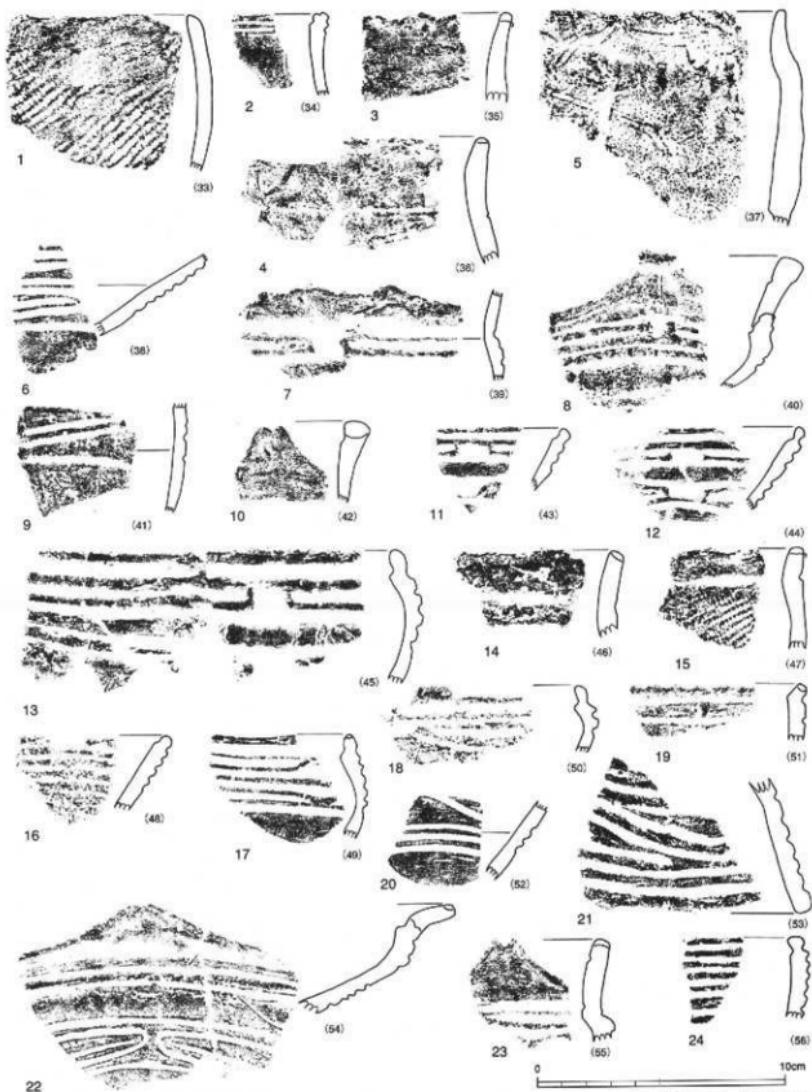
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1～3 P区第3号配石遺構 4 第4号配石遺構
5第5号配石遺構 6～9 第15号土器埋設土塗 10 P区4層
11 8層 12～15 8a層 16～19 9層



第14図 山王廻遺跡出土土器拓影

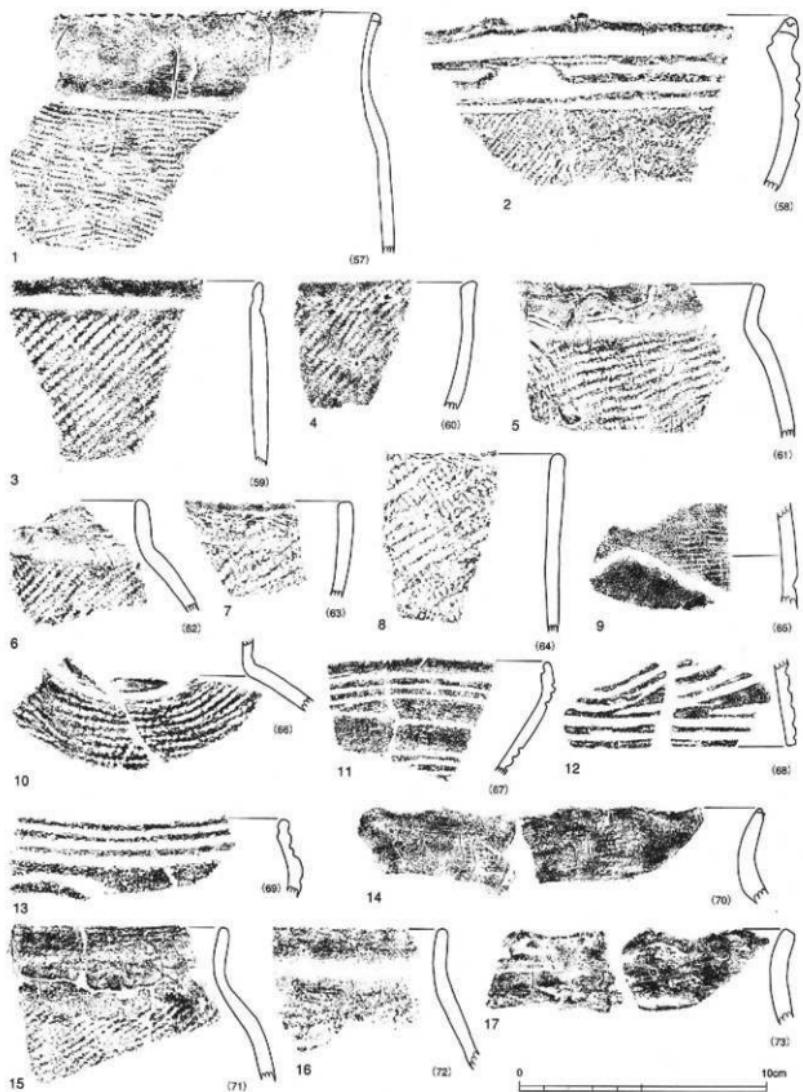
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



第15図 山王跡遺跡出土土器拓影

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

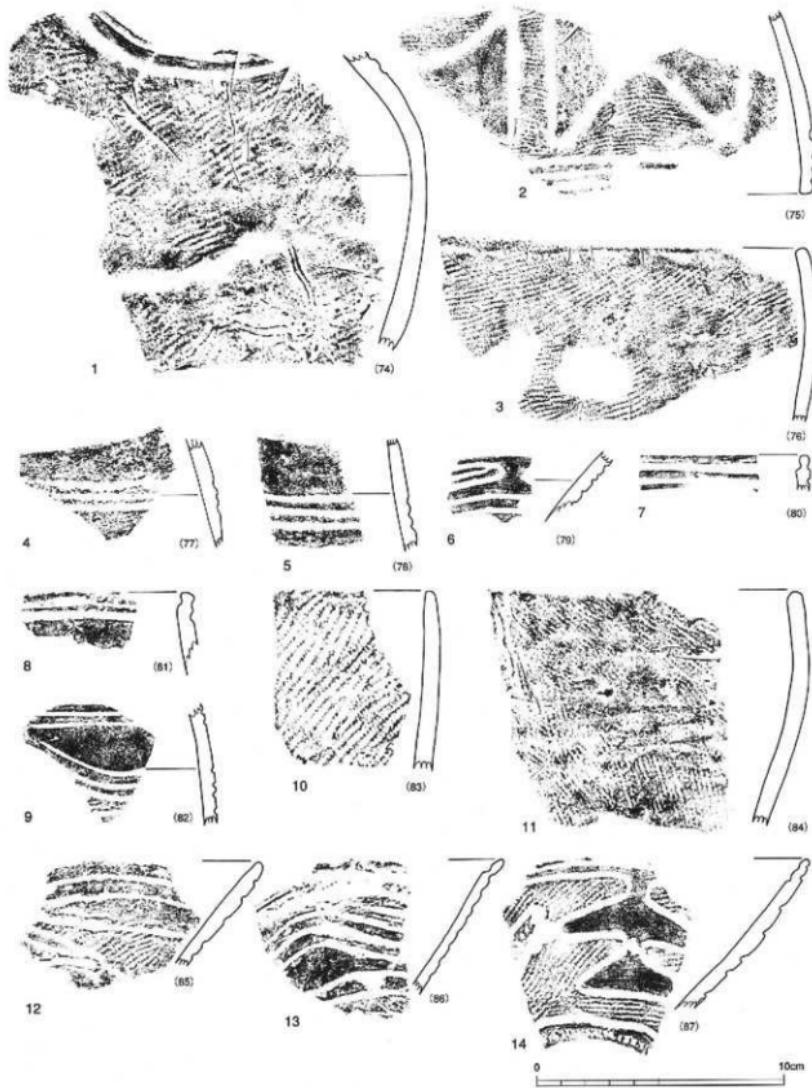
1~19 P区10層 20~24 11層



第16図 山王团遺跡出土土器拓影

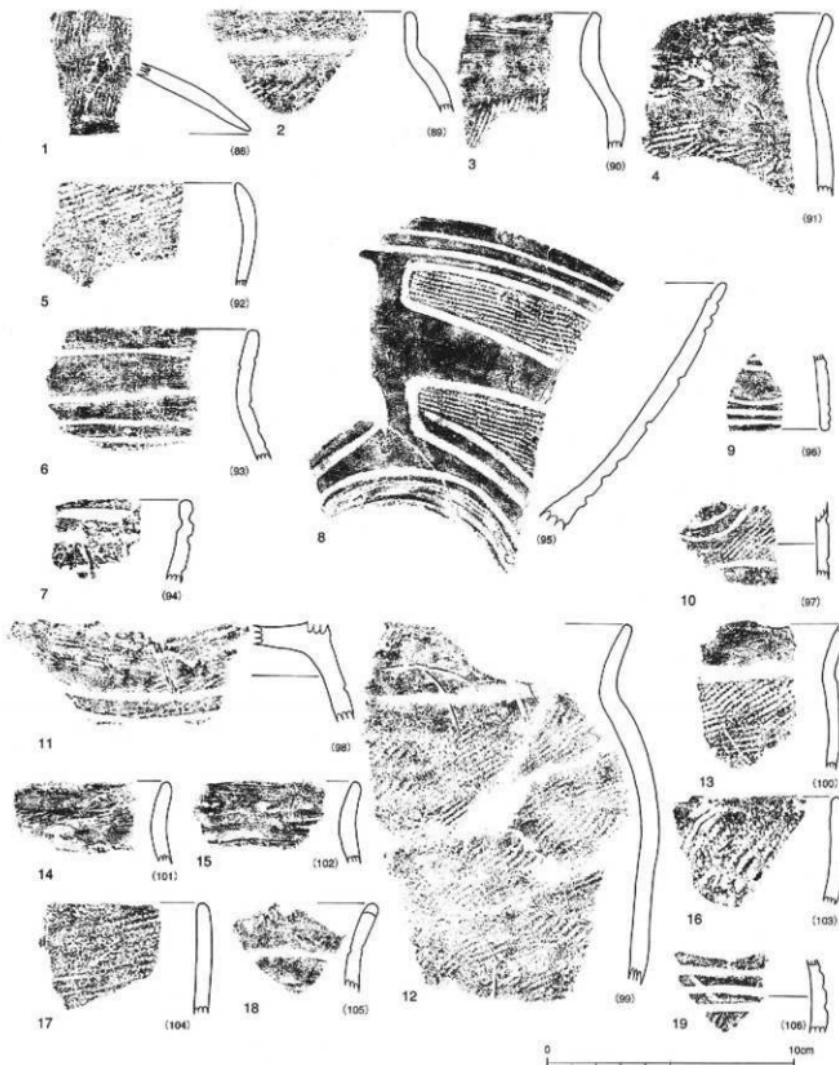
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1~4 P区11層 5~13 Q西区第1号堅穴状遺構
14 Q西区10層 15 11~12層 16・17 11層



第17図 山王ヶ遺跡出土土器拓影
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

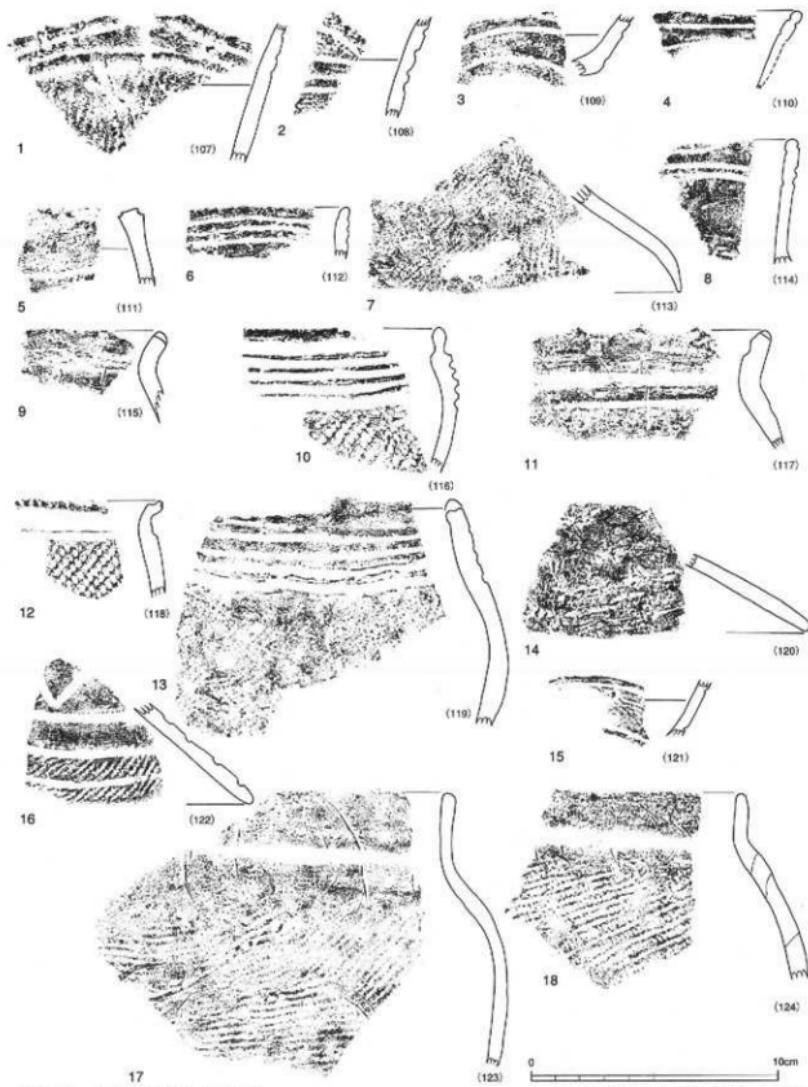
1～4・6～8 Q西区11層 5 11～13層
9～13 12層 14 13層



第18図 山王廻遺跡出土土器拓影

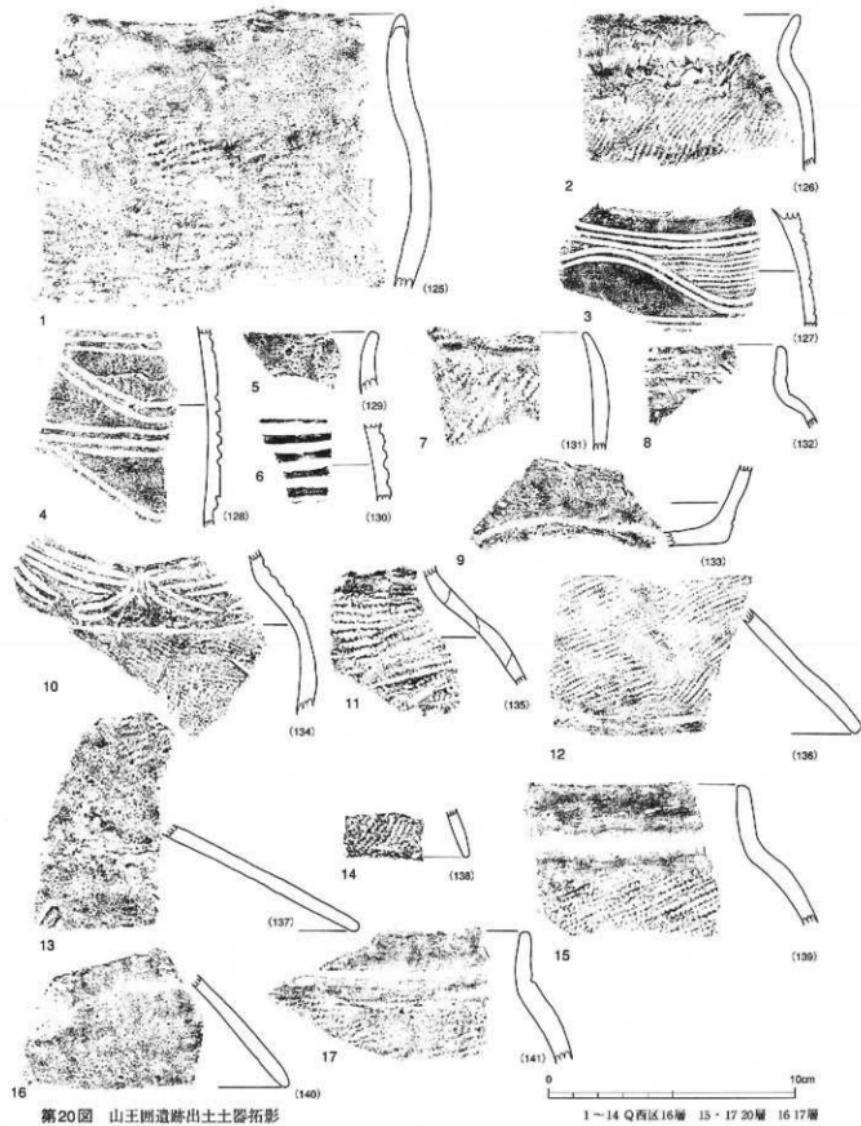
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1~19 Q西区13號

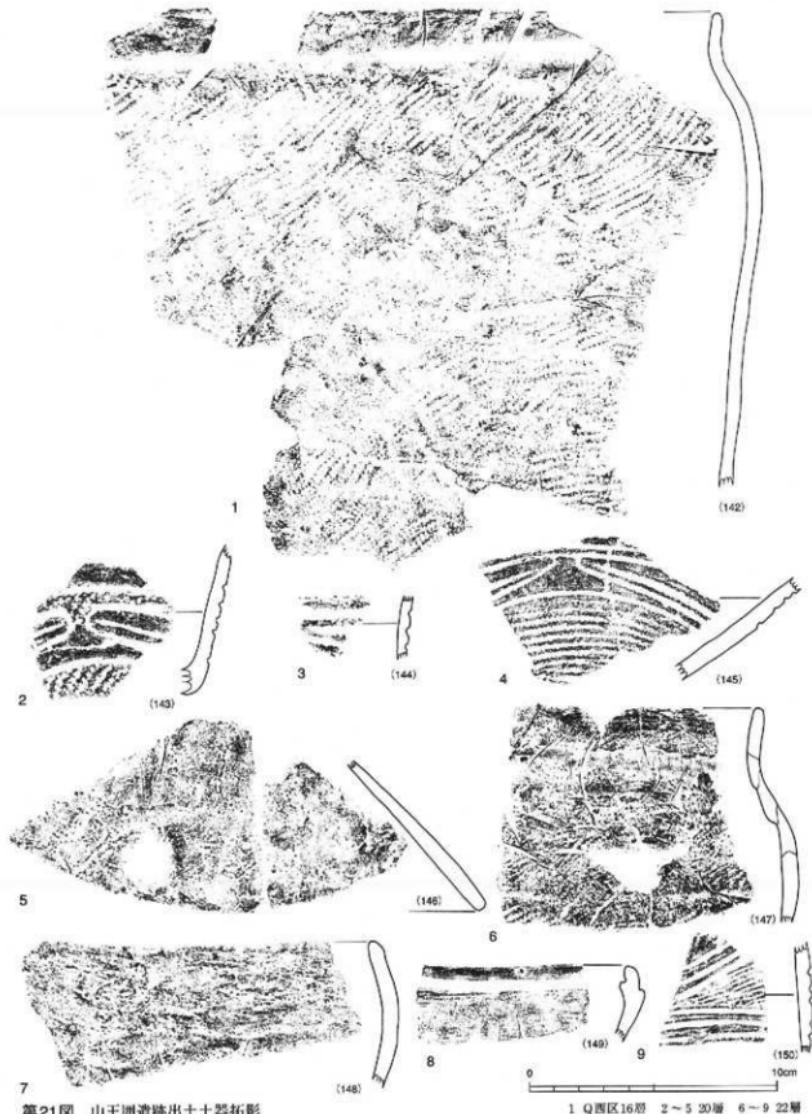


第19図 山王閣遺跡出土土器拓影
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1~12 Q西区13層 13~14 14層 15~16層
16~18 16層

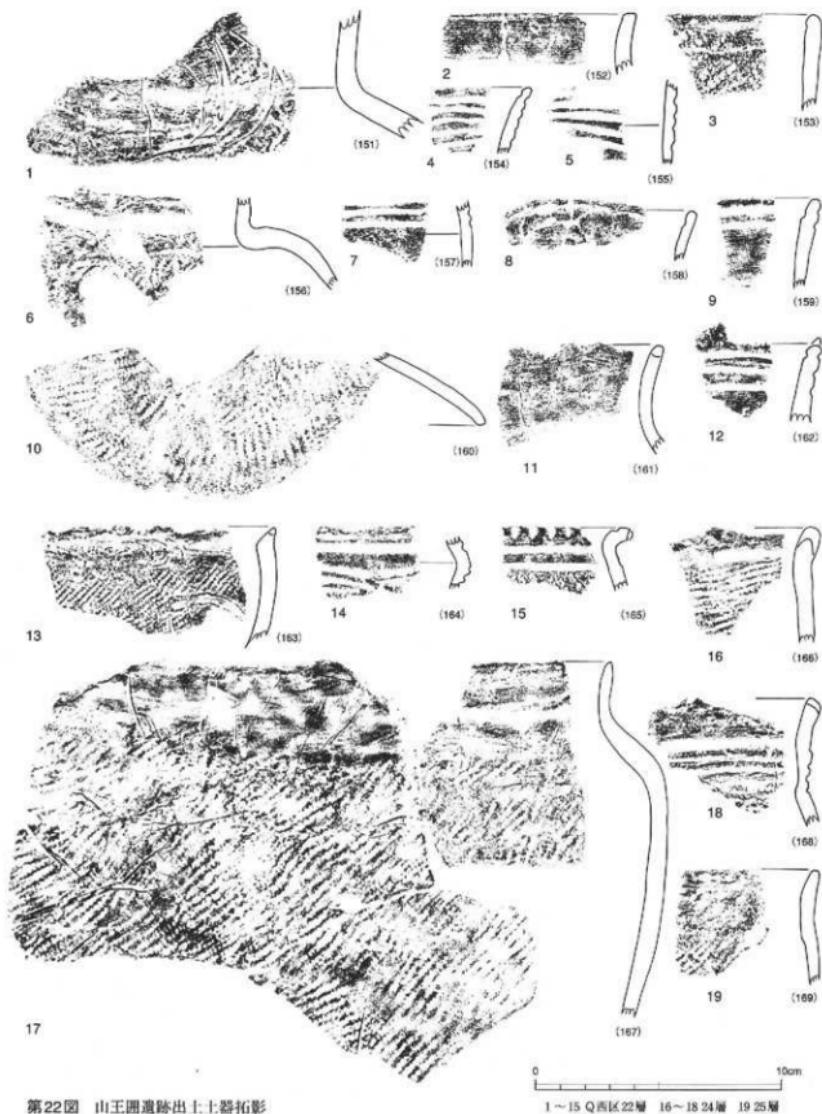


第20図 山王廻遺跡出土土器拓影
Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



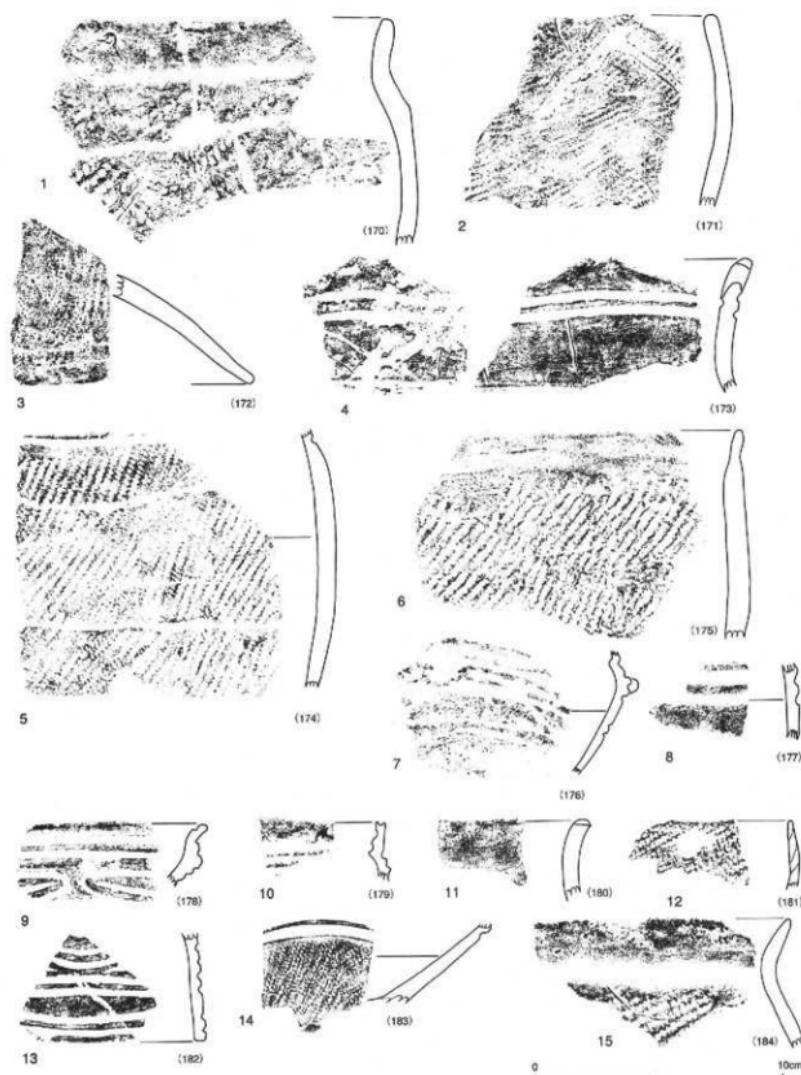
第21図 山王塚遺跡出土土器拓影

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



第22図 山王遺跡出土土器拓影

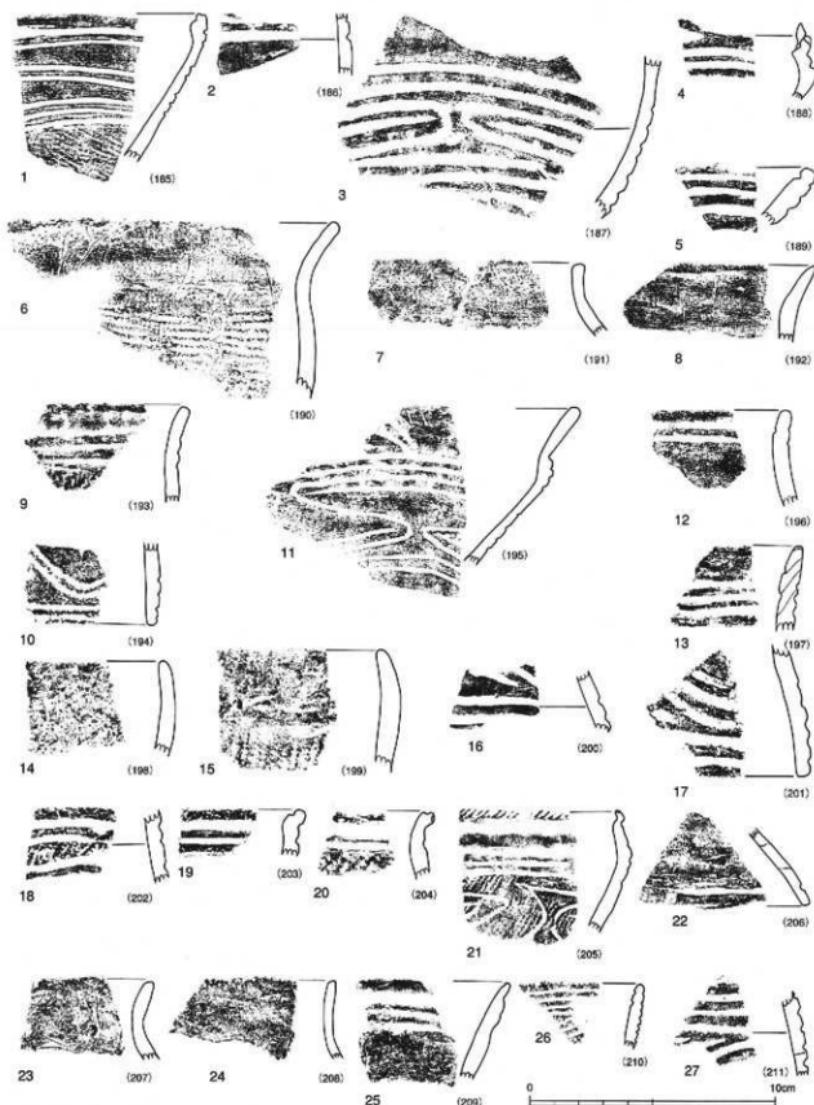
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



第23図 山王団遺跡出土土器拓影

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

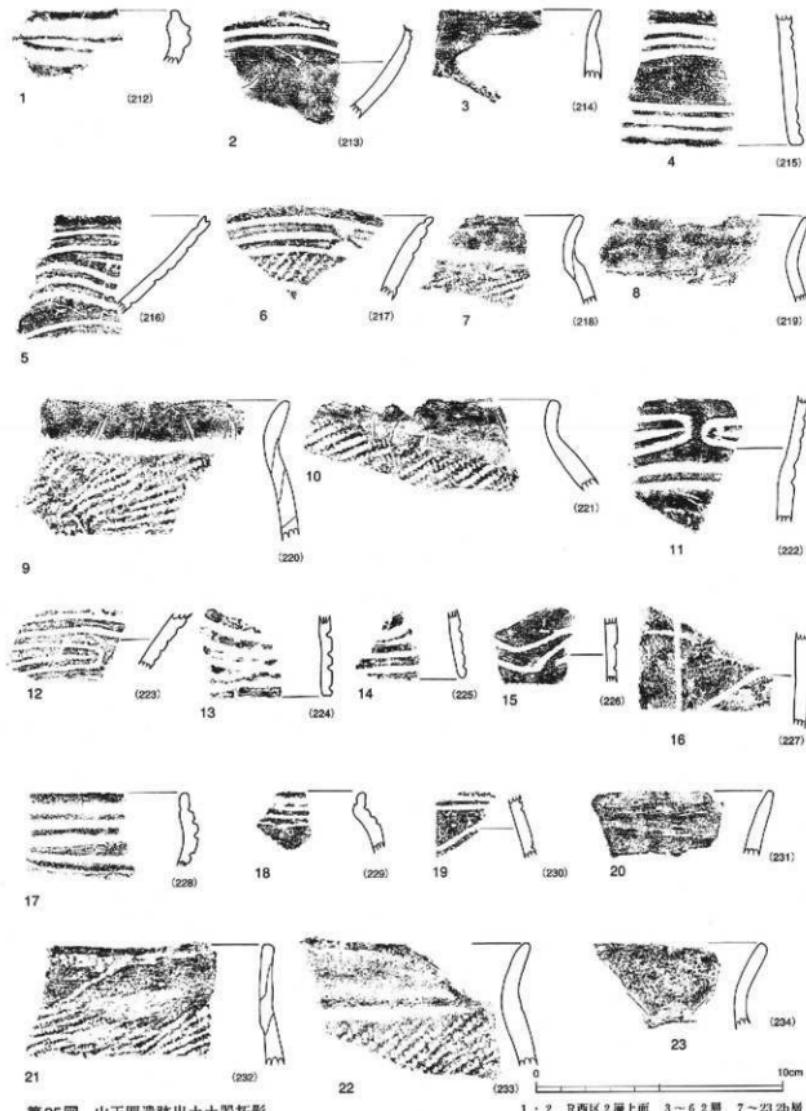
1・3 Q西区25層 2 24層 4～6 Q東区第10号土器裡段
土板 7 Q北区9層 8 Q北区包含層 9・10 R区ピット396
11～13 ピット397 14 ピット399 15 ピット402



第24図 山王塚遺跡出土土器拓影

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

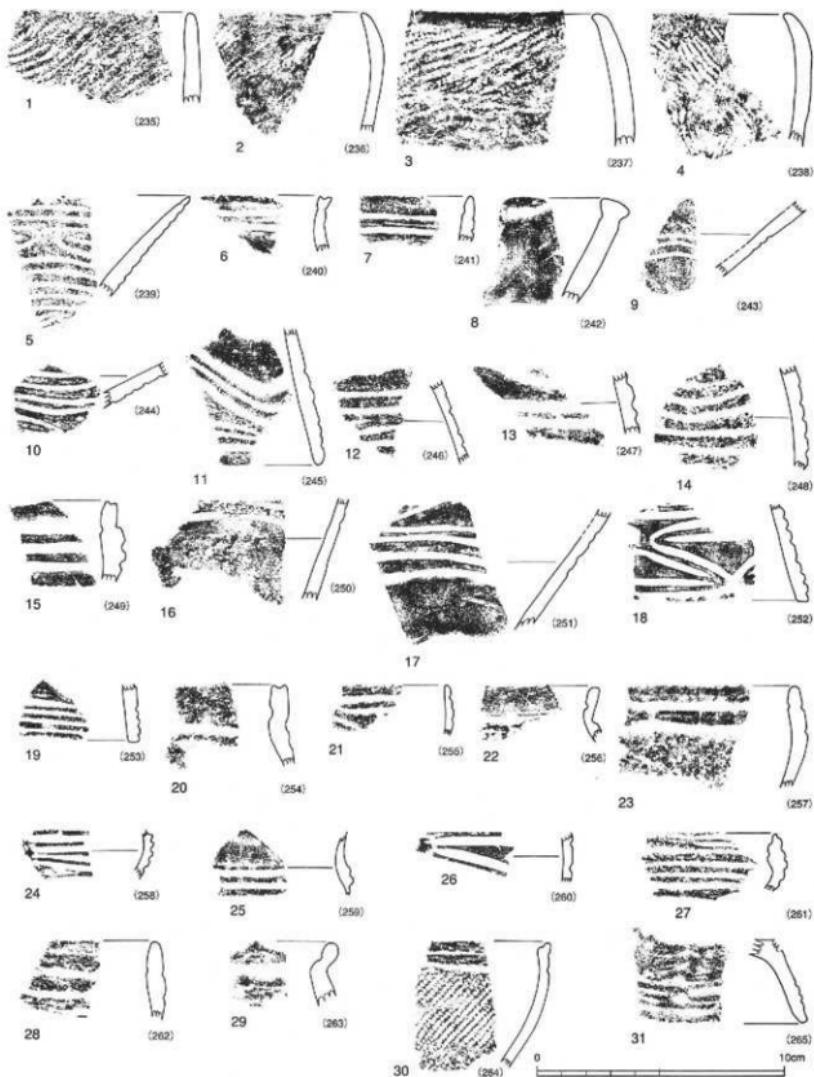
1~3 R区ピット402 4 ピット405 5 ピット406
6~22 R区1b層 23~27 2層上面



第25図 山王園遺跡出土土器拓影

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1・2 R西区2層上面 3~6 2層 7~23 2層



第26図 山王西遺跡出土土器拓影

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1~31 R区2b層

第22図8（P.L.21-2-9）は、口頸部が軽く外彎する小型壺である。丁寧に磨かれ、朱が塗布されている。同図9（P.L.21-2-2）は、口頸部が直上する壺で、器面は丁寧に磨かれ、口縁部に2条の平行線文があぐる。胎土には金雲母が観察される。こうした土器群の大部分は、山王Ⅲ層式に属するとみられる。

24層、25層出土土器（第22図16～19、23図1～3、P.L.8～11、21、22）

24層、25層では、弥生Ⅰ期の土器が主体的に出土している。発掘区の西寄りの地区から完形に近い土器が一括して出土した。

第8図版1（P.L.10-1）は平坦口縁の壺で、口径26cm、体部最大径30cmと比較的大型である。体部にはLR斜行繩文が施され、口頸部が軽く磨かれている。口頸部内面には磨きが加わり、体部はナデで調整されている。外面に約1.5cm幅で接合痕が観察される。第22図17は平坦口縁の壺で、口径は21cm程度と推定される。器面の調整方法や手順、土器の成形は第8図版1と非常によく似ている。

第7図版5（P.L.9-2）は、口径20cm、器高20cmと比較的小型の抱鉢形深鉢である。外面にはLR斜行繩文が施され、内面はナデで調整されている。底部には木葉痕があり、内面全体に炭化物が付着している。第7図版6（P.L.9-3）、8図版2（P.L.10-2）は、口頸部が屈曲する小波状口縁の深鉢である。第7図版6は口径14cm、器高19cmと比較的小型で、8図版2は口径23cm、器高30cmの大型深鉢である。いずれもLR繩文が体部に施されている。

第9図版1（P.L.11-2）は、変形工字文A2型の施される高杯で、弥生Ⅰ期の土器である。範描文を施し、反転部を彫り込み、粘土粒が貼付される。さらに器面は丁寧に磨かれている。口縁には円形の小粘土盤を貼り付けた山形突起と、頂部に1個刻みをもつ山形突起が交互に3単位配されている。口唇部には沈線1条が加えられる。内外面ともに朱が塗布されている。杯部のひろがりが強いのが特徴である。

第7図版4（P.L.11-1）は口径36cmの大型鉢である。口縁には対向する2個1対の山形突起が6ヶ所配され、口唇部に沈線が施されている。体部上半には5条の平行線が施され、3条の沈線間を5カ所で彫り込み、長径約5mmの粘土粒を彫り込みの両端に貼り付けて四字文を構成する。器面は丁寧に磨かれ、朱が彩色される。この土器は、突起の形状や体部文様、粘土粒などの貼付方法から、弥生Ⅰ期に属する鉢と考えられる。

第7図版3（P.L.8-5）は、体部最大径が10cm、高さ12cm程の小型壺である。頸部と体部下半に1条の沈線があぐり、外面は軽く磨かれている。器面には朱が塗布される。このような形態の土器は、秋田県地蔵田B遺跡、諏訪台C遺跡において出土しており、弥生Ⅰ期の土器と推定される。

Q北区（第23図7、9図版2、P.L.11、22）

この地区は、1965年度の調査区北側を確認するために発掘を行い、9層まで掘り下げた。9層から、2点の土器が出土した。第9図版2（P.L.11-3）は、口縁部端面に押圧による刻み目の加わる深鉢である。頸部に2条の沈線があぐり、体部にはRL斜行繩文が施される。外面に炭化物の付着がみられる。晩期Ⅳ期の深鉢である。また、第23図7（P.L.22-2-8）は、晩期Ⅳ期の鉢である。体部には磨消繩文手法による平行線文化した雲形文が施され、繩文原体は細いLR繩文が用いられている。この雲形文は、繩文晩期中頃の通常の雲形文に比べると平行線化し、反転部分が鋭く屈折する意匠構成となっており、Ⅳ期でもより新しい様相をおびる。

Q東区

第10号土器埋設土壙出土土器（第23図4～6、P.L.22-1-5、22-2-1、2）

第10号土器埋設土壙からは3点の土器が出土した。深鉢と壺がみられる。第23図4は、壺の口頸部で、口縁部には頂部に押圧のある山形突起が施される。この突起形状と、筒状の頸部に太い平行線2条がめぐっている点から、弥生II期に相当する壺と考えられる。類似した土器は岩手県上村貝塚から出土している。同図5は、口頸部に屈曲をもつ深鉢である。体部上半に平行沈線が2条施されている。また、同図6は、口縁部に屈曲をもたない、深鉢である。これらの深鉢も弥生II期に一般的にみられる土器である。

（高野・須藤）

R区出土土器

R区からは、縄文晩期Ⅴ期から弥生II期にかけての土器が出土しており、88点を資料化した。

ピット396（第23図9、10、P.L.22-2-3、7）

ピット396からは、高杯が2点出土した。第23図9は、弥生IIa期の高杯で、体部には変形工字文C1型が展開する。器面は磨きによって調整され、金雲母がみられる。同図10は、弥生I期から弥生II期の山形突起をもつ高杯で、器面は磨きによって調整されている。口縁端面に沈線が施される。

ピット397（第23図11～13、P.L.22-2-4、5、9）

ピット397からは、壺、深鉢、高杯が出土している。第23図11は、弥生II期の壺で、口縁部は押圧によって小波状を呈する。器面は磨きによって調整されている。同図12は晩期VI期から弥生IIa期の砲弾形深鉢で、LR斜行繩文が施される。同図13は弥生IIa期の高杯脚部で、3条の並行線による波状文がめぐり、磨きによって調整されている。

ピット399（第23図14）

ピット399からは弥生I期の高杯の体部が出土している。太い沈線による文様帶の区画線がみられ、体部下半にLR斜行繩文が施されている。丁寧な磨きによって調整されている。

ピット402（第23図15、第26図1～3）

ピット402からは、弥生II期の壺、高杯、鉢が出土している。第23図15は、弥生II期の平坦口縁の壺で、体部にLR斜行繩文が施されている。口頸部は横ナデによって調整されている。第24図1は弥生IIb期の平坦口縁の高杯で、体部下半にLR斜行繩文が施された後、変形工字文C2型が描かれ、磨きによって仕上げられている。胎土に金雲母が認められる。第24図3は、弥生IIa期の鉢、あるいは高杯で、体部に変形工字文C1型が展開する。器面には朱が塗布されている。器面に金雲母はみられない。

ピット405（第24図4）

ピット405からは、高杯が1点出土している。外面は磨き、内面はナデによって調整されている。口頸部、肩

部の形態、箋描文の様相から、縄文晩期Ⅵ期から弥生Ⅰ期の高杯と推定される。

ピット406（第24図5）

ピット406からは、弥生Ⅱ期の高杯が出土している。口縁部に突起が施されており、変形工字文C1型が展開すると推定される。器面はナデと磨きによって調整されている。

R区包含層出土土器（第24図6～27、第25図1～23、第26図1～31）

包含層1b層、2b層から、晩期Ⅳ期から弥生Ⅱb期の土器が出土した。出土土器には、層位的な変化はみられず、主体となるのは弥生Ⅱ期の土器である。

弥生Ⅱ期の土器は、壺、深鉢、鉢、高杯がみられる。壺は平坦口縁で、口縁部が緩やかに外彎する（第24図6、7、8、23、24）。口縁部は比較的長く無文である。体部には横走するLR繩文が施されている。深鉢は口縁部が外彎し、頭部に平行沈線がめぐる（第24図9、12）。鉢には、変形工字文C1型が施される（第25図11、12）。高杯は口頭部がくの字状に内彎し、体部に変形工字文C2型が施される（第24図11）。器面は丁寧に磨かれ、朱が塗布される。内面には炭化物が付着している。高杯脚部には、波状文（第24図10、第25図4、13～15）や、垂下文（第25図16）が施されている。胎土に金雲母が混和される。第24図10は、細く浅い2条の並行線によって波状文が描かれる。第25図4は、太い3条の沈線により波状文が描かれており、器面は丁寧に磨かれている。

弥生Ⅱa期の土器は、壺、鉢、高杯がみられる。第25図6は、屈曲なく広がる鉢で、口縁部にめぐる低い隆帯を上下から彫り込み、T字文としている。体部文様帶に磨消繩文手法による変形工字文（C1型）が展開するとみられる。このような装飾の鉢は、青木畠遺跡から出土している。

R区2層では高杯が日につく。この器種は、体部に波状文が展開するものがみられる（第25図5）。この土器は、山王園遺跡Ⅲ層下部から多數出土している。脚部には、変形工字文C型（第26図18）や、3～5条の平行沈線（同図19）、透し孔を有する波状文（第24図17、27、第25図13、14、第26図13、14）が施されている。特に、平行沈線や波状文は、比較的大く鋭い沈線によって文様が描かれている。

弥生Ⅰ期の土器としては鉢がみられる。鉢は山形の波状口縁をもち、口縁端面に沈線が加えられるもの（第26図15、20）と、平坦口縁で口縁部が内彎するもの（第25図17、第26図21）がみられ、体部には変形工字文A2型が展開する。

晩期Ⅵ期の土器には鉢がみられる。平坦口縁で、体部上半が内彎し、四字文（第25図1）や変形工字文A1型（第26図24）が施される。

晩期Ⅴ期の土器としては深鉢、鉢、台付浅鉢がみられる。深鉢（第26図29）は山形突起をもつ大波状口縁で、外反する口頭部をもつ。鉢（第26図30）は平坦口縁で、口縁部が内彎し、体部に平行線がめぐる。第26図31は鉢の台部で、四字文が施されている。

晩期Ⅳ期の深鉢、鉢がみられる。深鉢（第24図20）は平坦口縁に刻みが施されたもので、体部に平行線がめぐる。鉢（第24図21）は口縁部が内彎し、平坦口縁に刻みが加えられる。体部には、磨消繩文手法のみられる変形文が展開する。

（板田、京野、須藤）

(3) 土 製 品

土製品としては土偶頭部1点、蓋形土製品1点が出土している。

a. 土 偶

R西区の南北トレンチ北端、B Z 68区2b層から中空土偶の頭部が出土した(第9図版4、P.L.25-2-1)。頭頂部は剥落がみられるが、飾髪土偶と考えられる。頭部に径5mmの焼成前の穿孔がみられる。顔面はやや上向で、目、眉、耳、鼻、口は、粘土粒や粘土紐を貼付し、刺突や刻みを加えて表している。特に目と口は小さな環状の粘土帯で表されている。後頭部と胸部には範描文が施されている。頭部と背部は丁寧に範磨きを加えられている。類例は岩手県九年橋遺跡、中神遺跡(須藤編 1997)などにみられる。晩期V期の土偶と推定される。

b. 蓋形土製品

大きな円錐形の蓋状の土製品がR西区B Z 68区2b層から出土した(第9図版3、P.L.4-1、25-2-2)。直径5.5cm、高さ3.5cmあり、底面がかるく凹面になる。十字に隆帯が貼付され、隆帯上とその区間に細い沈線が放射状に施される。縁辺にも幅1cm程の隆帯が貼り付けられ、4~5条の平行線が加えられる。中央部には径2mmの焼成前穿孔が2個認められ、孔は垂直に貫通している。朱が塗布されている。岩手県軽米町大日向遺跡に類例がみられる(田嶋他 1995)。弥生時代I、II期に属する小型壺の蓋の可能性が考えられるが用途は明確ではない。

(坂田)

(4) 石 器・石 製 品

P、Q東、Q西、R区の遺構および遺物包含層から出土した石器のうち定型的な石器、あるいは調整加工が明瞭な石器を抽出して属性を観察、検討した(付表3)。対象とした石器は92点である。石器の器種認定基準は、基本的に第1、2次調査の報告書に従った。

石 鑿 (第10図版1~17、P.L.26-1~17)

石鑿は20点出土し、完形のものは7点である。長さは15.4mm~37.3mmの範囲で、20mm前後のものが多い。重さは0.37g~4.95gで1g前後に多く集中する。凸基有茎式が最も多く11点、凹基無茎式1点、平基無茎式2点、不明のもの3点である。両面加工のものが9点、半両面加工石鑿が4点、周縁加工のものが3点みられ、自然面や素材剥片の剥離面が残存しているものは比較的少ない。石材は鉄石英が13点をしめ、最も多く、他に真岩、黒曜石、珪質凝灰岩がみられる。破損は先端および基に見られ、第10図版1の石鑿先端は衝撃剥離の可能性が考えられる。第10図版9、11は茎部に黒色の付着物が認められる。

石 錐 (第10図版18~22、24、25、P.L.26-18~24)

石錐は7点出土している。完形品は1点、先端部が破損しているものが3点、基部が破損しているものが3点みられる。長さは27.4mm~36.4mmあり、重さは0.76g~2.28gである。棒状の類型が多く、基部の断面形が扁平あるいは橢円形を呈する類型がある。石材は黒曜石、鉄石英、真岩、珪質真岩、碧玉などである。両面加工で側縁から丁寧に調整され、中央に自然面や素材剥片の腹、背面を残すものが多い。第10図版24(P.L.26-22)の石錐は自然面のある剥片を横位に用い、剥片の左側に調整を加え錐部を作り出している。

石 鋏 (第10回版23、PL. 26-25)

頁岩製の石鋏がR区B Y68区ピット396の埋土から出土している。素材剥片の打面側につまみ部が整形され、背面側には整った周縁加工が施される。使用痕観察から、刃部に平行の線状痕を伴う使用痕光沢が確認された。

楔形石器 (第11回版1、PL. 27-1)

鉄石英製である。片面に大きな自然面を残し、上下からの剥離痕が認められる。

不定形石器 (第11回版2~6、PL. 2~6)

不定形石器は6点出土している。第11回版2は鉄石英製で、自然面が大きく残っている。第11回版3はP区から出土した。頁岩製で素材基部付近に二次加工が施される。第11回版5は、流紋岩製で素材末端の一部に連続的に二次加工が施される。第11回版4は鉄石英製でP区河川跡から出土している。一部に自然面を残し、素材背面側の周辺部に二次加工が施され、ノッチ状を呈する部分もある。第11回版6は頁岩製で分厚い剥片を素材とし、素材の背腹両面に比較的大きな二次加工が施される。

石庖丁 (第11回版8、PL. 26-27)

P区3a層から石庖丁が1点出土した。背部、刃部ともに外彫する半月形外彫型で、淡灰色の粘板岩製である。残存長56.4mm、幅39.8mm、厚さ6.7mmで重量20.33gである。全体の2/3程度が欠損しており、一端がわずかに残ったもので、破損に伴う剥離面が複雑に観察される。穿孔部分は失われている。両面、刃部、背部いずれも全体に丁寧に磨かれている。敲打痕はみられず、粘板岩の剥離性から、敲打の段階が省略された可能性を考えられる。また使用痕観察により穀類光沢とみられる鮮明な使用痕光沢が認められた。

この石庖丁は弥生中期中葉から後半に仙台平野・相馬・磐城地方で多数みられる型式である。木遺跡では本資料を加えてこれまでに2点の石庖丁が出土している。

磨製石斧 (第11回版7、12回版1~3、PL. 27-7~10)

磨製石斧は4点出土している。完形品は1点(第12回版2)あり、他の3点と異なって断面形が円形に近く、長さは99.5mmと小形の始刃石斧である。P区第3号配石遺構から出土した。敲打痕を身に多く残し、刃部は研磨によって敲打痕が除かれている。刃部には研磨面より新しい剥離と研磨痕があり、使用によって破損した部分を再成形したとみられる。第12回版1は平面形が楕円形、断面形が梢円形で、本来は始刃石斧として製作されたと推定される。刃部と基部に新しい剥離と研磨、敲打痕がみられる。敲打具に転用された結果と考えられる。第11回版7は断面が梢円形であり基部は欠損している。刃部には使用による破損と考えられる新しい剥離痕が認められる。刃部は敲打と研磨によって整形されている。第12回版3は平面形が短冊形、断面形が梢円形であり、始刃石斧である。基部は欠損している。刃部と体部には縱方向の研磨痕がみられる。

磨 石 (第12回版4、6、PL. 29-5、10)

磨石は3点出土している。6は完形品で重量1324.7gとかなり大型の資料である。磨面は2面に見られる。

凹 石 (第12図版5、第13図版1～6、P.L.29)

凹石は19点出土している。完形は13点であり、長径801～1195mm、短径622～991mmである。石材は安山岩、デイサイト、花崗岩などである。14点が両面に凹みを有するが、第12図版5、第13図版3のように比較的深く2個1対の円形の凹みを有するものが5点含まれている。第13図版1は側面にも凹みを有している。片面のみに凹みを有するものは5点あり、そのうち1点が2個1対の凹みである。凹みの深さは2個1対のものは共通して深いが、それ以外の石器は齊一性は認められない。凹みの位置や深さに齊一性がみられないのは使用法の相違によると推定される。

石 盆 (第13図版7、P.L.29-8)

破損品であるが、比較的大型で扁平な石盆が1点出土している。石材は安山岩である。中央に大きな凹みはみられず、平坦である。表面には敲打の跡痕がわずかに認められる。両面ともに全面が摩耗している。明顯な擦痕は少ない。周縁にもある程度の摩耗が観察される。

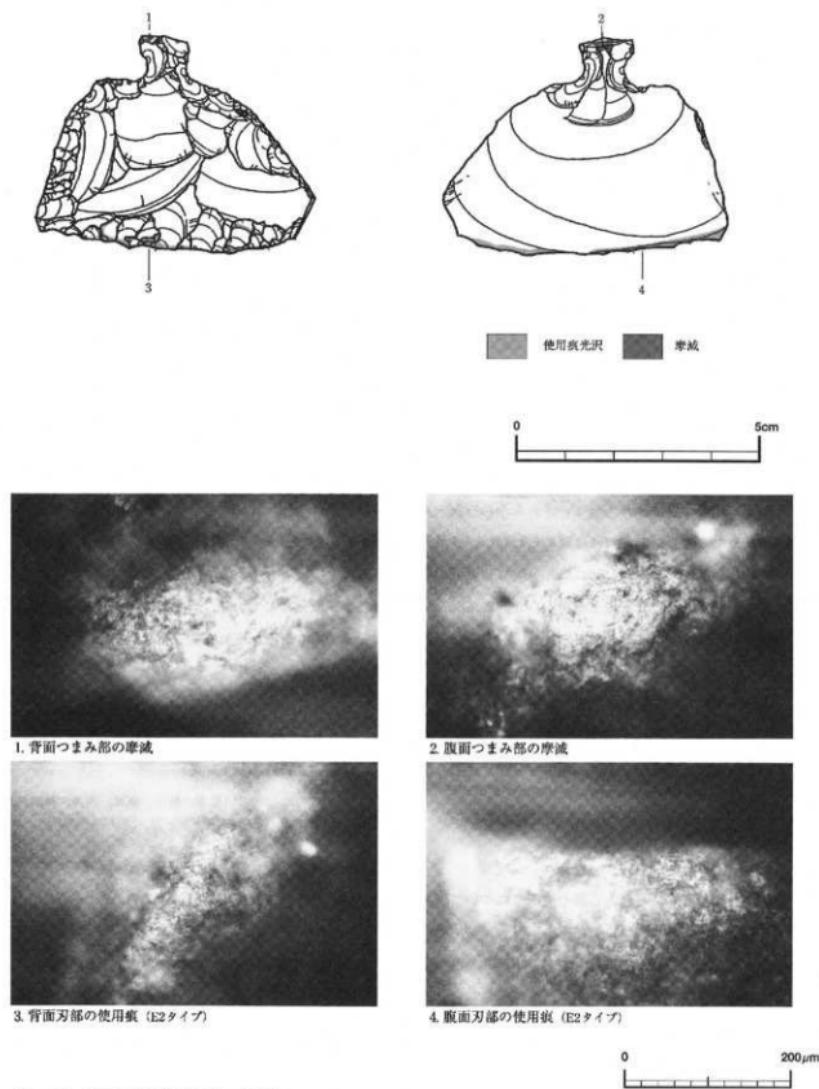
円盤状石器 (第14図版1～4、P.L.28-8～11)

円盤状石器はR区のピット内と包含層からそれぞれ2点ずつ計4点出土している。石材は安山岩およびデイサイト質凝灰岩である。長径は6～7cm、厚さは2～3cmの間に分布し、ほぼ共通した大きさである。いずれも周縁を整形し、平面形はほぼ円形を呈する。断面形は最大厚が一方に片寄り台形を呈するものと厚さがほぼ均等で長方形を呈するものとが認められる。整形は、周縁を打ち欠く整形と周縁からの整形がみられる。今回出土した資料では、切り合い関係から常に周縁からの整形が新しいことがわかる。また、研磨と整形の先後関係について、研磨が新しいものとその逆のものとが出土しており、研磨と整形が繰り返されていた可能性がある。

石 核 (第14図版5～7、第15図版1～4、16図版1、P.L.27-11, 28-1～7)

石核は8点出土している。P区10層から7点、Q西区から1点出土している。第16図版1は5号配石の下から出土している。石材は、鉄石英1点、真岩3点、デイサイト質凝灰岩4点である。第15図版1、第16図版1の2点は打面と作業面を交互に剥離している。細かい剥離が剥離面の打点付近に多く見られる。これらは、剥片剥離の際の打面調整もしくは頭部調整であると考えられる。これらは、大型で自然面が多く残されている。第14図版5、6、15図版2～4の5点は、打面転位が行われているものである。このうち、石器No.56、57、58は1～3回の打面転位が行われており、打面は約90度転位することが多い。また、これらは、大型で自然面が多く残されており、1個の原石から生産される剥片数は少ない。また、石器No.52、53は、頻繁に打面転位が行われ、小型で自然面があり残されていないものである。以上の7点は、いずれも頭部調整・打面調整があまり認められない。No.54は、剥離が1回行われただけのものであり、大型で自然面が多く残されている。打面調整が認められる。

以上8点の石核の特徴から、①打面と作業面を交互に剥離するもの、②90度の打面転位を行うものの、2種類に大別できる。①には調整技術が若干みられるものの、②には調整技術がほとんど認められない。また、自然面を残すものが多く、1個の石核から生産される剥片数は少ないと考えられる。



第27図 山王園遺跡出土石匙の使用痕

Use-wear of knobbed scraper excavated from the Sanno-gakoi site

剥片 (第16回版2~5、第17回版1~4)

剥片は多数出土している。P区10層から16点を測量記録している。これらのうちP区南東部の2号焼土およびその周辺から一括して出土した7点を資料化した(第16回版2~5、17回版1~4)。剥片の石材は、頁岩8点、鐵石英2点、珪化隕灰岩1点、凝灰岩1点、ガラス質デイサイト1点である。受熱痕のある剥片は16点中4点あり、そのうち3点はそれぞれ第1号焼土遺構、第2号焼土遺構から出土したものである。

完形剥片13点の長さ、幅、厚さ、重量の平均はそれぞれ、39.4mm、45.7mm、9.9mm、17.1gである。長幅指数(長さ/幅×100)は平均90.6であり、13点の完形剥片は長幅指数50~200の間にござる。これらのことから、出土した剥片は、長さと幅に大きな差のない不定形な剥片であると考えられる。

自然面のある剥片は16点中8点あり、自然面を打面としたものは3点ある。自然面を残す剥片が多いことがわかる。このことは、石核が大型で自然面を多く残すものが多いことに対応していると考えられる。

接合資料 (第17回版1~4、PL.30-4~7)

P区東南隅のB-H49の2号焼土の周辺から出土した剥片3点が接合している(第17回版)。頁岩製である。剥離はNa66(第17回版4)→Na64(第17回版2)→Na65(第17回版3)の順で行われている。Na66の剥離後、90度の打面転位が行われ、Na64、65が剥離されたことが分かる。このような90度の打面転位は出土した石核からも観察されている。打面を残すNa66、64はいずれも平坦打面であり、打面調整はみられない。また、頭部調整はNa66に若干みられるが、その他のものには認められない。2号焼土遺構から出土したNa66は受熱しており、他の2点は受熱していない。また、Na64、66には部分的に自然面が残っている。

この接合資料は、2号焼土遺構から北西にNa66、Na64、Na65の順に分布しており、剥離順序と一致している。各剥片の距離は、Na66から64が約10cm、64から65の距離が約50cmであり、それぞれ近接している。

石製小玉 (第11回版9、PL.26-26)

大きさは長径10.4mmで厚さが7.0mm、重量は0.98gでヒスイ製である。全体の形状はやや偏平で不整形を呈する。平らな面を穿孔面としている。穿孔は片面のみに見られ、作業途上で終了している。

(鈴木、池谷、鹿又、西井、神田)

使用痕分析

出土石器のうち、石匙と石錐の使用痕について観察を行った。石錐に明瞭な使用痕跡は認められなかった。

石匙 (第10回版23、27回)

つまみを有する横長の石匙である。つまみ部上端には背・腹面に摩滅が見られる(第27回写真1、2)。また、背面を構成する剥離面間の稜上には摩滅がみられ、直交の線状痕を伴う部分もある。刃部の縁辺と剥離面間の稜上には、平行の線状痕とE2タイプのボリッシュが広範囲に見られる(同回写真3)。腹面刃部の縁辺にはE2タイプのボリッシュに伴って、平行の線状痕がみとめられた(同回写真4)。部分的に直交や斜行の線状痕も認められる。使用痕観察の結果、乾燥皮のカッティング、ソーイングが中心的な作業であったと推定される。

(池谷、鹿又)

第4章 考察

第1節 P区検出配石遺構・土壤の性格と時期

第3次調査では、第1次調査で精査したG区の西側、1次調査のJ区と第2次調査のI区との間に、南北12m、東西24mの発掘区（P区）を設け、自然堤防の北西部に広がる遺構群の検出に努めた。その結果、I区、J区と同様にP区の東半に自然堤防の高まりが確認された。そして、P区では、自然堤防の疊層の上に堆積する土層のうち、10層の上面で縄文時代晚期最終末から弥生時代前期の遺構が検出された。配石遺構3基と土器埋設土壌4基、焼土の広がり3ヶ所である。配石遺構は、季大の疊が多数集中し、長径約70cmの広がりをもつ。その配石の構造は、疊の配列に規則性がみられず、きわめて確認にくかった。3号配石遺構では不整形の土壙が検出された。また、5号配石遺構では、疊集中の東よりに高さ35cm、口径25cm程の深鉢と高さ18cm、口径14cm程の小型深鉢が入れ子になって、長径30cm、深さ20cm程度の小上塙に埋設されていた。4号配石遺構では、周囲の土壙がきわめて複雑な様相を呈しており、土壙の確認はできなかった。

土器埋設遺構11～13、15号の土壙には、いずれも晚期最終末から弥生時代前期にかけての深鉢が正立の状態で埋設されていた。15号埋設土壙では推定最大径29cm、高さ30cm程の大型壺の上半部が検出された。この壺は弥生I期に属するとみられる。これらの遺構は、P区の北壁中央部に集中している。これらの遺構は晚期最終末から弥生前期にかけての上器棺墓であった可能性が高い。また、P区の東南部には、焼土の広がりが3ヶ所で検出された。1、3号焼土遺構は、10層の上面、2号焼土遺構は12層上面で確認され、焼土は、5cm前後の厚さをもっていた。柱穴、憩溝、壁などは検出されておらず、住居跡は確認できなかった。

このP区東半にひろがる配石遺構群、土器埋設、焼土遺構は、1次調査のG区で検出された疊の集中した配石遺構や土器埋設遺構と関連をもつと推定される。これらの遺構は、晚期最終末から弥生時代前期後半に属し、G区とP区にかけての径20m程の範囲に広がる墓域を形成していた可能性が高いと考えられる。

第2節 V字溝の時期と性格

さらに、今回の調査では、P区において自然堤防の北西辺に沿ってのびる低湿地および旧河道が確認された。この旧河道は、P区の西端部を南南東から北北西にのび、幅は6m、深さは2mを越し、流路に砂、シルトが厚く堆積している。南から北への流れが推定される。砂層から遺物が出土していないため時期は確定できなかったが、弥生時代にも機能していた河道とみられる。

この河道に平行してI区7、8号溝に連なる浅い溝—9号溝—が南南東から北北西にのびる。9号溝は、幅が3mあり、深さは10～15cm程度である。北側で深く南よりが浅い。中央に灰白色シルトが堆積している。灰白色シルト層の幅は、P区北寄りで幅2m、南で狭くなり、幅1m程度である。北半は一段と幅広く、深さも一定していることから、このシルト層の下に水田跡が埋没している可能性が予想された。そのため、このシルト層の下に広がる暗灰色粘土層において、土壙中のイネのプラントオバールの遺存状況を検討した。しかし、いくつかの

採集地点からわずかなイネのプラントオバールが検出されたにすぎず、水田土壤は確認できなかった。

断面V字形を辿るK区7号溝がのびる方向を確認するために設けたS区において、その西端付近で、東のK区7号溝から西にのびる深いV字溝と北に分岐してI区7号溝に連なる浅い8号溝が確認された。この浅い8号溝は、その構造、それを埋めるシルト層の広がり、V字溝との分岐部の構造から、断面V字形の深い7号溝から取水し、北流する溝と推定される。このような構造から、7号溝と浅い8号溝は、基本的に灌漑水路としての調節機能をもっていたと判断した。浅い8号溝は、深い7号溝から水が流入し、北側の浅い9号溝（くぼち）へと流れる取水路と推定した。

この灌漑水路では、3次調査のP区9号溝から弥生土器の破片がわずかに出土したにすぎないが、2次調査では、I区8号溝の埋土から新段階の山王Ⅲ層式土器が多数一括出土している。さらに、I区北壁の深掘トレンチによってI区溝の断面を観察した結果、8号溝が掘りこんでいる包含層（601～612層）との関係から、弥生時代前期前に8号溝が掘削され、前期末まで機能していたと推定した。そして、S区7号溝分岐点の検討から、K・S区7号溝（V字溝）とS・I区の浅い8号溝、P区9号溝は、基本的に一体で機能する灌漑水路の可能性が強いと考えている。

第3節 Q西区堅穴状遺構と包含層について

山王遺跡の所在する赤高地北東辺とその北側に広がる沖積地との間には、現在2m程の段差がみられる。これは、追川が浸蝕した低段丘崖と考えられている。この低い段丘崖から南側約20m離れて発掘区Q区を設け、自然堤防の北辺に広がる後背湿地の埋没状態と包含層の堆積状態を精査した。その結果、遺跡北東部の広がりを把握できた。このQ区の西南部発掘区（Q西区）では、1965年に調査された弥生時代前期包含層の西辺を検出した。この包含層は、全体に西にむかってゆるやかに傾斜しており、11層から25層まで15枚の堆積層がみられ、厚さ50cmを超す。11層から22層までが1965年度調査のⅢ層に相当し、その包含層の西縁辺にあたると判断した。11層・13層は、厚さ10cm程度、15・16層が厚さ5cm前後、20・22層が厚さ10cm程度と大きく3つの層群を形成し、多量の遺物が出土した。11、13、15、16層は山王Ⅲ層式新段階の土器群を出土する。20、22層は、古段階、青木畠式と共に通する土器群が出土している。

そして、20層と22層の下から、浅い堅穴状遺構1基が検出された。遺構は、直径4.0mと小型の不整円形である。北半分が精査され、壁の立ち上がりは確認されたが、全体に掘り形が浅く、柱穴、炉跡は認められなかった。堅穴埋土と底面には炭化物、焼土の小塊が多量に含まれていた。遺構の埋土は、10cm程の深さで、主として山王Ⅲ層式古段階の土器が含まれている。11点の出土土器について詳細に型式学的な検討を行った。この堅穴遺構出土一括遺物は、平坦口縁の甕が主体であるが、深鉢、壺、高杯の体部や脚部も若干ではあるがみられ、器種の組み合わせを多彩にしている。ことに口頭部がかるく膨らむ長胴深鉢はきわめて特徴的な器種類型である。頭部の膨らみに太い沈線で波状文が施されており、山王Ⅲ層式にはこれまで知られていない器形である。一方、この類型は青木畠式、生石2式に出土している。また、粗製の蒸沸形態には波状口縁の深鉢と平坦口縁の甕の両類がみられる。完全に復元できる土器は出土しておらず、破片が遺構内の壁寄りに散在していた。

さらに、堅穴遺構が掘り込まれた23層の下層の24、25層から、弥生時代前期前半の山王Ⅳ上層式土器（第22回

16~19、23図1~3、第7図版3~6、8図版1、2、9図版1)が一括出土しており、この包含層は、弥生前期前半(弥生1期)に形成されたと判断した。

この調査区では厚く遺物包含層が形成され、土器の一括出土はみられるが、土壤墓、埋設土器などはほとんど認められず、1965年に精査された遺物包含層の西辺にあたり、晚期終末から弥生時代前期の生活残滓の廃棄層が広がる。また、包含層で検出された竪穴遺構については、その埋土から土器、焼土、炭化物が出土する状況から、①土器の焼成遺構、②生活残滓の廃棄遺構、③竪穴住居跡といった可能性を検討したが、①あるいは②の可能性が高いと判断した。

土器作りに関する遺構としては、近年、粘土採掘跡の類例が増加している。晚期中葉大洞C2式期の粘土採掘遺構が、仙台市三神峯遺跡においても検出されている。しかし、土器の野焼きを裏づける遺構の確認は難しく、これまでに例がない。今回の調査では、浅い不整円形土壤に焼土ブロック、炭化物が多量に堆積していたこと、浅い埋土に土器片が集中したことなどから、ことに土器焼成遺構の可能性を検討した。今後、この遺跡における同様な遺構の検討が必要であると考える。この地域ではこの時期に多量の上器が出土しており、其幹集落で盛んに土器作りが行われていたと考えられ、こうした土器焼成遺構が集落に残されている可能性は高いと考えられる。

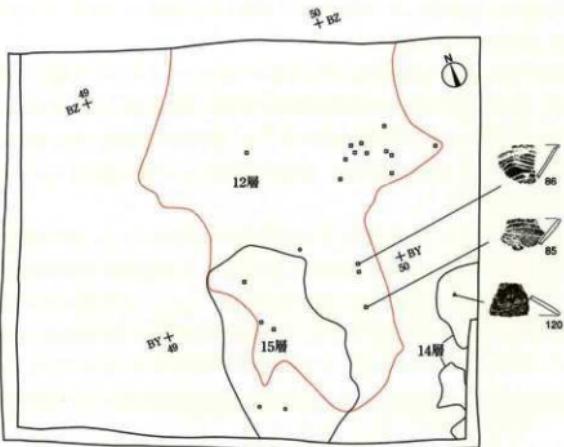
第4節 Q区包含層出土弥生土器

Q区西南部発掘区では、厚さ50cm程の弥生時代前期遺物包含層を精査し、その出土遺物の詳細な検討を行った。この包含層のうち、11層から16層は厚さ10cmから5cmの堆積層が複雑に重なりあっている。13層、14層、16層は上下に重なり合っている。11層はその西側に広がり、13、14層の下層、16層の上層にある。これらの層群から出土する土器群は、11・13層から16層までその特徴が共通し、山王Ⅲ層式の新段階にあたる。器種としては、平底口縁の壺、深鉢、鉢、壺、高杯、粗製蓋、そして精製蓋がみられる。高杯や鉢には太い籠指沈線による変形工字文C2型が施されている。その意匠は、晚期終末の変形工字文A型が大きく変容し、流水文のような構成に変化した類型が主体となっている。この山王Ⅲ層式の主要意匠は、変形工字文C型と命名されている。しかもさらに大きく変化した意匠(第17図2、14、18図8、19図16、20図3)がみられ、山王Ⅲ層式においてより新しい段階に属すると考えられる。

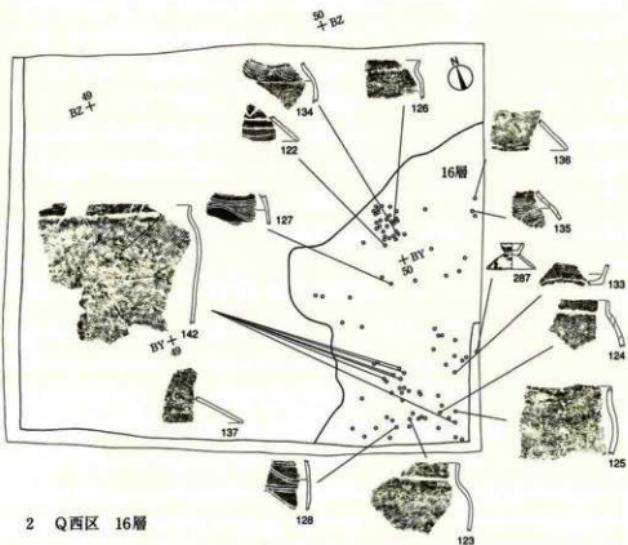
さらに、竪穴遺構の埋土から出土した土器群には、磨消繩文手法による波状文が展開する高杯脚部(第16図9)、3本の籠指線で波状文が展開する高杯脚部(同図12)、変形工字文C2型の展開する高杯(同図11)がみられ、やはりいずれも山王Ⅲ層式土器群である。また、口部に膨らみをもつ山王Ⅲ層式古段階の深鉢が出土しており、青木彌式、生石2式に近い土器群とみられる。

さらに、遺構が取り込まれている23層から25層の出土土器群は、山王Ⅳ上層式(伊東・須藤 1985)に相当し、弥生時代前期前半の土器型式である。波状口縁深鉢、平底口縁壺、粗製蓋が共伴する。

Q西区の11層から16層、20層と22層、竪穴状遺構、24層と25層の出土遺物の内容を検討した結果、弥生時代前期前半から前期後半にかけての土器型式変遷をあらためて確認することができた。しかも中間に23層のような無遺物層、竪穴状遺構などが展開しており、前期前半から前期後半の占段階、そして新段階へと層位的に変化する関係を確実に捉えることができた。

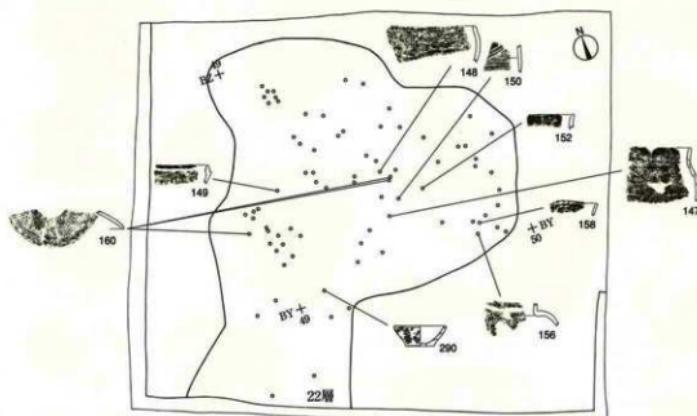
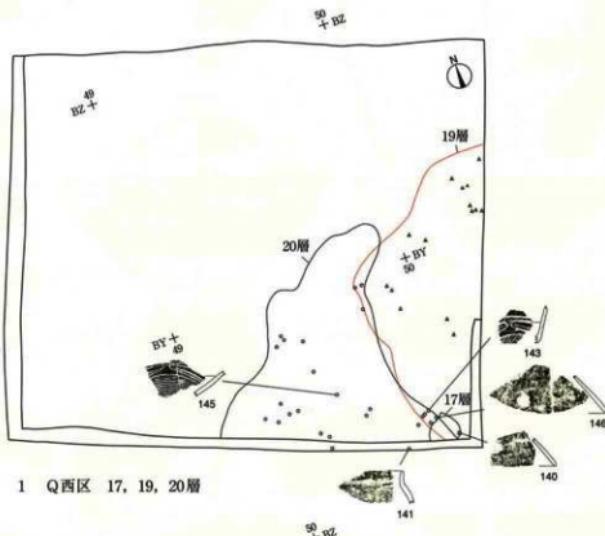


1 Q 西区 12, 14, 15層



2 Q 西区 16層

第28図 山王塚遺跡Q西区包含層のひろがりと土器分布状態 (12~16層) [Scale 1:60]
Distribution of the excavated layers and pottery at the Q trench



第29図 山王圓遺跡Q西区包含層のひろがりと土器分布状態 (17~22層) [Scale 1:60]

Distribution of the excavated layers and pottery at the Q trench



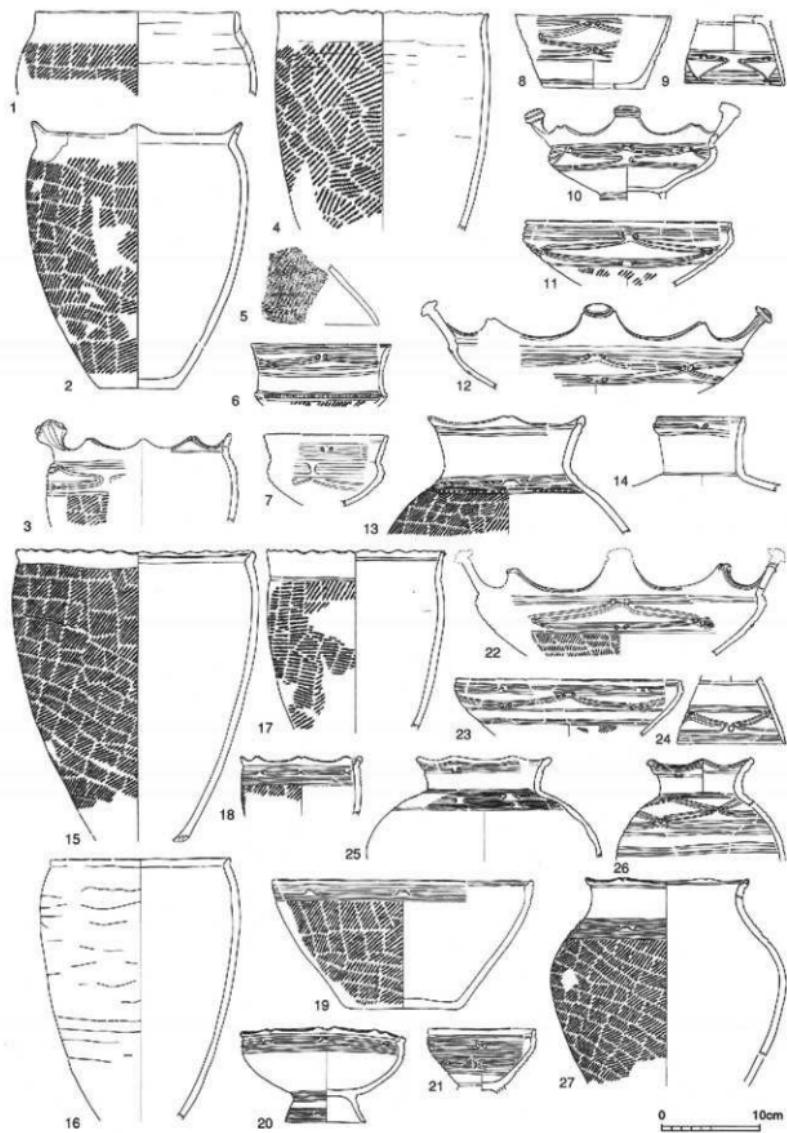
第30図 山王塚遺跡 1965年第Ⅲ層出土土器（須藤 1963から作成）

Yayoi pottery from Layer III at the Sanno-gakoi site in 1965

1~14・29~34 山王Ⅲ層式下層

15~22 山王Ⅲ層式上層

23~28 山王Ⅲ層式中層



第31図 山王圓遺跡 1965年第IV層出土土器

Jomon and Yayoi pottery from Layer IV at the Sanno-gakoi site in 1965

1~14 山王IV上層
15~27 山王IV下層

その土器型式の変化には、器種構成では、次のような特色がうかがえる。

- ① 晩期終末の粗製土器は、波状口縁の深鉢が主体であるが、弥生時代前期になると平坦口縁の甕が出現し、その頻度が上層で著しく増大する。
- ② 粗製甕とセットになる粗製蓋が出現し、上層でより多量に出土する。
- ③ 高杯が盛んに製作され、平坦口縁の高杯が上層で発達する。
- ④ 特徴的な形態の装饰鉢、深鉢が出現し、定着する。
- ⑤ これらに伴う装饰蓋がわずかに出現する。16層出土装饰蓋は、粗製蓋と異なった鉢を伏せた形態と推定される。1965年調査のⅢa層出土土器と接合した。この蓋に磨消繩文手法による太い範描の「入組文」が施されている。山王Ⅲ層式新段階に属する。中期前半への型式推移をうかがうことができる。
- ⑥ 大型甕は少なく、小型甕が目につく。

次に、装饰体系、施文手法、製作技法では次のような特色がみられる。

- ① 変形工字文A型からC型への漸進的変化が認められる。
- ② 変形工字文から複雑な意匠構成の入組文、波状文が出現し、発達する。
- ③ 磨消繩文手法が用いられるようになり、上層で一層発達する。
- ④ 粗製の蓋は、基本的にL R斜行繩文が外面に施されるが、11、20層では無文蓋も出土している。無文蓋には刷毛目調整手法は認められないが、西日本の遠賀川系土器の蓋との類似性がうかがえる。
- ⑤ 装飾土器と煮沸形態の間で器種によって胎土に大きな相違が確立する。ことに山王Ⅲ層式新段階の装饰土器における加熱され金色に発色した雲母の混和が特徴的である。

このように、山王Ⅳ上層式から山王Ⅲ層式への推移は、きわめて漸進的な側面と、器形や土器製作技術、意匠の新たな変革が複雑に絡みあっていることが指摘される。また、追川・北上川流域・北上山系などの広い地域で土器型式が齊一性を確立していることも顯著な特色である。さらに、下層の山王Ⅳ上層式土器は、東北地方北部の砂沢式土器と器種構成、装饰体系で強い共通性を示している。この砂沢式期の弥生前期前半には、東北各地で遠賀川系土器が出現、共存し、西日本の前期弥生社会から土器製作技術、土器そのものが盛んに導入されたことが裏づけられている。しかし、山王Ⅳ遺跡では、現在のところ、遠賀川系土器の搬入資料は確認されていない。今後、Q西区の包含層下層から出土した無文粗製蓋などについては、刷毛目調整などの技術的特徴を有する遠賀川系土器の搬入品、あるいはその技術のみられる折衷型遠賀川系土器の確認が必要である。

山王Ⅳ遺跡のⅢ層から出土した多量の土器群を基準資料とする山王Ⅲ層式土器を出土する遺跡は、・追町松風西、官城県篆館町淨土遺跡、喜倉貝塚、横須賀貝塚、館貝塚、敷味遺跡、岩手県花泉町貝島貝塚など、追川流域に多数の遺跡が知られている。また、北上川流域の宮城県上田町大泉遺跡、石巻市沼津貝塚、岩手県花泉町中神遺跡、白岩貝塚、一関市谷起島遺跡、滝沢村湯舟沢遺跡、松尾村長者屋敷遺跡、岩手町乙茂内遺跡など30ヶ所を超す遺跡が調査されている(須藤 1997、佐藤他 1987)。さらに、陸前高田市中沢浜貝塚、大船渡市長谷堂遺跡、宮古市上村貝塚など、北上川系と三陸海岸にも多数の遺跡が分布しており、豊富な資料が出土している。その分布域は、南北200km、東西80kmにおよぶ。弥生時代における土器型式の分布図としてはきわめて大きな広がりをみせる。このように、著しく齊一性の強い土器型式が発達することから、この広い地域の弥生集団に著しく共通した生活様式が確立し、緊密な集団関係が繰り広げられたことがうかがえる。

また、Q西区包含層の24、25層からは、1965年度に調査した低湿地包含層N層上部から出土した山王Ⅳ上層式土器が出土した。ことにその鉢、高杯の器形と竈描文の意匠構成、施文手法には、砂沢式土器との強い類似性が認められる。晩期終末から弥生時代前期にかけて広い地域で共通した土器作りが発達したことがうかがえる。このように砂沢式、山王Ⅳ上層式、山王Ⅲ層式には広い地域で土器の形態、意匠、製作技術、胎土に共通した特徴が認められる。この時期に東北地方の北部から中部にかけて広い範囲でこのような共通性の強い土器型式が成立する背景として、複雑多様な生活環境のなかにあって各地の集団間に緊密な交流関係が確立したことが考えられる。その集団相互の交流関係を明らかにするために、土器の器形や意匠などに関する型式学的研究を探るとともに、PIXEやX線回折分析法、偏光顕微鏡観察などによる胎土の検討、土器製作手法の分析などを併せて行い、土器の生産と供給のシステムをより明確にすることも重要な研究方向である。

1965年の調査と1997年の第3次調査の結果、遺跡北東部の自然堤防北端西側にひろがる後背湿地が埋没したのも、晩期終末から弥生時代前期にかけて東西20m、南北20m以上にわたって厚さ50cm程の包含層が形成されたことが明らかになった。包含層からは、1965年度の調査で膨大な量の土器、石器が層位的に出土しているが、今回の第3次調査でも包含層の西縁辺、堅穴状遺構とその周辺から豊富な資料が得られ、この時期の生活域が広い範囲で確認された。

こうした包含層の広がりと出土遺物の内容から、晩期中頃から後半に自然堤防の高まりで生活を営んでいた人々が、晩期終末から弥生時代前期にかけて北側に広がる後背湿地の埋没が進むとともに、生活域を西に拡大したことが明らかになった。そして弥生時代前期の遺物包含層からは、豊富な土器、石器などの遺物が出土しており、この時期の生活様式、物質文化の推移を捉えることができた。ことに、蓋をセットとして煮炊きに使用する竈の導入、定着、発達は、この時期に食生活のスタイル、生活様式の根幹に新たな変革があったことを示唆している。また、西側の7号溝の北側には前期後半の水田跡が展開する可能性が7号溝の深いV字状の構造と8号溝との連結・分岐関係から予想される。また、これまでに山王岡遺跡では2点の石庖丁が出土しており、この地域で弥生時代に水稻栽培が営まれていた可能性を一層強く示唆している。

第5節 出土石器について

第3次調査では、P区とQ西区において比較的多くの石器が出土した。今回、整理、分析を行った資料は、晩期後半から弥生前期にかけての包含層、配石遺構、焼土遺構から出土した石器群と石核、剥片の一部にとどまった。打製石器としては石鎌、石椎、石匙、楔形石器と不定形石器などが出土している。石材は、頁岩と鉄石英一碧玉が目につき、山王岡遺跡の石器製作の特徴的様相といえる。時期的には、晩期後半から弥生前期後半の石器群とみられる。内容を検討した結果、この移行期に打製石器には石器組成、材質、製作技術に大きな変化は認められない。ことにQ西区の包含層11~24層において出土した弥生前期の石器群については、晩期後半と基本的な変容はみられなかった。

出土石器の主体となる石鎌は、凸基有茎式が圧倒的に多い。精巧で薄手、小型の石鎌が出土しており、晩期から弥生前期の山王Ⅲ層式期にかけて大きな変化はみられない。また、凹基無茎式で基部が軽く内彎する比較的大きな作りの石鎌が出土しており、晩期に発達する根拠に着目する石鎌と同類型の可能性が指摘され、こうした

石器の製作、使用が晩期全体を通じて継続し、さらに弥生前期にも続いていたことが推定される。また、石錐には、やや幅広な剥片の一部を尖らせた類型、全体に細身に縁辺を調整して錐部を鋸くした類型、棒状石錐、と既に発達する類型のものが認められ、この種の石器にも基本的には大きな変容はみられない。楔形石器が1点確認されている。機能については特定できないが、その形態上の推定機能から、骨角器、木器の加工に欠かせない石器と推定される。出土量が少ない。

R区ピット396から、山王Ⅲ層式土器とともに石匙1点が出土した。弥生時代の石匙と推定される。丁寧な調整の縁辺、刃部、摘み部をもち、整った形態の横型石匙である。晩期からの伝統的な技術がよく踏襲されている。使用痕を観察した結果、光沢と線状痕が認められ、その機能、用途を推定する手掛かりが確認された。

こうした打製石器のあり方については、資料の出土量が限られているため、なお今後、調査資料全体についての詳細な検討が必要であると考えている。

剥片と石核が少數ではあるが出土し、基本的な剥片製作技術が検討された。石核は、盛んに打面転移されており、長さと幅に差の少ない剥片が作られ、石匙、石錐、不定形石器など多様な形状と機能の石器が製作されている。こうした剥片製作技術のあり方は、縄文時代から弥生時代にかけて広く認められる技術体系といえる。また、P区南壁の東寄りにある第2号焼土遺構から出土した3点の頁岩製剥片は、接合した。1点は受熱している。この墓域と推定される場にある屋外における作業を考える上で重要な資料であるが、遺構、石器の性格を特定することは難しい。

1965年度調査で多量に出土した円盤状石器が、3次調査で4点出土した。いずれも扁平な縁の周辺に剥離調整と研磨がみられ、植物等を敲打したり、磨り潰す用途が推定される。この石器も中沢日貝塚や九年橋遺跡など晩期に多く認められる石器である。1965年度の調査では晩期Ⅳ期とV期に多く（伊東他 1985）、弥生時代前期の山王Ⅲ層式期には皆無であり、これらの資料も晩期後半の石器とみられる。

また、ヒスイ製の小玉がR区包含層から1点出土した。この玉は晩期後半のものと推定される。径1cm、重量1g程度の小型品で穿孔途中の未成品である。比較的小さなヒスイがこの集落に搬入され、製品に加工されていたことがうかがえる。

さらに、今回の調査では、弥生磨製石器に蛤刃石斧2点と石庖丁1点がはじめて確認された。完形の蛤刃石斧1点は、長さ15cmの小型品で、敲打痕がよく残った断面が扇円形の石斧である。他の1点は、幅8cm、厚さ5cm、長さ20cmを超すとみられる大型蛤刃石斧である。いずれも形状は晩期の磨製石斧とは異質である。また、敲打調整が顕著にみられる点もこの時期の特徴とみられる。

石庖丁は、推定長15cm前後、幅4cm程の鋸彎形、外弯另外彎背の類型である。両面、背、刃、端部が丁寧に研磨されている。紐孔が欠損しており、穿孔法は不明である。P区の上層3a層から出土しており、時期は特定できない。しかし、その形態、整形法や粘板状の石質などから、仙台平野と相馬・いわき地方にひろく分布する中期前半から中葉の石庖丁の中型品（須藤 1984）と推定される。この石庖丁には、金属顯微鏡の観察で穀物光沢が認められ、イキなどの収穫を盛んに使用したのち、廻収されたものと推定される。蛤刃石斧、石庖丁が使用されていたことが確認されたことによって、追川の最上流域において、前期の弥生集落が出現し、弥生文化が確実に定着、発展していく動向をうかがうことができたといえる。その間、この山王Ⅲ層遺跡の弥生集落は、この地域の拠点集落として中核的で重要な位置を占めつけたと考えられる。

（大場、須藤）

結語

今回の3次調査では、遺跡の西側と北側に重点をおいて、晩期から弥生時代にかけての集落構造の変遷を追求した。2次調査でI区北壁のトレンチで出土した晩期後半のクヌギ製堅柱、加工木、ヒエ、アサなどの栽培植物の出土から、この時期の農耕遺構の追求を低湿地において試みた。その結果、遺跡の中央部を東西に区画するV字溝—7号溝が、浅い8号溝に分流する灌漑水路として機能していた可能性が指摘されるに至った。また、水路の北側には洪水後に沈殿したとみられる灰白色シルト層の堆積する浅いくぼ地（9号溝）が広がり、今後この北側では水田遺構の調査が必要と考えている。現在のところくぼ地の性格は不明である。

また、居住域の西側に晩期終末から弥生前期の配石遺構、埋設土器、焼土遺構などが群在する墓域の可能性が推定される遺構群が広がっていることが明らかになった。

さらに、遺跡の東北部での調査区では弥生時代の包含層の広がりが明らかにされ、その中に山王Ⅲ層式土器と炭化物を多量に出土する深い竪穴状遺構が検出された。こうした遺構の性格については今後慎重な検討が必要である。また、これらの遺構と包含層からは層位的に多量の前期弥生土器が出土しており、その土器型式の変遷を詳細に検討し、縄文時代晩期終末から弥生前期後半にかけての東北地方中部における十器型式変遷の漸進性と新たな変容との動向をより明確に捉えることができた。山王Ⅲ層式土器はこの地方の縄文・弥生変革期を代表する重要な遺跡である。

さらに北端の調査区では晩期終末から前期後半の土壤が確認され、自然堤防上の広い範囲でこの時期の集落が営まれていたことが確認された。

さらにQ区において、1965年度に伊東信雄東北大学教授が調査した低湿地包含層についてもその現状を確認するための旧発掘区の検出調査を実施した。その結果、発掘調査区の北壁と西壁を確認し、その保存状態を確かめることができた。涌水が激しく、崩壊しやすい状態であり、この地区の再調査については極めて慎重な取り組みが必要であることがあらためて確認された。また調査の体制、方法を充分に計画して4次調査を実施することが必要であると判断された。

このような成果をふまえ、今後、4次調査計画を策定していくこととしたい。

(須藤)

引用・参考文献

- 安部 実 他 1987 「生石 2 遺跡発掘調査報告書（3）」『山形県埋蔵文化財調査報告書』117 （山形県教育委員会）
- 伊東信雄 1966 「繩文時代の布」『文化』30-1 pp.1-20
- 伊東信雄・須藤 隆 1985 「山王遺跡調査図録」（宮城県一迫町教育委員会）
- 恵美 昌之 1979 「十二塚遺跡」『昭和53年度遺構確認調査報告書』（名取市教育委員会）
- 小野田哲憲・高橋義介 1991 「上村貝塚発掘調査報告書」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書』158 （岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）
- 加藤道男 1982 「青木畠遺跡」『宮城県文化財調査報告書』85 （宮城県教育委員会）
- 加藤道男 他 1986 「中沢貝塚」『田尻町文化財調査報告書』 第2集 （田尻町教育委員会）
- 柄生正一 1986 「湯舟沢遺跡」『龍沢村文化財調査報告書』2 （龍沢村教育委員会）
- 工藤弓司 他 1996 「中在家南遺跡」『仙台市埋蔵文化財調査報告書』213
- 上藤利幸・中川重紀・田村狂一 1986 「馬場野Ⅱ遺跡発掘調査報告書」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書』99 （岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）
- 小林圭一・大泉寿人郎 1997 「北柳1・2遺跡」『山形県埋蔵文化財センター調査報告書』48 （山形県埋蔵文化財センター）
- 佐藤正彦・蒲生麻理子 1987 「中沢浜貝塚発掘調査報告書」Ⅲ（陸前高田市教育委員会）
- 志賀 審治 1971 「鰐沼遺跡」
- 菅原俊行・安田忠志 1986 「地蔵田B遺跡」『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 pp.11-262 （秋田市教育委員会）
- 須藤 隆 1983 「東北地方の初期弥生土器－山王土器式－」『考古学雑誌』68-3 pp.1-53
- 須藤 隆 1986 弥生時代・統繩文 図説発掘が語る日本史 I 北海道・東北編 pp.113-148
- 須藤 隆 1990 「東北地方における弥生時代農耕社会の成立と展開」『宮城の研究』I pp.238-303
- 須藤 隆 1990 「東北地方の弥生文化」『伊東信雄先生追悼考古学古史論叢』pp.243-322
- 須藤 隆 1997 「東北地方における弥生文化成立過程の研究」『歴史』89 pp.44-82
- 須藤 隆 編 1984 「福島県会津若松市墓葬遺跡」『1980年度発掘調査報告書』（会津若松市教育委員会）
- 須藤 隆 編 1997 「中神遺跡の調査」（東北大学文学部考古学研究室）
- 山浦秀夫・齊藤邦雄 他 1995 「国道395号改良工事関連遺跡発掘調査 大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書－第2次～第5次調査－」『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書』225 （岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）
- 高橋忠彦・広嶋 司 1984 「中山一・中山遺跡発掘調査報告書」（五城目町教育委員会）
- 高橋与右衛門 他 1997 岩手県県北農業技術センター（深谷）関連遺跡発掘調査 和當地Ⅰ遺跡発掘調査報告書 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第259（岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）
- 利部 修・和泉昭一 1990 「鹿訪台C遺跡発掘調査報告書」『秋田県埋蔵文化財調査報告書』196
- 永井久美男 1996 「日本出土銅鏡観」1996年版（兵庫県埋蔵文化財センター）
- 中里寿克・江本義理・石川陸郎 1971 「宮城県山王遺跡出土柄葉穿孔の技法と保存処置」『保存科学』7 pp.47-60 （東京国立文化財研究所保存科学部）
- 村越 澄・成田正彦 他 1991 「砂沢遺跡発掘調査報告書－本文編－」（青森県弘前市教育委員会）
- 明治大学考古学博物館 1991 明治大学考古学博物館蔵品図録2 『繩文晩期の世界』pp.86、87
- 本山幸一・滝沢秀一 他 1963 「越後のアンギン」（津南町教育委員会）
- 渡辺 誠 1990 「織布の研究」『荒屋敷遺跡II』（小柴吉男編）pp.750-758

付章1 山王園遺跡の灰白色火山灰の分析結果

阿子島 功（山形大学人文学部環境地理学）・擅原 徹（京都フィショントラックk.k.）

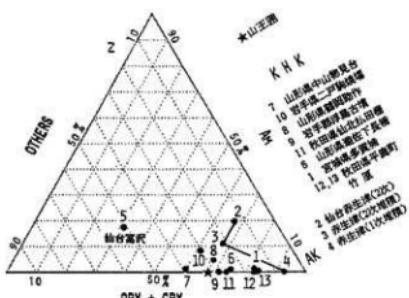
分析を行った火山灰はP区トレント北壁の第4層の灰白色火山灰層である。

この火山灰層は浅い谷を埋める堆積層にはさまれていて、層厚は最大数cmで、きれぎれになっている。P区トレントの北西部は微高地を刻む深い谷であり、西側にわずか深くなっている。試料採取位置は、谷のほぼ中心で、地表より約0.5m下、亦生時代の遺物包含層の上面より0.5m上の層準にある。その上は氾濫堆積層の細砂層、下は同じく細砂および細砾層である。谷の基底の断面形に比べて、「より浅い凹形～ほとんど水平」を示す。すなわち、深い谷がほとんど埋もれきった状態で火山灰層が堆積している。

分析結果を表4、図32、33に示す。重鉱物組成 (Idd32) は、従来より灰白色火山灰KHKとよばれていた十和田a (To-a) 火山灰に似ている。火山ガラスの屈折率の最頻値 (60%以上集中) は $1.506 < N_d < 1.507$ であり、多賀城東門溝、仙台市富沢水田跡遺跡、仙台市赤生津水田跡、山形県遊佐町下長橋遺跡 (雨落ち溝)、秋田県横手市竹原 (露頭) 遺跡、秋田県仙北郡払田橋はか (いずれも阿子島・擅原、1991が分析値を記載) のKHK火山灰のそれとよく似ている。比較のため図33右に赤生津遺跡第6層 (1次堆積の層準) の火山ガラス屈折率頻度グラフを示す。したがって、山王園遺跡の灰白色テフラは時期的にも915年A.D.のTo-a火山灰に対比してよいと考えられる。

白頭山火山灰B-Tmとされる秋田県峰浜村上井の試料では1.511付近と1.519付近に2つのピークがあり、KHKとは異なる。なお、山王園テフラの火山ガラスに、屈折率が1.498+、1.500+、1.502+の粒子が各々1個含まれているが、ほかのテフラからの混入も考えられるし、また岩手県二戸町耐焼場 (ST埋め土中、9°C後葉-10°C前葉) のKHKは1.495付近にもうひとつのピークをもっている。

試料の分析方法



第32回 灰白色火山灰の重鉱物組成
Heavy minerals of the grayish white tephra.
★ KHK tephra in Sanno-gakoi.

(1) 前処理 半湿潤状態の生試料を適宜採取秤量し、50°Cで15時間乾燥させ、乾燥重量測定後、2ビーカーで数回水替えしながら水洗し、その中の超音波洗浄を行う。この際、中性のヘキサメタリン酸ナトリウムの溶液を液濃度1～2%程度となるように適宜加え、懸濁がなくなるまで洗浄水の交換を繰返す。乾燥後、使い捨てのフルイ用メッシュ・クロスを用い、3段階の篩別 (60, 120, 250mesh) を行い、各段階の秤量をする。これらの120～250mesh (1/8～1/16mm) の粒径試料を比重分別処理等を加えることなく、封入剤 ($N_d = 1.54$) を用いて岩石用薄片を作成した。

第4表 テフラ分析結果表

Analysed result of the grayish white tephra.

Whole Mineral composition (4-2), Heavy minerals (4-3) and refractive index of volcanic glass particle (4-4).

4-1 試 料 名	処理生試料 乾燥重量 (g)	箇別試料重量 (g)			色 調	以下試料の 分析方法は (1)~(4)を參 照。
		>1/4 mm	1/4~1/8 mm	1/8~1/16 mm		
山王園 P 区北壁 4 層の灰白色火山灰	6.49	—	0.20	0.77	10YR 8.2 灰白色(乾)	10YR 7.2 に近い 黄褐色(湿)

4-2 全鉱物組成

火 山	軽量物	重量物	岩 片	その他	合 計	備 考
159	27	5	9	—	200 個	pm>bw型ガラスを主とする軽石質テフラ。pm ガラスは $n = 1.505 - 1.508$ 。 bw ガラスは $n = 1.499 - 1.502$ 。hydration layerが2~3 μmで非常に若いテフラ。
79.5	135	25	4.5	0.0	100.0%	少量のスコリアガラスも含む。岩片はガラス質で一部風化石。

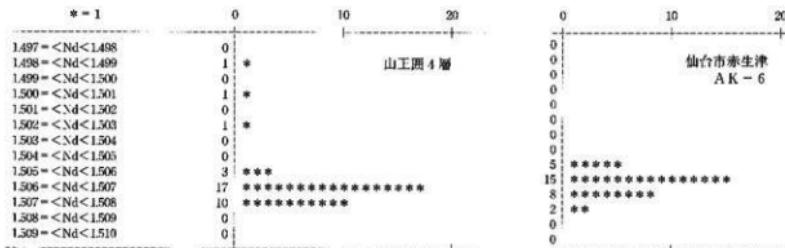
4-3 重鉱物組成

OI	Pyroxene		Amphibole		Opx	Cum.	Zr	Bi	Ap	total	備 考
	Opx	Cpx	BHo	GHo							
-	71	48	—	—	26	—	—	31	2	178	個
0.0	39.9	27.0	0.0	0.0	14.6	0.0	0.0	17.4	1.1	100.0	%

4-4 火山ガラス屈折率測定

屈折率範囲 (range)		屈 折 率 平 均 値 (mean)	測 定 個 体 数 (個)	屈折率最高値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
最 小	最 大				
1.497	1.502	1.5004	3	1.506≤Nd<1.507 *60%	→H型 H: 展平型 C: 中面型 T: 多孔質型 (青川, 1976)
1.506	1.508	1.5067	30	→T, C型 II: 不規則型	

*全測定数に対する mode 範囲内にある火山ガラスの含有を示す。



第33図 火山ガラス屈折率のヒストグラム

Histogram of refractive index of volcanic glass particles.

(2) 全鉱物組成分析 封入薄片を用い、表4-2の5項目について1薄片中の各粒子を無作為に200個まで計数し含有粒子数の量比百分率を測定した。

(3) 重鉱物分析 主要重鉱物(カンラン石(Ol)・斜方輝石(Opx)・单斜輝石(Cpx)・角閃石(Am)・黒雲母(Bi)・アバタイト(Ap)・ジルコン・イディングサイト・不透明鉄鉱物(Ogg)等)を鏡下で識別し、ポイントカウンターを用いて無作為に178個体を計数してその量比を百分率で示した。一般に重鉱物含有の少ない試料は重液処理による重鉱物の濃集を行うことが多いが、特に火山ガラスに包埋された重鉱物はみかけ比重が減少するため、重液処理過程で除外される危険性があり、さらに風化による比重変化や粒径の違いが組成分布に影響を与える懸念があるため、今回の分析では重液処理は行っていない。

(4) 火山ガラスの屈折率測定 120~250mesh(1/8~1/16mm)粒径試料を対象に、温度変化型屈折率測定装置(RIMS、檀原、1993ほか)を用い火山ガラスの屈折率を測定した。屈折率のhistogram(図33)は縦方向に屈折率を0.001きざみで表示し、横方向にその屈折率をもつ火山ガラスの個数が表現され、混入も識別できる。

*一つが1個の火山ガラス片の測定結果を示す。

文 献

阿子島功・檀原 徹 1991 「東北地方、10C頃の旗下火山灰について」『中川久夫教授退官記念論文集』1-9

檀原 徹 1993 「温度変化型屈折率測定法」(日本第四紀学会編)、『第四紀試料分析法2』「研究対象別分析法」pp.149-157

(東京大学出版会) #PAT. 1803336, 1888831

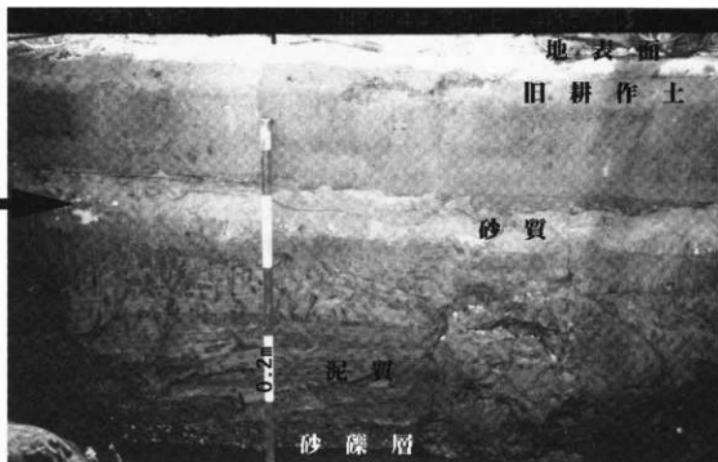


写真1 山王園遺跡P区トレーンチ北壁 →は灰白色テフラの層準

North-side wall of Trench in the Section P. Arrow indicates the horizon of grayish white tephra layer.

灰白色テフラの薄層は西側で地表下0.5~東側で0.4mにあり、下層の泥層の深いところでは灰白色テフラの深さも少し深い。凹所にのみ、きれぎれに分布している。灰白色テフラ直上の砂質層は洪水性の可能性がある。

付章 2 山王廻遺跡出土木材の樹種

鈴木 三男（東北大・理学研究科）・能城 修一（農水省森林総合研究所）

宮城県栗原郡一迫町の山王廻遺跡の縄文時代晚期の遺物包含層（I 試掘トレンチ）から出土した自然木74点と木製品（堅件）1点の樹種を調査した結果、表5に示すように17の樹種の18タイプが同定された。

以下にそれら18タイプの同定の識別点を簡略に記載し、また、代表的な標本の顕微鏡写真を写真1～18に示した。

記載

1 オニグルミ *Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura タルミ科

写真 1 a - c. (MYG-3639)

茶褐色に着色している出土材で、中型（直径約60～200 μm ）の梢円形の道管が、斜め放射方向に連なってまばらに散在する半環孔材。道管は単独、あるいは2～3個放射方向に複合し、直徑は年輪界にむけて緩やかに減少する。木部柔組織は1細胞幅の接線状で、年輪の半ば以降で著しい。道管の穿孔は單一、チローシスが多く、道管相互の壁孔は交互状で密に分布する。隨伴状の柔組織との単壁孔は交互状で、やや横ながの梢円形となり、数多い。放射組織は同性で3～5細胞幅くらい。

2 ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科

写真 2 a - c. (MYG-3619)

小型（直徑100 μm 以下）で放射方向にややのびた丸～多角形の道管がやや密に散在する散孔材。道管は単独あるいは2～3個複合し、直徑は年輪界にむけて緩やかに減少し、晚材部と早材部ではハッキリと大きさが違う。道管の穿孔は單一で、道管相互の壁孔はやや大きめで、交互状で密に分布する。木部柔組織は目立たない。放射組織は単列異性で、道管との壁孔はやや大型の多角形で鋸の歯状に密にある。

3 クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科

写真 3 a - c. (MYG-3636)

漆黒に着色した出土材で、年輪の始めには梢円形あるいは卵形の大通管（直徑約200～350 μm ）がほぼ単独で年輪にそって1～3層に並び、晚材部にかけて道管は多角形の小型（直徑約20～50 μm ）で薄壁となり、徐々に径を減じ、火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は單一で、道管内部にはチローシスが著しい。木部柔組織はいびつな接線状～短接線状。放射組織は単列同性で、道管との壁孔は不定形。

4 クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科

写真 4 a - c. (MYG-3672)

褐色に着色した出土材で、大型（直径約250–400 μm ）で丸い単独道管が年輪のはじめに1–2層配列し、晩材部では中–小型（直径約150–50 μm ）で厚壁の丸い単独道管が放射方向に配列する環孔材。道管の直径は早材から晩材にかけて急速に減少し、それ以降はあまり大きさが小さくならない。道管の穿孔は單一で、内部にはチロシスが見られる。木部柔組織は1–3列ほどどの帶状で著しい。放射組織は同性で、単列のものと、大型の複合放射組織とからなる。放射組織と道管との壁孔は柵状。

5 ニレ属 幹材 *Ulmus* ニレ科

写真 5 a – c. (MYG-3618)

やや大型で丸いや厚壁の道管が、単独あるいは2–3個複合して年輪のはじめに1–2層ならび、晩材部では小型（直径約15–60 μm ）で薄壁の角張った道管が集合して、斜めへ接線方向の帯をなす環孔材。道管の直径は早材から晩材にかけてやや急激に変化する。道管の穿孔は單一で、小道管の内部には顯著ならせん肥厚が認められる。

木部柔組織は周囲状で、晩材部では小道管の凹まりを取り囲み、しばしば大型の結晶が連なる。放射組織は同性で1–4細胞幅、細胞の接線面での径は小さい。

6 ニレ属 根材 *Ulmus* ニレ科

写真 6 a – c. (MYG-3670)

基本構造は幹材と共通だが、道管の密度が低く、早材部の大道管は小さいのに対し晩材部の小道管は太いので、散孔材的になる、等の形質からニレ属の根材と同定した。

7 ヤマグワ 根材 *Morus bombycina* Koidz. クワ科

写真 7 a – c. (MYG-3621)

中型の横円形の道管が単独あるいは2–数個複合して、年輪内に均一に分布する散孔材で、年輪界に向かって少しつづ怪が小さくなる半環孔材。年輪界はしばしば不明瞭。道管の穿孔は單一で、小道管の内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は上下端の1–3細胞ほどが直立細胞からなる異性で、1–3細胞幅くらい。

8 ヒサカキ *Eurya japonica* Thunb. ツバキ科

写真 8 a – c. (MYG-3630)

薄壁多角形の微細な道管が密度低く均一に分布する散孔材で、年輪界は目立たない。道管の穿孔は多数の横棒からなる階段状である。木部柔組織は散在状で、放射組織は1–3細胞幅の典型的な異性で、単列部の背がやや高い。単列放射組織は直立細胞のみから成る。

9 サイカチ *Gleditschia japonica* Miq. マメ科

写真 9 a – c. (MYG-3668)

やや大型で丸い道管が単独あるいは2–3個複合し、年輪のはじめに緩く集合し、その後はまばらに径を減じ

ながら散在し、晩材では外形多角形、内腔円形のやや壁の厚い小型の道管が数個～十数個複合した塊をなす環孔材。道管の穿孔は単一、小道管の内壁にはらせん肥厚がある。木部柔組織は早材で周団状、晩材で翼状から連合翼状。層階状の配列を示す。放射組織は同性で、8細胞くらい。

10 イヌエンジュ *Maackia amurensis* Rupr. et Maxim. var. *buergeri* (Maxim.) C.K.Schn. マメ科

写真 10a-c. (MYG-3648)

やや大型で丸い道管が年輪のはじめに、単独あるいは2個複合して1-3層に集合し、年輪の中間部分では中型の丸い道管が単独あるいは2-3個複合してまばらに散在し、晩材では薄壁の角張った道管が多数集合して、接線方向にのびる塊をなす環孔材。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚があり、道管内部にはしばしば濃褐色のゴム状の物質が見られる。木部柔組織は周団状。層階状の配列を示す。放射組織は同性で5細胞幅くらい。サイカチに似るが、晩材部の小道管の塊の形態が違う。

11 コクサギ *Oryxa japonica* Thunb. ミカン科

写真 11a-c. (MYG-3616)

ごく小型で薄型のやや角張った道管が多数集合し、木部柔組織とともに斜め方向に継続する不規則な帯をなす紋様孔材。道管の穿孔は単一で、内壁にはらせん肥厚がある。放射組織は同性にちかい異性で、上下端の單列部にはときに方形あるいは直立細胞をふくみ、1-2細胞幅。

12 キハダ *Phelodenron amurense* Rupr. ミカン科

写真 12a-c. (MYG-3603)

大型で丸い道管が単独あるいは2-3個複合して年輪のはじめに2-3列配列し、晩材部ではごく小型で薄壁の方形の道管が多数集合して接線方向の帯をなして配列する環孔材。早材から晩材にかけて道管の直径と配列は急激に変化する。道管の穿孔は単一で、小道管の内壁にはらせん肥厚があり、道管内部には濃褐色のゴムの物質が詰まる。放射組織は同性で1-4細胞幅くらい、背の低い紡錘形が散っている。イヌエンジュによく似るが、層階状構造とならないこと、放射組織の輪郭がきれいに調った紡錘形であることなどで区別される。

13 ミズキ *Swida controversa* (Hemsl.) Soják ミズキ科

写真 13a-c. (MYG-3652)

小型でややまるい道管が単独あるいは2-3個放射方向に複合してややまばらに均一に散在する散孔材。道管の直径は年輪の終わりでやや減少する。道管の穿孔多数の横棒からなる階段状。木部柔組織は短接線状。放射組織は異性で、直立細胞からなる単列のものと、2-4細胞幅で紡錘形の多列のものとからなる。道管と放射組織との隙孔はごく小型で交互状に密に分布する。

14 ハリギリ *Kalopanax pictus* (Thunb.) Nakai ウコギ科

写真 14a-c. (MYG-3612)

大型でまるい道管が年輪のはじめに1列にならび、その後は急に径を減じた薄壁で角張った小道管が多数集合して斜め接線方向につらなる帯をなす環孔材。道管の穿孔は單一で、道管内部にはチローシスが見られる。放射組織は上下端の1細胞が直立細胞からなる異性で、5細胞幅くらい、背のひくい効鍾形をなす。道管と放射組織との壁孔は梢円形で疎ら。ニレ属、ケヤキによく似るが小道管にらせん肥厚がないこと、道管-放射組織間壁孔が大振りであることなどで区別される。

15 ウコギ属 *Acanthopanax* ウコギ科

写真 15a-c. (MYG-3646)

小型でまるい道管が主に接線方向に多数複合して、斜め接線方向の帯をなして配列する散孔材。道管の直径は年輪界にむけて徐々に減少する。道管の穿孔は單一で、道管内部には薄壁のチローシスが著しい。木部柔組織は周囲状で、道管との壁孔は交互状の梢円形でまばら。放射組織は異性で、構成細胞は大振りで、上下端に1-2個の直立細胞をもち、高さ4mm以上となり、8細胞幅くらいで明瞭な鞘細胞をもつ。

16 ニワトコ *Sambucus racemosa* L. subsp. *sieboldiana* (Miq.) Hara スイカズラ科

写真 16a-c. (MYG-3613)

小型で薄壁の角張った道管が、年輪界にむけて徐々に径を減じながら、単独あるいは数個一組複合して、断続的に接線方向の帯をなして配列する散孔材で、晚材部で波状の紋が目立つ。道管の穿孔は單一で、内部にはしばしば薄壁のチローシスがある。放射組織は異性で5細胞幅くらい、背のひくい効鍾形で、大振りの細胞から成り、明瞭な鞘細胞をもつ。道管と放射組織との壁孔は梢円形-方形でやや密。

17 オオカメノキ *Viburnum furcatum* Blume ex Maxim. スイカズラ科

写真 17a-c. (MYG-3665)

多角形の小道管が年輪の前半でやや大きく、後半では小さくて半環孔的に見える散孔材。道管の穿孔は多数の横棒からなる階段状。木部柔組織は短接線状だが目立たない。放射組織は幅2列の典型的な異性で、単列及び單列放射組織は直立細胞のみからなり、多列部の幅は単列部よりわずかに広いだけである。

18 竹笹類 *Bambusoideae* イネ科

写真 18a-b. (MYG-3634)

向軸側に原生木部腔、その外側の左右に1対の大きな後生木部道管、外側の中央に籠部があつて、それら全体を纖維が取り囲んで1本の維管束となつものが、均一に散在し、表皮は平滑、髓は空隙(髓腔)となっている。徑の直径があまり太くないことから見て竹類ではなく笹類であるといえる。

樹種組成の特徴

同定された自然木のうち、クリが21点ともっとも多く、ついでオニグルミ(14点)、コクサギ(9点)、ニワトコとイヌエンジュ(4点)、ミズキ、オオカメノキ、ニレ属(以上3点)、クスギ節、ウコギ属、ヤナギ属、サイカ

チ（以上2点）、それにキハダ、ハリギリ、ヒサカキ、ヤマグワ（根材）、竹籠類（以上1点）である。これらのデータから縄文時代晚期の山王団遺跡周辺の森林植生を推定してみよう。

同定結果の特徴として、まず、ヒサカキ1点を除いて、残りは全て落葉広葉樹であることが挙げられる。調査された試料数は決して多くはないので明確には言えないが、針葉樹を全く欠いていることは、スギ、ヒノキ、モミと言った有用樹が付近には生育していなかったことを示す可能性がある。

高木となる樹種ではクリがもっとも多く、オニグルミ、イヌエンジュ、ミズキ、クスギ節、ニレ属、サイカチ、キハダ、ハリギリ、ヤマグワが挙げられる。特にニレ属とヤマグワは根材が出土しており、遺跡近辺での生育を示す証拠である。オニグルミが多くてミズキ、ヤマグワもあることから、水湿地近くであることが言え、クリ、クスギ節の存在から二次林的であったとも言える。

一方、低木ではコクサギが大変多く、それにニワトコの存在もかなり湿潤な林の林床にこれらが生えていたことを示しているのだろう、また、ニワトコ、ウコギ属の存在は集落あるいは人家周囲の人による搅乱が頻繁に入った「藪」のような状況が推定できる。

また、610a層と611層ではクリ、オニグルミ、イヌエンジュ、ミズキは共通するものの、オオカメノキとクスギ節、サイカチは610a層にのみあり、対的にコクサギ、ニワトコなどは611層のみにある。これらが層位による植生の違いを反映しているのかは試料が少ないので分からないが、もっとも優先する2種が共通していることから、基本的には同じ植生の反映であった可能性が言える。

以上のことと総括すると、山王団遺跡周辺にあった植生は、温帯性の水湿地性の落葉広葉樹からなる二次林で、人の手がざいぶんと入ったものであったといえる。ただ、冷温帯に多いオオカメノキと暖温帯の指標になるヒサカキの同時的存在は、更にデータを追加して、どうしてその両者が同時存在していたのかを検討する必要がある。

ただ1点調べられた木製品である堅杵はクスギ節であった。

第5表 山王団遺跡出土木材の樹種

List of woods excavated from the Sanno-gakoi site

樹種	610a層	611層	612層	総計
クリ	5	16		21
オニグルミ	5	9		14
コクサギ		9		9
ニワトコ		4		4
イヌエンジュ	1	3		4
ミズキ	2	1		3
オオカメノキ	3			3
クスギ節	2	1		3
ニレ属		2		2
ニレ属 根			1	1
ウコギ属		2		2
ヤナギ属		2		2
サイカチ	2			2
キハダ		1		1
ハリギリ		1		1
ヒサカキ		1		1
ヤマグワ 根		1		1
竹籠類		1		1
総計	20	54	1	75

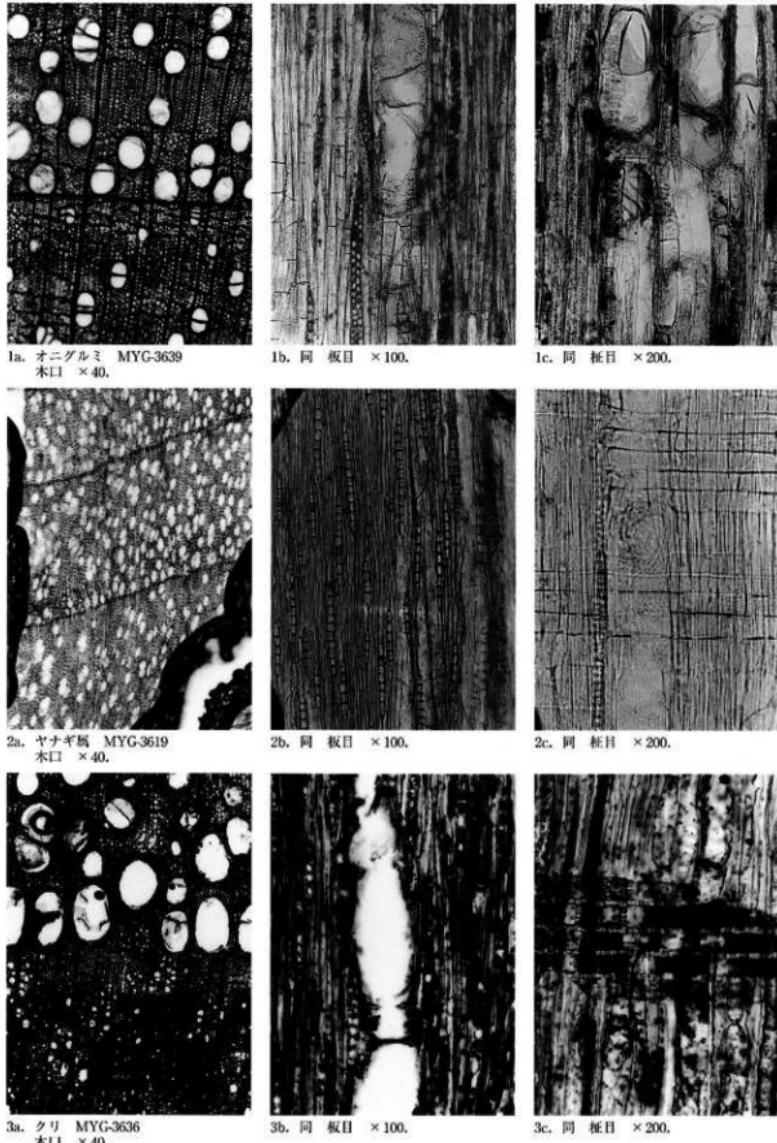
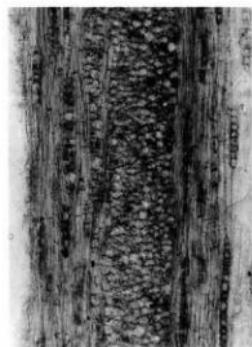


写真 2 山王岡遺跡出土木材顕微鏡写真

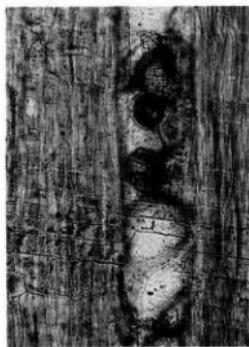
Micrographs of woods excavated from the Sanno-gakoi site



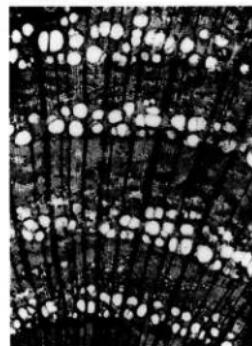
4a. クスギ節 MYG-3672
木口 $\times 40$.



4b. 同 板目 $\times 100$.



4c. 同 板目 $\times 200$.



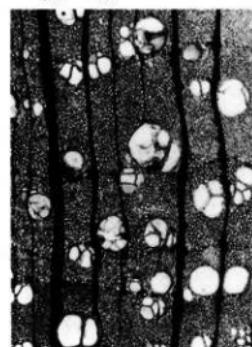
5a. ニレ属 MYG-3618
木口 $\times 40$.



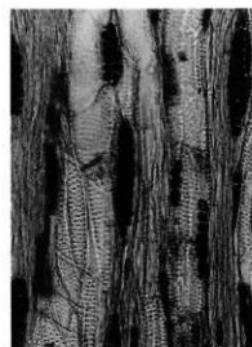
5b. 同 板目 $\times 100$.



5c. 同 板目 $\times 200$.



6a. ニレ属 根 MYG-3670
木口 $\times 40$.



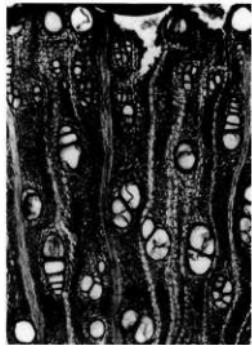
6b. 同 板目 $\times 100$.



6c. 同 板目 $\times 200$.

写真 3 山王圓遺跡出土木材顕微鏡写真

Micrographs of woods excavated from the Sanno-gakoi site



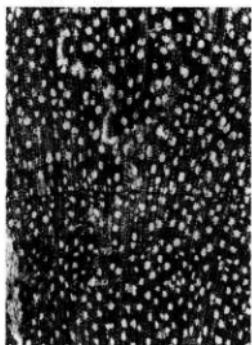
7a. ヤマグワ 根 MYG-3621
木口 $\times 40$.



7b. 同 板目 $\times 100$.



7c. 同 板目 $\times 200$.



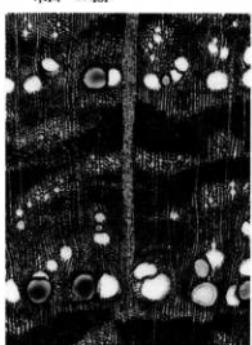
8a. ヒサカキ MYG-3630
木口 $\times 40$.



8b. 同 板目 $\times 100$.



8c. 同 板目 $\times 200$.



9a. サイカチ MYG-3668
木口 $\times 40$.



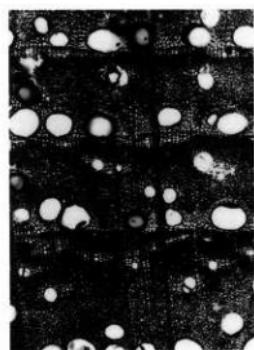
9b. 同 板目 $\times 100$.



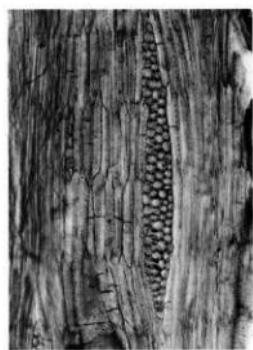
9c. 同 板目 $\times 200$.

写真 4 山王閣遺跡出土木材顕微鏡写真

Micrographs of woods excavated from the Sanno-gakoi site



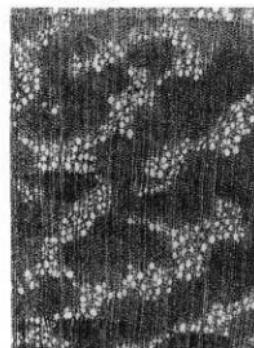
10a. イヌエンジュ MYG-3648
木口 $\times 40$.



10b. 同 板目 $\times 100$.



10c. 同 桩目 $\times 200$.



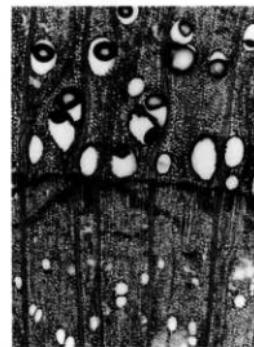
11a. コクサギ MYG-3616
木口 $\times 40$.



11b. 同 板目 $\times 100$.



11c. 同 桩目 $\times 200$.



12a. キハダ MYG-3603
木口 $\times 40$.



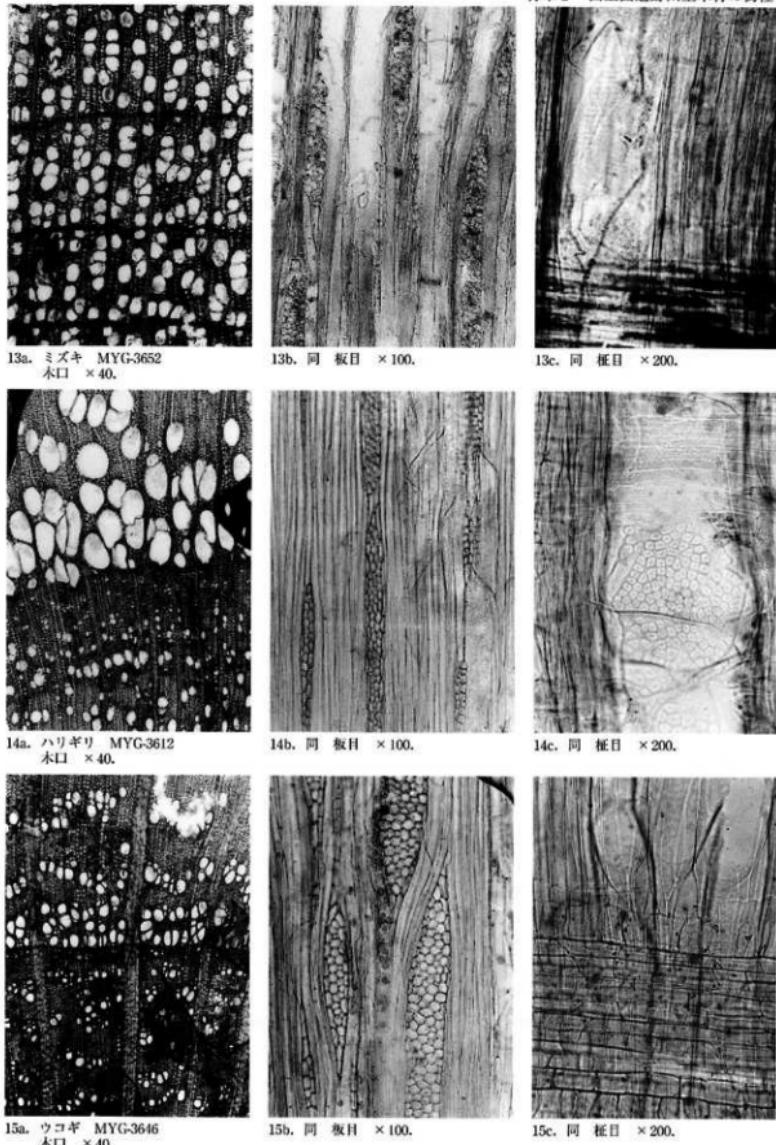
12b. 同 板目 $\times 100$.

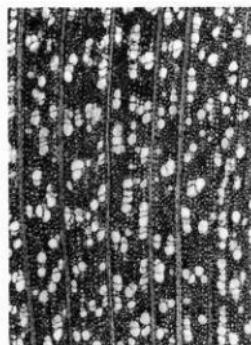


12c. 同 桩目 $\times 200$.

写真5 山王閣遺跡出土木材顕微鏡写真

Micrographs of woods excavated from the Sanno-gakoi site

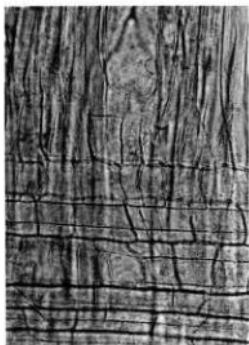




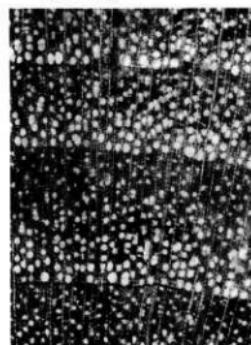
16a. ニワトコ MYG-3613
木口 $\times 40$.



16b. 同 板目 $\times 100$.



16c. 同 植目 $\times 200$.



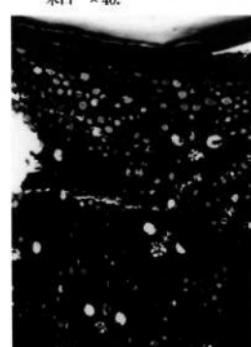
17a. オオカメノキ MYG-3665
木口 $\times 40$.



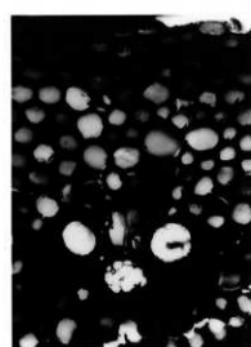
17b. 同 板目 $\times 100$.



17c. 同 植目 $\times 200$.



18a. 竹籠類 MYG-3634
木口 $\times 40$.



18b. 同 木口 $\times 100$.

写真7 山王廻遺跡出土木材顕微鏡写真

Micrographs of woods excavated from the Sanno-gakoi site

付 表

付表1 山王開述跡出土器観察表(1)

Attribute list of pottery from the Sanno - gakoi site(1)

番号	目次	品種	形状	施釉	JH分類	主な文様	織文・捺目両面の特徴	備考	期間	年代
1	P	2 号標	筒	-	II-2a 磁	-	織文(ナマ)・捺目(ナマ)	-	3d	3d-2
2	P	2号標	筒	施	波紋(波)	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ(内)ナマ	ナマ・ビガシ(内)	3d-2	3d-2
3	P	2号標	筒	施	小切口縫	織文(ナマ)	JH波紋(波)	-	3d-2	3d-2
4	P	4号標	筒	施	小切口縫	織文(ナマ)・ココシロ	JH波紋(波)	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
5	P	1号標(新木屋)	筒	施	小切口縫	織文(ナマ)	JH波紋(波)	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
6	P	2515土器標識	筒	施	1号標	織文(ナマ)	JH波紋(波)	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
7	P	新木屋	筒	施	小切口縫	織文(ナマ)	JH波紋(波)	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
8	P	新木屋(新木屋)	筒	施	小切口縫	織文(ナマ)	JH波紋(波)	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
9	P	4515土器標識	筒	施	1号標	織文(ナマ)	JH波紋(波)	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
10	P	ペルト	4	筒	施	1号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
11	P-0147	5号標	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	-	3d-2	3d-2
12	P	ペルト	8	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
13	P	企念	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
14	P	企念	筒	施	1号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
15	P	企念	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
16	P	企念	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
17	P	サブレンチ	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
18	P-RKA	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
19	P-RKA	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
20	P	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
21	P	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
22	P-0148	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
23	P	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
24	P	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
25	P	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
26	P	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
27	P	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
28	P	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
29	P	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
30	P-0149	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
31	P	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
32	P	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
33	P	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
34	P	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
35	P-0150	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
36	P-0147	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
37	P	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
38	P-0148	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
39	P	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
40	P	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
41	P	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
42	P-0149	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
43	P-RKA	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
44	P-RKA	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
45	P	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
46	P-0150	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
47	P	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
48	P	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
49	P	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
50	P	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
51	P-0151	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
52	P-RKA	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
53	P	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
54	P-0152	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
55	P	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
56	P-0153	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
57	P	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
58	P	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
59	P	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2
60	P	瓦	筒	施	2号標	織文(ナマ)	ナマ・ビガシ	ナマ・ビガシ	3d-2	3d-2

付表 1 山王糸跡出土土器觀察表(2)

Attribute list of pottery from the Sanno-gakoi site(2)

番号	出土場所	高さ	幅さ	厚さ	形	口径	内部の特徴	考古学的特徴	形状	形態	
62	QW	第1号戸内底面	底土1	幅3.5mm	丸	平口縁	1・直筒式(ナラ) 直筒式	ナラ・日本陶文(内)ナラ	丸	丸-2	
62	QW	第1号戸内底面	底土1	幅3.5mm	丸	平口	1・直筒式(ナラ) 直筒式	ナラ・日本陶文(内)ナラ	丸	丸-2	
63	QW	第1号戸内底面	底土1	直筒式	深	半円切端	T・直筒式	L字型底文・内	丸	丸-3	
64	QW	第1号戸内底面	底土1	直筒式	深	平内凹縫	T・直筒式	L字型底文(内) ロココガラ	丸	丸-2	
65	QW	第1号戸内底面	底土1	直筒式	深	平内凹縫	T・直筒式	直筒式・丸底文(内)ナラ	丸	丸-2	
66	QW	第1号戸内底面	底土1	直筒式	深	-	直筒式(内) ロココガラ	直筒式・日本陶文(内)ナラ	丸	丸-2	
67	QW	第1号戸内底面	底土1	直筒式	高	平口縁	1・直筒式(内) 直筒式	ナラ・日本陶文(内)ナラ	高角形	高-1	
68	QW	第1号戸内底面	底土1	直筒式	高	平口縁	1・直筒式(内) 直筒式	ナラ・日本陶文(内)ナラ	高角形	高-2	
69	QW	第1号戸内底面	底土1	直筒式	高	平口縁	1・直筒式(内) 直筒式	ナラ・日本陶文(内)ナラ	高角形	高-3	
70	QW	直内器	底土1	直筒式	深	小袋口縫	直筒式(内)直筒式	ナラ・日本陶文(内)ナラ	直筒式	直筒式	
71	QW	直内器	底土1-2	直筒式	深	小袋口縫	1・直筒式(内) 直筒式	ナラ・日本陶文(内)ナラ	直筒式	直筒式	
72	QW	直内器	底土1	直筒式	深	小袋口縫	1・直筒式(内) 直筒式	ナラ・日本陶文(内)ナラ	直筒式	直筒式	
73	QW	直内器	底土1	直筒式	深	小袋口縫	1・直筒式(内) 直筒式	ナラ・日本陶文(内)ナラ	直筒式	直筒式	
74	QW	直内器	底土1	直筒式	深	小袋口縫	1・直筒式(内) 直筒式	ナラ・日本陶文(内)ナラ	直筒式	直筒式	
75	QW	ST244-30	直内器	底土1	直筒式	深	小袋口縫	1・直筒式(内) 直筒式	ナラ・日本陶文(内)ナラ	直筒式	直筒式
76	QW	直内器	底土1	直筒式	深	小袋口縫	1・直筒式(内) 直筒式	ナラ・日本陶文(内)ナラ	直筒式	直筒式	
77	QW	直内器	底土1	直筒式	深	小袋口縫	1・直筒式(内) 直筒式	ナラ・日本陶文(内)ナラ	直筒式	直筒式	
78	QW	直内器	底土1-2	直筒式	深	小袋口縫	1・直筒式(内) 直筒式	ナラ・日本陶文(内)ナラ	直筒式	直筒式	
79	QW	直内器	底土1	直筒式	深	-	直筒式(内) 年代比較文	直筒式・ヨコミタメ(内) ロココガラ	直筒式	直筒式	
80	QW	直内器	底土1	直筒式	深	小袋口縫	1直筒式(内) 年代比較文	直筒式・ヨコミタメ(内) ロココガラ	直筒式	直筒式	
81	QW	直内器	底土1	直筒式	深	小袋口縫	1直筒式(内) 年代比較文	直筒式・ヨコミタメ(内) ロココガラ	直筒式	直筒式	
82	QW	直内器	底土1	直筒式	高	-	直筒式	直筒式・ヨコミタメ(内) ナラ	直筒式	直筒式	
83	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式	直筒式・ヨコミタメ(内) ナラ	直筒式	直筒式	
84	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式	直筒式・ヨコミタメ(内) ナラ	直筒式	直筒式	
85	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式	直筒式・ヨコミタメ(内) ナラ	直筒式	直筒式	
86	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式	直筒式・ヨコミタメ(内) ナラ	直筒式	直筒式	
87	QW-B12-80	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(内) 年代比較文	直筒式・ヨコミタメ(内) ロココガラ	直筒式	直筒式	
88	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式	直筒式・ヨコミタメ(内) ナラ	直筒式	直筒式	
89	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
90	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
91	QW-B12-40	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
92	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
93	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
94	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
95	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
96	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
97	QW-B12-30	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
98	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
99	QW-B12-20	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
100	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
101	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
102	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
103	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
104	QW-B12-10	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
105	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
106	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
107	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
108	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
109	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
110	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
111	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
112	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
113	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
114	QW-B12-5	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
115	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
116	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
117	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
118	QW-B12-5	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
119	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	
120	QW	直内器	底土1	直筒式	高	平口縫	1・直筒式(ナラ)	直筒式	直筒式	直筒式	

付表1 山土塁跡出土土器観察表(5)

Attribute list of pottery from the Sanno-gakoi site(5)

順番	出土品名	品種	保存状況	地層	断面	目盛り	生産地の特徴	通文・基陶質等の特徴	備考	測定値	測定値
241	R(W)	金合意	2b	赤茶系	鉢	平底鉢	丁子文(?)が今、平行花裏文、斜	波端文・ミガキ(?)とガヤ	余	20.7	24.2
242	R(W)	金合意	2d	赤茶系	盆	平底盆	丁子文(?)が今、平行花裏文、斜	波端文・ミガキ(?)とガヤ	余	20.8	24.2
243	R(W)	金合意	2b	赤茶系	高	折	直腹縫文	波端文・アゲ(?)内ガヤ	余	20.9	24.2
244	R(W)	金合意	2b	赤茶系	高	折	直腹縫文	波端文・アゲ(?)内ガヤ	余	20.10	24.2
245	R(W)	金合意	2b	赤茶系	高	折	直腹縫文	波端文・ミガキ(?)ナダ	余	20.11	24.3
246	R(W)	金合意	2b	赤茶系	高	折	直腹縫文	波端文・ミガキ(?)ナダ	余	20.12	24.3
247	R(W)	金合意	2b	赤茶系	高	折	直腹縫文	波端文・ミガキ(?)ナダ	余	20.13	24.4
248	R(W)~RVW	金合意	2b	赤茶系	高	折	直腹縫文	波端文・ミガキ(?)ナダ	余	20.14	24.4
249	R(W)	金合意	2b	赤茶系	鉢	山形底鉢	丁子文(?)が今、(口縁部に虎文)	波端文・ミガキ(?)とガヤ	余・金鏡目	20.15	24.5
250	R(W)	金合意	2b	赤茶系	盆	山形底盆	丁子文(?)が今、(口縁部に虎文)	波端文・ミガキ(?)とガヤ	余・金鏡目	20.16	24.5
251	R(W)~S2W	金合意	2b	赤茶系	高	折	直腹縫文	波端文・ミガキ(?)内ガヤ	余	20.17	24.5
252	R(W)	金合意	2b	赤茶系	高	折	直腹縫文	波端文・ミガキ(?)内ガヤ	余	20.18	24.5
253	R(W)	金合意	2b	赤茶系	高	折	直腹縫文	波端文・ミガキ(?)内ガヤ	余	20.19	24.5
254	R(W)	金合意	2b	赤茶系	高	折	直腹縫文	波端文・ミガキ(?)内ガヤ	余	20.20	24.5
255	R(W)	金合意	2b	赤茶系	鉢	小平底	直腹縫文	波端文・ミガキ(?)内ガヤ	余	20.21	24.6
256	R(W)	金合意	2b	赤茶系	盆	山形底盆	直腹縫文	波端文・ミガキ(?)内ガヤ	余	20.22	24.6
257	R(W)	金合意	2b	赤茶系	盆	小平底	直腹縫文	波端文・ミガキ(?)内ガヤ	余	20.23	24.6
258	R(W)	波紋文	2b	赤茶系	高	折	平行波文	波紋文・重ね波文	余	20.24	24.6
259	R(W)	波紋文	2b	赤茶系	高	折	平行波文	波紋文・重ね波文	余	20.25	24.6
260	R(W)	波紋文	2b	赤茶系	高	折	平行波文	波紋文・重ね波文	余	20.26	24.6
261	R(W)	波紋文	2b	赤茶系	鉢	小平底	平行波文	波紋文・重ね波文	余	20.27	24.6
262	R(W)	波紋文	2b	赤茶系	高	折	平行波文	波紋文・重ね波文	余	20.28	24.6
263	R(W)~RWG	波紋文	2b	赤茶系	盆	山形底盆	平行波文	波紋文・重ね波文	余	20.29	24.6
264	R(W)~RVW	波紋文	2b	赤茶系	盆	小平底	平行波文	波紋文・重ね波文	余	20.30	24.6
265	R(W)	波紋文	2b	赤茶系	盆	山形底盆	平行波文	波紋文・重ね波文	余	20.31	24.6
266	R(W)	波紋文	2b	赤茶系	盆	小平底	平行波文	波紋文・重ね波文	余	20.32	24.6
267	R(W)	波紋文	2b	赤茶系	盆	小平底	平行波文	波紋文・重ね波文	余	20.33	24.6
268	R(W)	波紋文	2b	赤茶系	盆	小平底	平行波文	波紋文・重ね波文	余	20.34	24.6
269	R(W)	波紋文	2b	赤茶系	盆	小平底	平行波文	波紋文・重ね波文	余	20.35	24.6
270	R(W)	波紋文	2b	赤茶系	盆	小平底	平行波文	波紋文・重ね波文	余	20.36	24.6
271	R(W)	波紋文	2b	赤茶系	盆	小平底	平行波文	波紋文・重ね波文	余	20.37	24.6
272	R(W)	波紋文	2b	赤茶系	盆	小平底	平行波文	波紋文・重ね波文	余	20.38	24.6
273	P	乳頭文	10	褐色系	盆	小平底	丁字乳頭文	波端文・大乳頭文	余・金鏡目	20.39	25.1
274	P	乳頭文	10	褐色系	盆	小平底	丁字乳頭文	波端文・大乳頭文	余・金鏡目	20.40	25.1
275	P	乳頭文	10	褐色系	盆	小平底	丁字乳頭文	波端文・大乳頭文	余・金鏡目	20.41	25.1
276	P	乳頭文	11	褐色系	盆	小平底	丁字乳頭文	波端文・大乳頭文	余・金鏡目	20.42	25.1
277	QW	14号墓	11	褐色系	盆	小平底	丁字乳頭文	波端文・大乳頭文	余・金鏡目	20.43	25.1
278	QW	第1号二次焼成	11	褐色系	盆	小平底	丁字乳頭文	波端文・大乳頭文	余・金鏡目	20.44	25.1
279	QW	第1号二次焼成	11	褐色系	盆	小平底	丁字乳頭文	波端文・大乳頭文	余・金鏡目	20.45	25.1
280	QW	金合意	11	褐色系	盆	平底	直腹縫文	波端文・直腹縫文・V字底	余・金鏡目	20.46	25.1
281	QW	金合意	11	褐色系	盆	平底	直腹縫文	波端文・直腹縫文・V字底	余・金鏡目	20.47	25.1
282	QW	金合意	11	褐色系	盆	平底	直腹縫文	波端文・直腹縫文・V字底	余・金鏡目	20.48	25.1
283	QW	金合意	11	褐色系	盆	折	直腹縫文	波端文・直腹縫文	余	20.49	25.1
284	QW	金合意	12	褐色系	盆	折	直腹縫文	波端文・直腹縫文	余	20.50	25.1
285	QW	金合意	12	褐色系	盆	折	直腹縫文	波端文・直腹縫文	余	20.51	25.1
286	QW	金合意	15	褐色系	盆	折	直腹縫文	波端文・直腹縫文	余	20.52	25.1
287	QW	金合意	16	褐色系	盆	折	直腹縫文	波端文・直腹縫文	余	20.53	25.1
288	QW	金合意	16	褐色系	盆	折	直腹縫文	波端文・直腹縫文	余	20.54	25.1
289	QW	金合意	22	褐色系	盆	折	直腹縫文	波端文・直腹縫文	余	20.55	25.1
290	QW	金合意	22	褐色系	盆	折	直腹縫文	波端文・直腹縫文	余	20.56	25.1
291	QW	金合意	22	褐色系	盆	折	直腹縫文	波端文・直腹縫文	余	20.57	25.1
292	QW	金合意	24	褐色系	盆	折	直腹縫文	波端文・直腹縫文	余	20.58	25.1
293	QW	金合意	25	褐色系	盆	折	直腹縫文	波端文・直腹縫文	余	20.59	25.1
294	QW	金合意	24	褐色系	盆	折	直腹縫文	波端文・直腹縫文	余	20.60	25.1
295	QW	金合意	24	褐色系	盆	折	直腹縫文	波端文・直腹縫文	余	20.61	25.1
296	QW	金合意	24	褐色系	盆	折	直腹縫文	波端文・直腹縫文	余	20.62	25.1
297	QW	金合意	24	褐色系	盆	折	直腹縫文	波端文・直腹縫文	余	20.63	25.1
298	QW	金合意	24	褐色系	盆	折	直腹縫文	波端文・直腹縫文	余	20.64	25.1

付表2 山王園遺跡出土土製品観察表

Attribute list of clay objects from the Sanno-gakoi site

No.	出土地点	層位	時期	種別	計測値(cm)	重量(g)	付着物	備考	図版No.	写真No.
1	KW-BZ68	2b	縄周V期	土偶	高さ 63.6 幅 55.3 厚さ 5.47	86.75	無	中空 腹部は削落欠損 頂部に径5mmの孔と穿孔孔あり	9-1	25-1
2	KW-BZ68	2b	縄周～弥生II	壺形土製品	高さ 35.5 幅 55.6 厚さ 5.45	40.16	無	中央に2個の径2mmの焼成前穿孔あり 縁辺の約3分の1を欠損	9-3	25-2

付表3 山王園遺跡出土石器・石製品観察表(1)

Attribute list of stone implement from the Sanno-gakoi site (1)

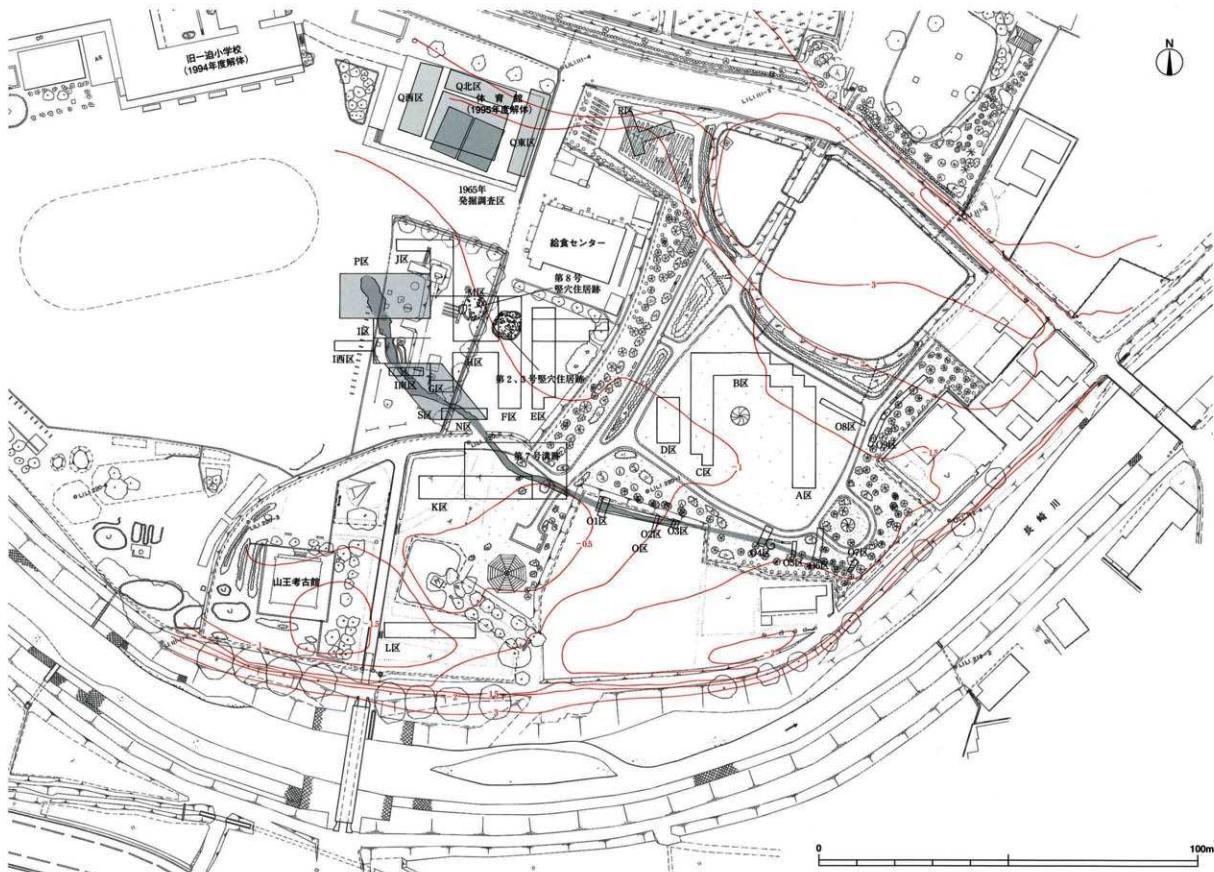
製作 No.	器種	出土地点	造作	層位	石材	底大長 (mm)	底大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	備考	図版No.	写真No.
1	石錐	Q西	-	22	碧玉	27.4	11.3	5.2	126	破損	10-1	26-10
2	石錐	R(W-S)	-	-	ガラス質ダイサイト	26.2	13.2	5.2	126	破損	10-2	26-9
3	石錐	R(W)	-	-	淡青岩	24.2	10.6	6.4	69.0	破損	10-3	26-8
4	石錐	Q西	-	16	鈍石斧	21.5	16.1	8.6	244	-	10-4	26-13
5	石錐	R(W)-B Y 68	ピット397	堆土1	鈍石斧	20.7	8.3	3.5	0.44	受熱	10-5	26-4
6	石錐	R(W-S)	-	-	鈍石斧	19.5	8.5	4.0	0.54	-	10-6	26-3
7	石錐	Q西	-	16	黒曜石	17.2	11.2	6.3	0.70	破損	10-7	26-6
8	石錐	R(W)-C A 68	15	-	鈍石斧	18.4	12.8	5.0	0.83	-	10-8	26-5
9	石錐	P	-	10	木槌	15.4	9.4	3.6	0.37	確認、付着物有り	10-9	26-2
10	石錐	R(W)-C A 68	2b	-	天鐵	18.1	11.4	5.5	0.75	破損	10-10	26-1
11	石錐	Q西	-	20	鈍石斧	22.1	12.3	6.5	1.38	破損、付着物有り	10-11	26-7
12	石錐	R	-	2	珪質頁岩	23.7	9.6	4.2	0.99	破損	10-12	26-11
13	石錐	Q西	-	11	鈍石斧	20.3	12.8	3.6	1.08	-	10-13	26-12
14	石錐	R(W)	-	2b	鈍石斧	27.3	18.2	8.1	4.96	破損	10-14	26-17
15	石錐	R(W-S)	-	2b	鈍石斧	17.3	12.5	5.8	1.11	破損	10-15	26-14
16	石錐	Q内 X 0 Y 2a	-	17	鈍石斧	21.9	13.8	5.7	1.91	-	10-16	26-15
17	石錐	R(W)-C A 68	4	-	珪質頁岩	23.6	14.9	4.4	0.91	-	10-17	26-16
18	石錐	R(W)-B X 68	ピット400	堆土1	鈍石斧	31.9	9.7	5.1	1.42	破損	10-18	26-19
19	石錐	P	第4分配石遺構	12	碧玉	25.7	11.0	8.8	2.26	破損	10-19	26-21
20	石錐	Q内	-	11	碧玉	36.4	8.6	6.8	1.97	破損	10-20	26-30
21	石錐	Q西	第1号堅穴状遺構	堆土1	鹿角石	20.6	8.8	3.9	0.71	破損	10-21	26-23
22	石錐	R(W-S)	ピット1	4堆土面	木槌	27.4	7.0	3.9	0.76	-	10-22	26-18
23	石錐	R(W)	-	堆土1	貝壳	43.3	56.5	11.6	21.16	-	10-23	26-25
24	石錐	R(W)	-	-	珪質頁岩	26.3	35.2	6.8	5.42	破損	10-24	26-22
25	石錐	Q西	-	20	-	31.9	11.5	7.2	2.30	破損	10-25	26-24
26	橢形石器	Q西	第1号堅穴状遺構	堆土1	鈍石斧	25.0	32.4	11.5	9.27	-	11-1	27-1
27	不定形石器	P	第4号配石遺構	10	鈍石斧	34.5	33.4	15.4	16.13	-	11-2	27-4
28	不定形石器	P	-	10	貝壳	52.0	59.9	11.7	37.19	破損	11-3	27-6
29	不定形石器	P	B K 44	河川跡	鈍石斧	21.4	19.0	6.8	3.10	-	11-4	27-2
30	不定形石器	P	-	-	塊状灰岩	41.6	69.5	11.6	26.81	破損	11-5	27-3
31	不定形石器	P	-	-	貝殻	37.8	40.4	18.8	29.68	破損	11-6	27-5
32	磨製石斧	P	-	-	砂質頁岩	69.2	43.1	28.2	131.68	破損	11-7	27-7
33	石電打	P	-	3a	珪質頁岩	56.4	39.8	6.7	20.33	破損	11-8	26-27
34	石製小玉	R	-	-	含粘土 (塊状)	10.4	8.9	7.0	0.98	-	11-9	26-26
35	磨製石斧	P	-	10	テルサイト	85.3	47.8	32.0	217.35	破損	12-1	27-8
36	磨製石斧	P	-	12	安山岩	99.5	39.0	32.3	178.23	-	12-2	27-10
37	磨石	P	第5号配石遺構	-	花崗岩	89.2	94.1	48.6	569.40	破損	12-4	29-5
38	磨製石斧	R(W)-B Z 68	2b	-	テルサイト質灰岩	106.9	57.1	36.7	311.20	-	12-3	27-9
39	円石	-	-	-	安山岩	80.1	66.6	37.8	296.00	-	12-5	29-1
40	圓石	Q西	-	20	安山岩	105.9	96.6	33.3	1324.70	-	12-6	29-10
41	圓石	P-B J 45	-	6	安山岩	119.5	92.7	48.3	831.30	-	13-1	29-5
42	圓石	P	-	10	砂岩	80.5	65.8	53.0	416.00	-	13-2	29-7
43	圓石	P	-	10	-	106.8	85.9	31.6	455.20	-	13-3	29-3
44	圓石	P東	第10号上部堆土土壤	-	花崗岩	106.5	99.1	34.0	322.30	-	13-4	29-6
45	圓石	R(W-N)	-	2b	安山岩	88.9	81.5	38.7	426.20	-	13-5	29-2
46	圓石	P	-	10	花崗岩	97.9	86.5	67.1	688.10	-	13-6	29-4
47	圓石	P	第3号配石遺構	12	安山岩	132.0	131.6	37.3	1135.90	破損	13-7	29-8
48	円錐状石器	P(R)	-	2b	テルサイト質灰岩	63.0	62.0	22.2	118.00	-	14-1	28-8
49	円錐状石器	R(W)	ピット	堆土1	安山岩	69.5	64.3	21.9	184.49	-	14-2	28-11

付表3 山工園遺跡出土石器・石製品観察表(2)

Attribute list of stone implement from the Sanno-gakoi site (2)

機体 No.	器種	出土位置	遺構	部位	石材	発見長 (mm)	発見幅 (mm)	発見厚 (mm)	重量 (g)	備考	因版No.	写真No.
50	円盤状石器	R(W-N)		2b	デイサイト質凝灰岩	64.8	60.4	26.6	146.19		14-3	28-9
51	円盤状石器	R-B-X68	ピット401	層土	デイサイト質凝灰岩	61.5	60.3	20.0	104.00		14-4	28-10
52	石核			10	デイサイト質凝灰岩	33.0	31.1	29.4	36.80		14-5	28-4
53	石核			10	鈍石英	35.4	39.1	23.0	33.30		14-6	28-5
54	石核	P		10	デイサイト質凝灰岩	58.5	38.1	19.8	612.10		14-7	28-3
55	石核	P		10	頁岩	116.4	152.7	48.0	873.50		15-1	27-11
56	石核	P		10	頁岩	83.7	81.0	49.4	402.10		15-2	28-7
57	石核	P		10	頁岩	73.4	73.3	46.5	294.29		15-3	28-6
58	石核	Q西		18	デイサイト質凝灰岩	83.0	98.7	65.9	501.00	SP5	15-4	28-1
59	石核	P		10	デイサイト質凝灰岩	111.9	76.3	56.6	490.90	N24	16-1	28-2
60	剥片	P		10	頁岩	33.3	41.0	9.3	10.17		16-2	30-1
61	剥片	P	第2号 sond上邊縁	10	頁岩	48.3	38.4	6.5	13.63	受熱	16-3	30-2
62	剥片	P		10	頁岩	41.4	45.9	11.2	20.91		16-5	...
63	剥片	P		10	頁岩	25.7	47.1	6.6	6.98		16-4	30-3
64	剥片	P		10	頁岩	58.7	45.2	12.2		破損	17-1, 2	30-4, 5
65	剥片	P		10	頁岩	75.0	52.5	14.5		破損	17-1, 3	30-4, 6
66	剥片	P	第2号 sond上邊縁	10	頁岩	53.2	72.5	5.2		受熱	17-1, 4	30-4, 7
67	石盤	R(W)		2b		18.2	12.6	3.2	0.63	破損		
68	石盤	R(W)		2b		15.9	10.5	4.5	0.63	破損		
69	石盤	R(E)		2b		12.5	8.9	3.8	0.39	破損		
70	不定形石器	R(W)-B-X68	ピット400	堆上	碧玉	25.4	15.9	9.0	3.15			
71	磨石	Q西		11-12	デイサイト	94.0	65.4	37.2	334.70			
72	凹石	P		10	デイサイト	117.0	62.2	42.3	462.80			
73	凹石	Q西		15	デイサイト	78.5	88.4	41.9	367.70	破損		
74	凹石	Q		10	デイサイト	93.7	56.0	45.8	456.90	破損		
75	凹石	Q西		11	安山岩	70.4	73.4	40.6	294.30	破損		
76	凹石	Q西		12	安山岩	120.4	72.8	40.0	531.00			
77	凹石	Q西		13	デイサイト	100.9	82.9	39.9	468.30			
78	凹石	P		10	デイサイト	93.9	81.2	49.6	315.60			
79	凹石	Q西-X-0 Y2b		16	安山岩	59.5	64.5	39.0	193.50	破損		
80	凹石	Q西		25	礫状岩	93.1	81.4	28.2	218.00			
81	凹石	P		10	デイサイト	93.8	82.5	41.6	387.60			
82	凹石					106.7	93.0	43.6	609.00			
83	凹石	Q		20	安山岩	75.5	70.3	39.0	303.60	破損		
84	剥片	P		10	礫状岩	40.6	27.6	8.4	8.79			
85	剥片	P		10	ガラス質デイサイト	41.6	50.4	6.2	13.57			
86	剥片	P		10	頁岩	44.1	46.0	22.2	50.62			
87	剥片	P		10	堆化凝灰岩	36.7	53.4	7.9	13.17			
88	剥片	P		10	鈍石英	41.6	31.6	17.5	19.83			
89	剥片	P		10	珪質繊維岩	50.5	38.5	7.3	15.19			
90	剥片	P		10	鈍石英	44.5	48.9	11.0	15.73			
91	剥片	P	第1号 sond上邊縁	10	鈍石英	28.2	68.5	10.4	15.20	受熱		
92	剥片	P		10	碧玉	31.9	43.2	6.2	7.86			

図 版

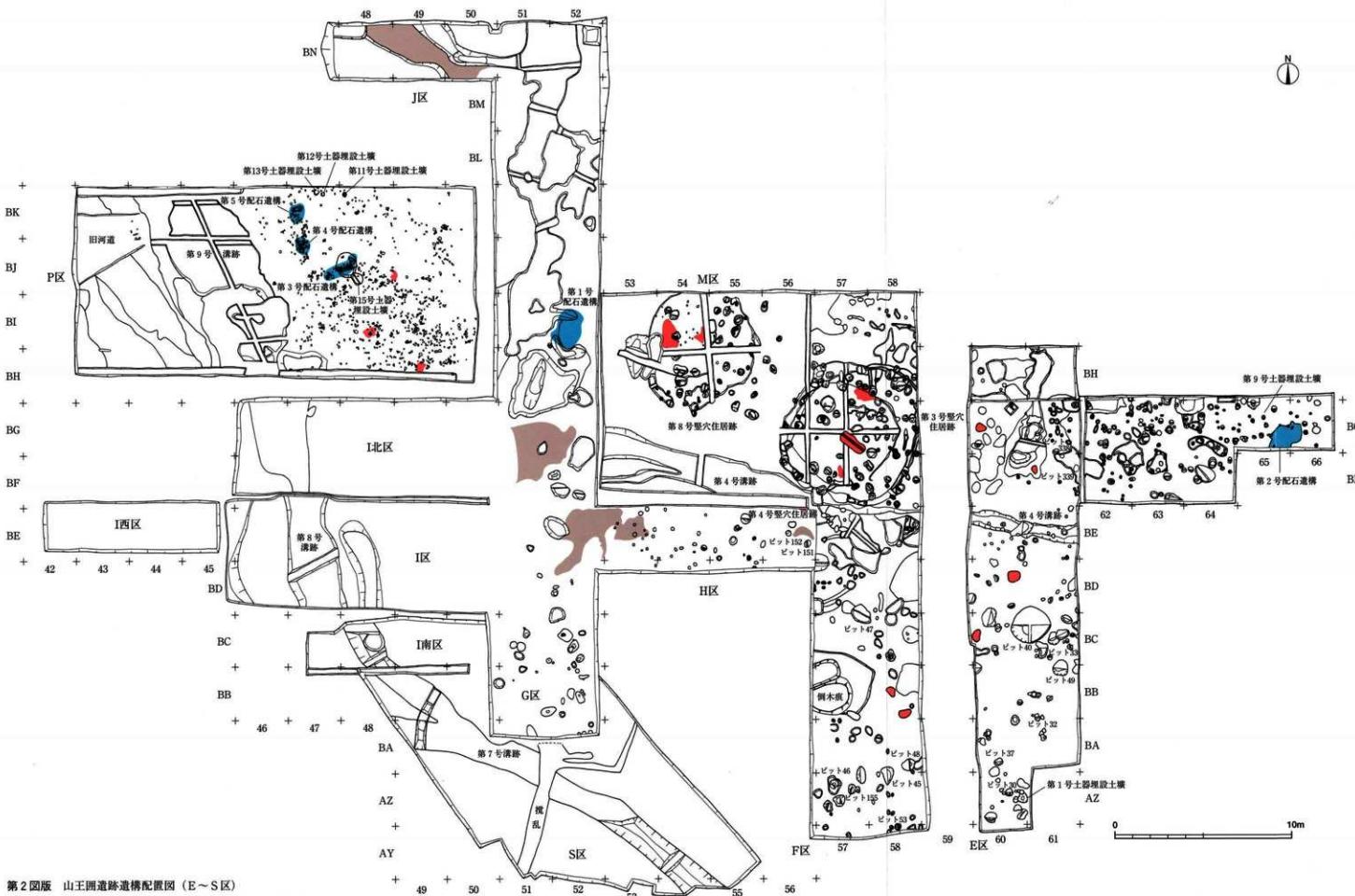


第1図版 山王園遺跡発掘区配置図

Location of excavated grids in the Sanno-gakoi site

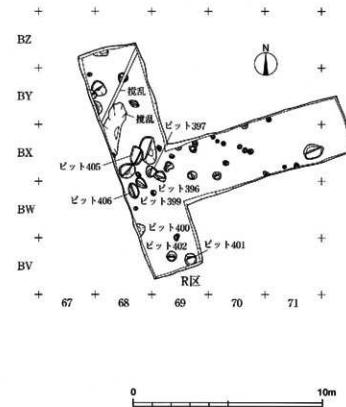
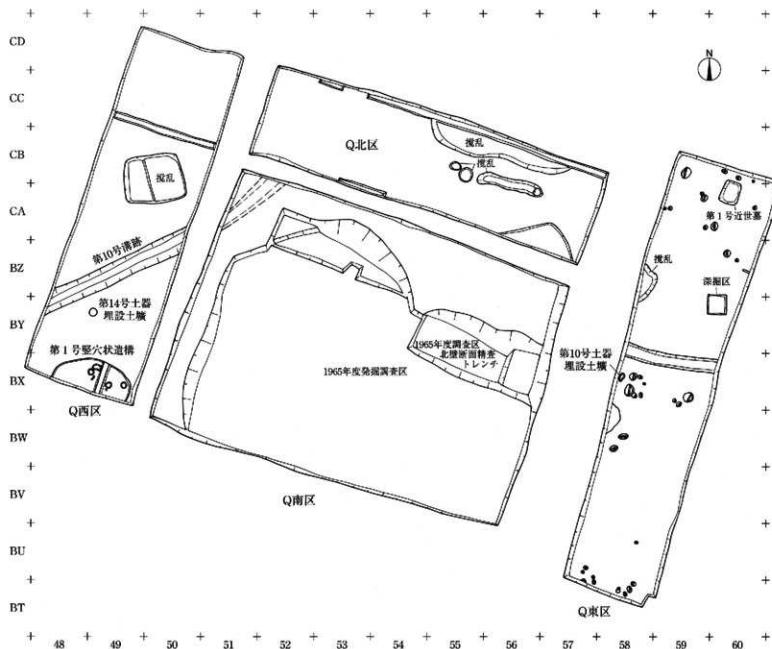
発掘区は第3次調査区

等高線は1962年明治大学考古学研究室作成の測量図による

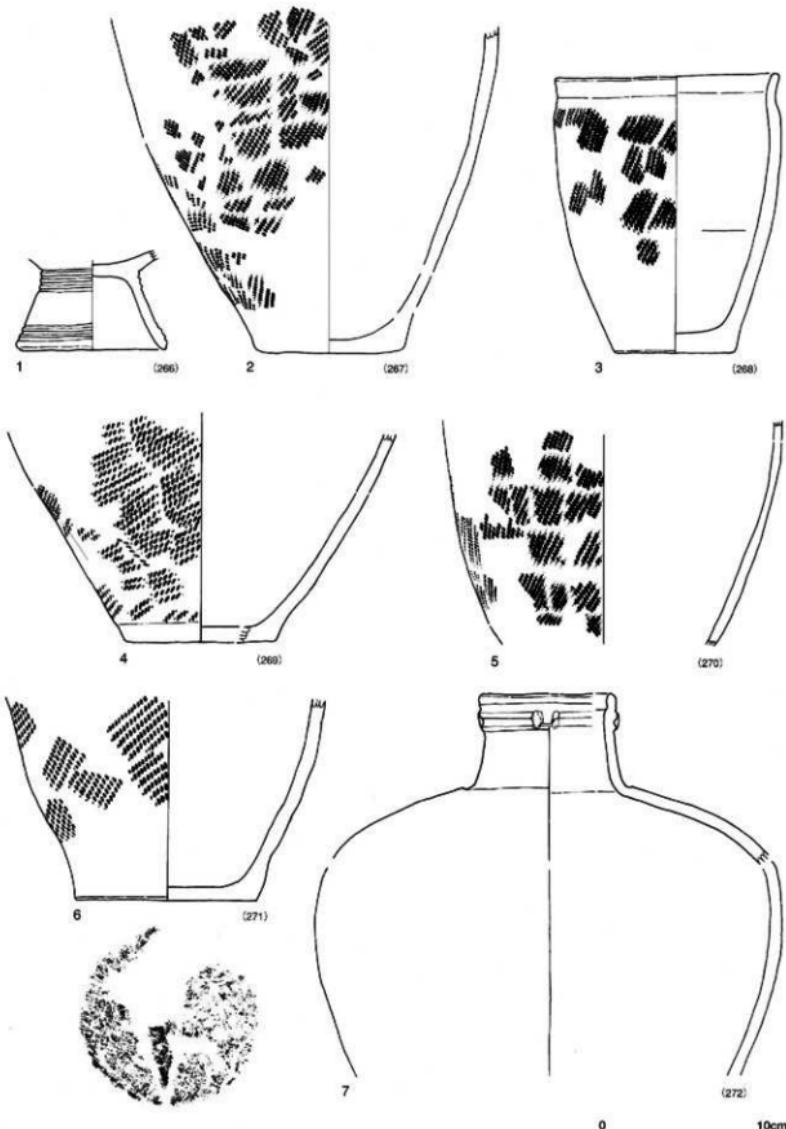


第2図版 山王園遺跡遺構配置図 (E～S区)

Plans of archaeological features in the Sanno-gakoi site



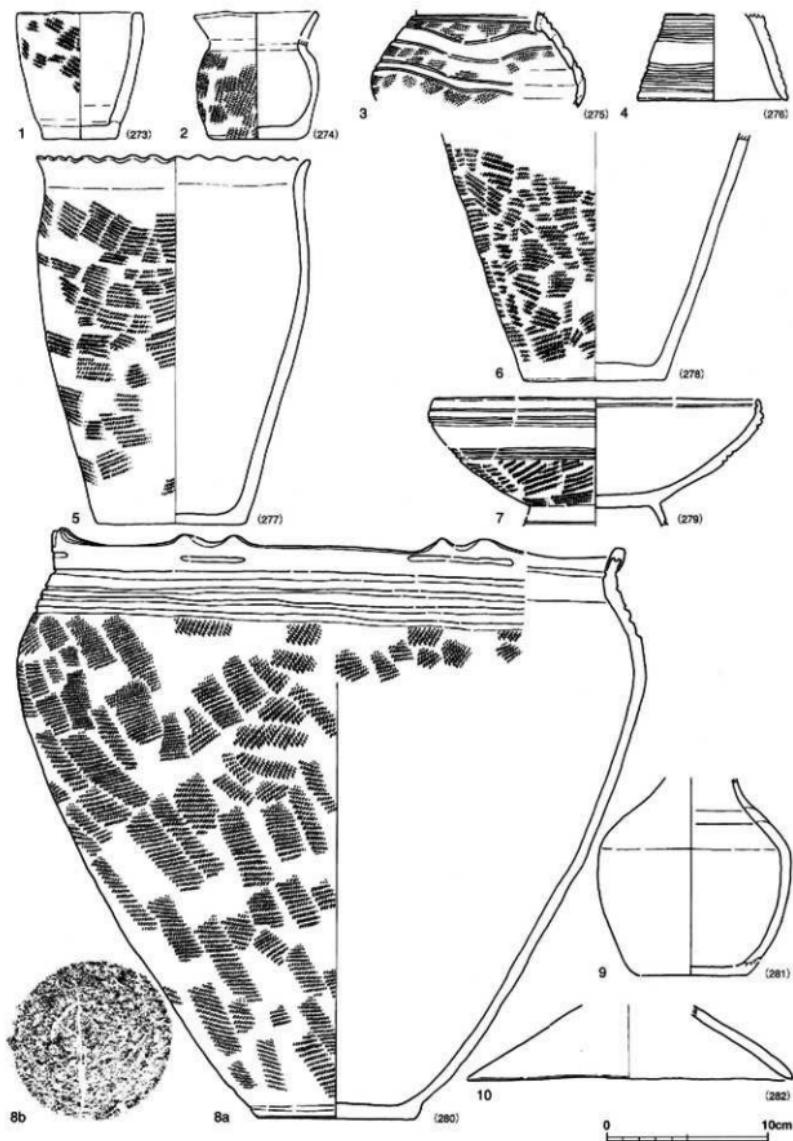
第3図版 山王園遺跡遺構配置図（Q・R区）
Plans of archaeological features in the Sanno-gakoi site (Q, R Grid)



第4図版 山王西遺跡出土土器実測図
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1 P区第4号配石遺構 2・3 第5分配石遺構
4 第11号土器埋設土塗 5 第12号土器埋設土塗
6 第13号土器埋設土塗 7 第15号土器埋設土塗

0 10cm

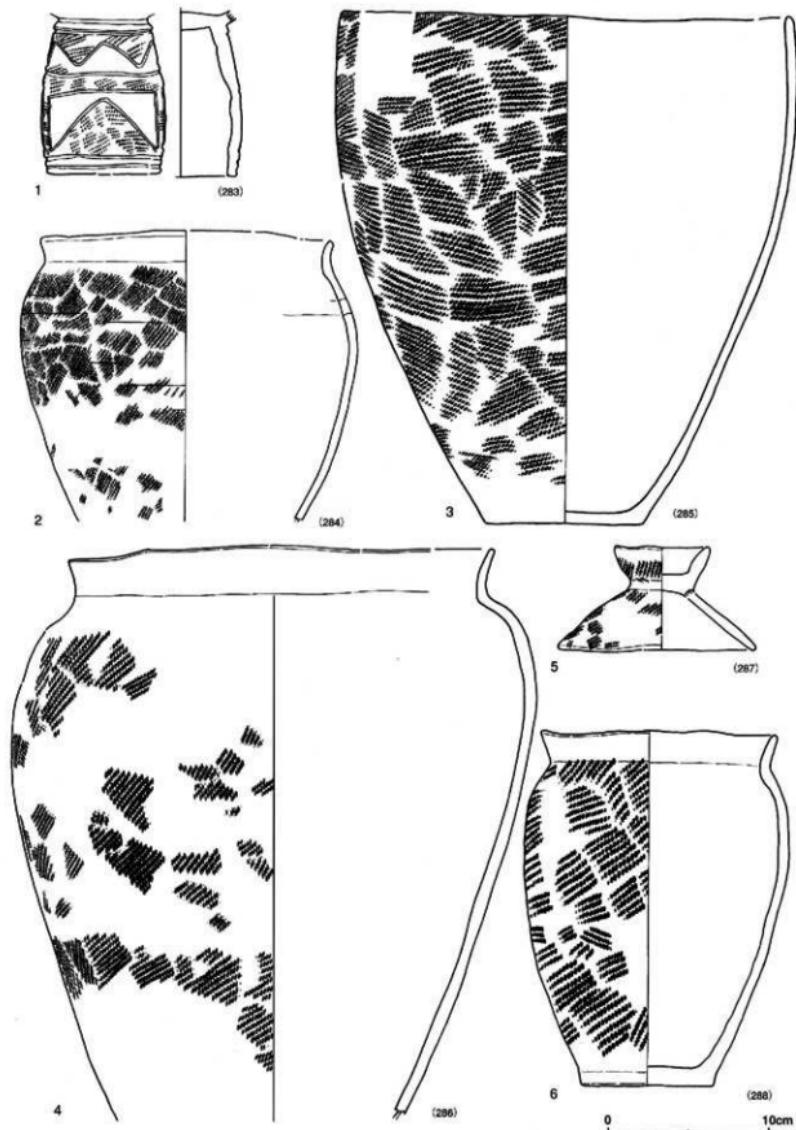


第5図版 山王園遺跡出土土器実測図

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

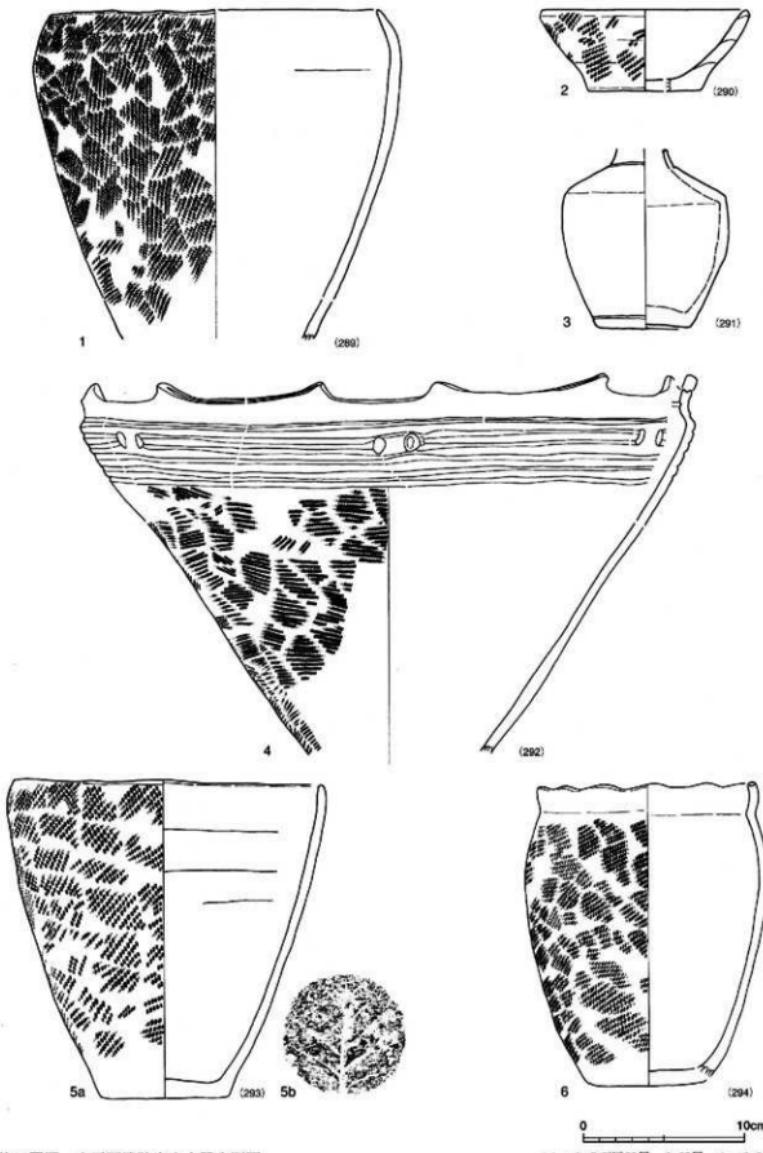
1~3 P区10層 4 11層 5 Q西区第14号土器埋設
土壤 6~7 第1号整穴状造構 8~10 Q西区11層

0 10cm



第6図版 山王圓遺跡出土土器実測図
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1 Q西区11層 2 13層 3 12層
4 15層 5 16層 6 22層

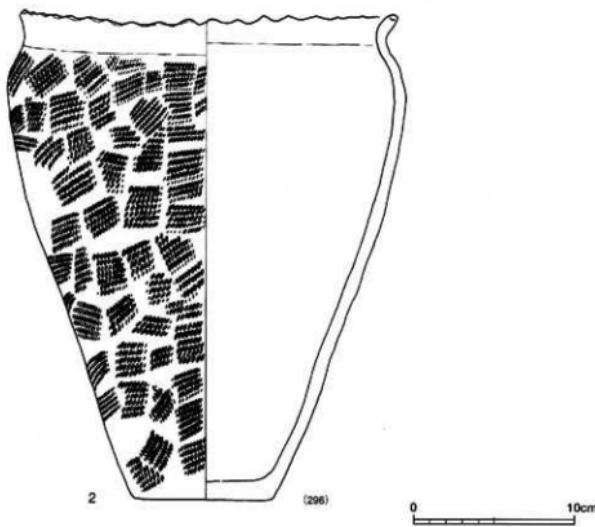
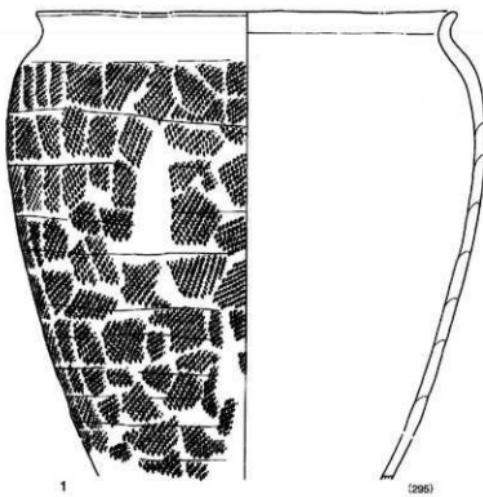


第7図版 山王町遺跡出土土器実測図

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1・2 Q西区22層 3 25層 4～6 24層

0 10cm



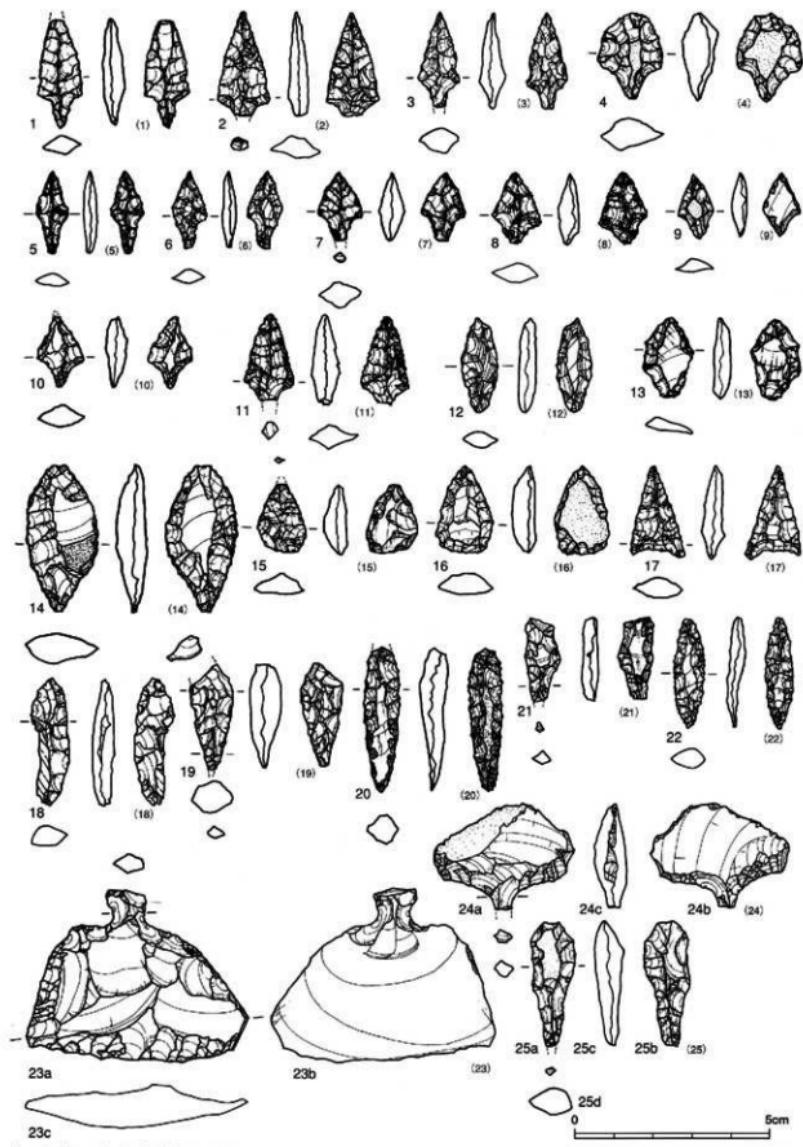
第8図版 山王園遺跡出土土器実測図
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



第9図版 山王廻遺跡出土上器・土製品実測図
Jomon and Yayoi pottery, clay figurine and baked clay object
from the Sanno-gakoi site

1 Q西区24層 2 Q北区9層 3 R区壺形土製品
4 土偶

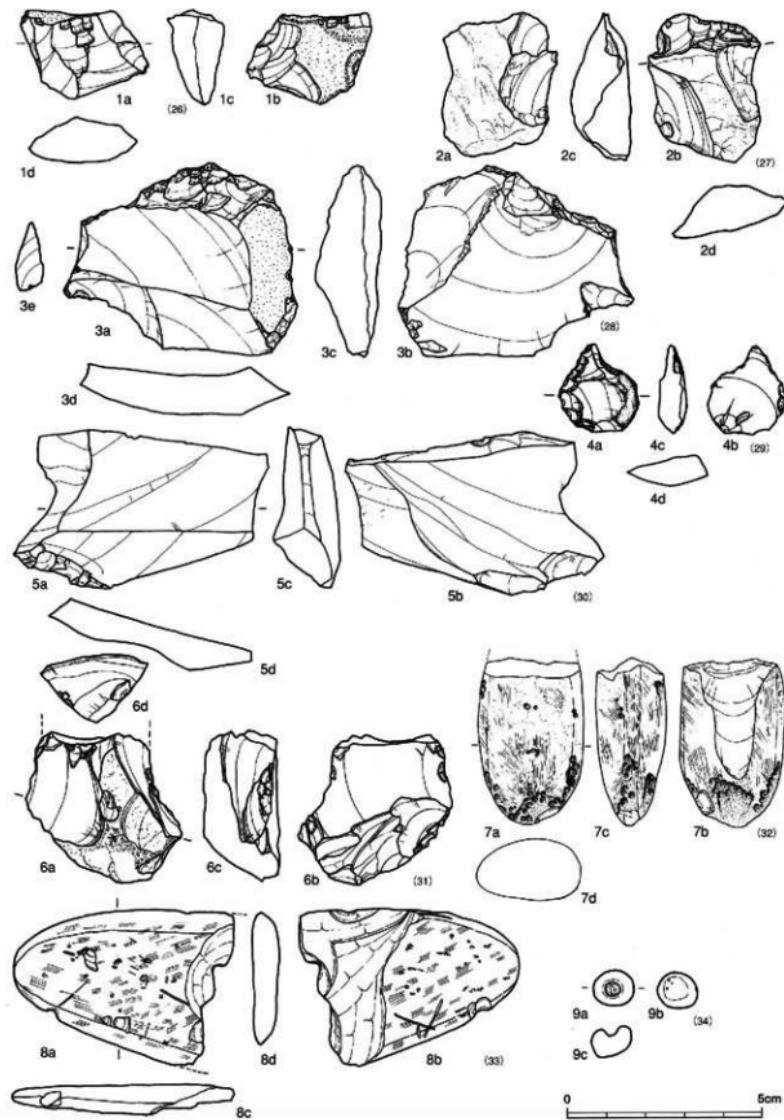
0 10cm



第10図版 山王園遺跡出土石器
Stone implements from the Sanno-gakoi site

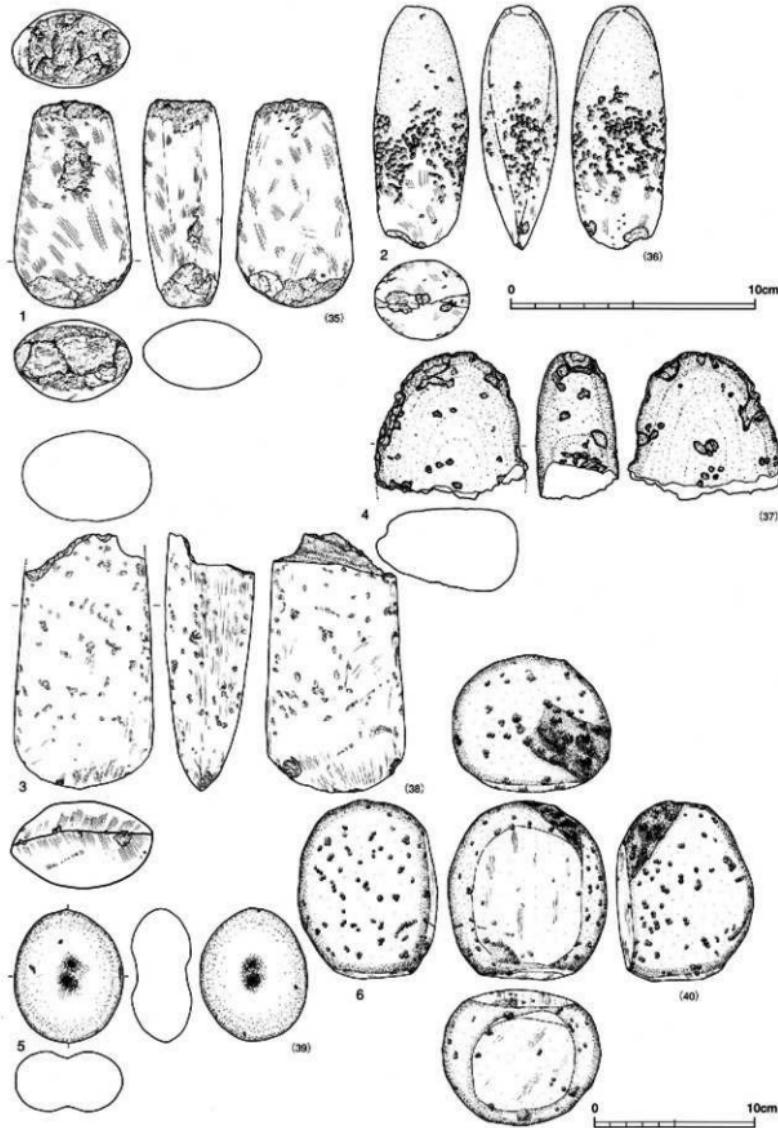
1~17 石刀 18~22・24・25 石劍
23 石斧 23c

5cm



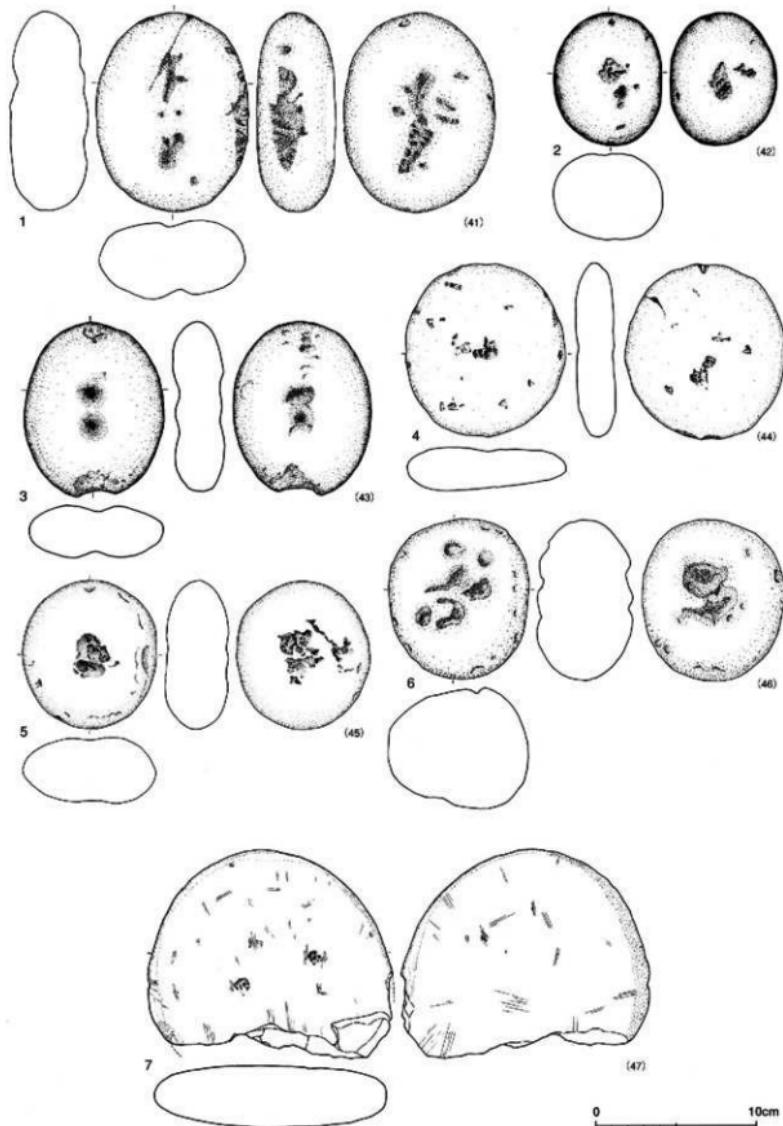
第11図版 山王洞遺跡出土石器
Stone implements from the Sanno-gakoi site

1 橢形石器 2~6 不定形石器
7 磨製石斧 8 石芯丁 9 石製小玉



第12図版 山王園遺跡出土石器
Stone implements from the Sanno-gakoi site

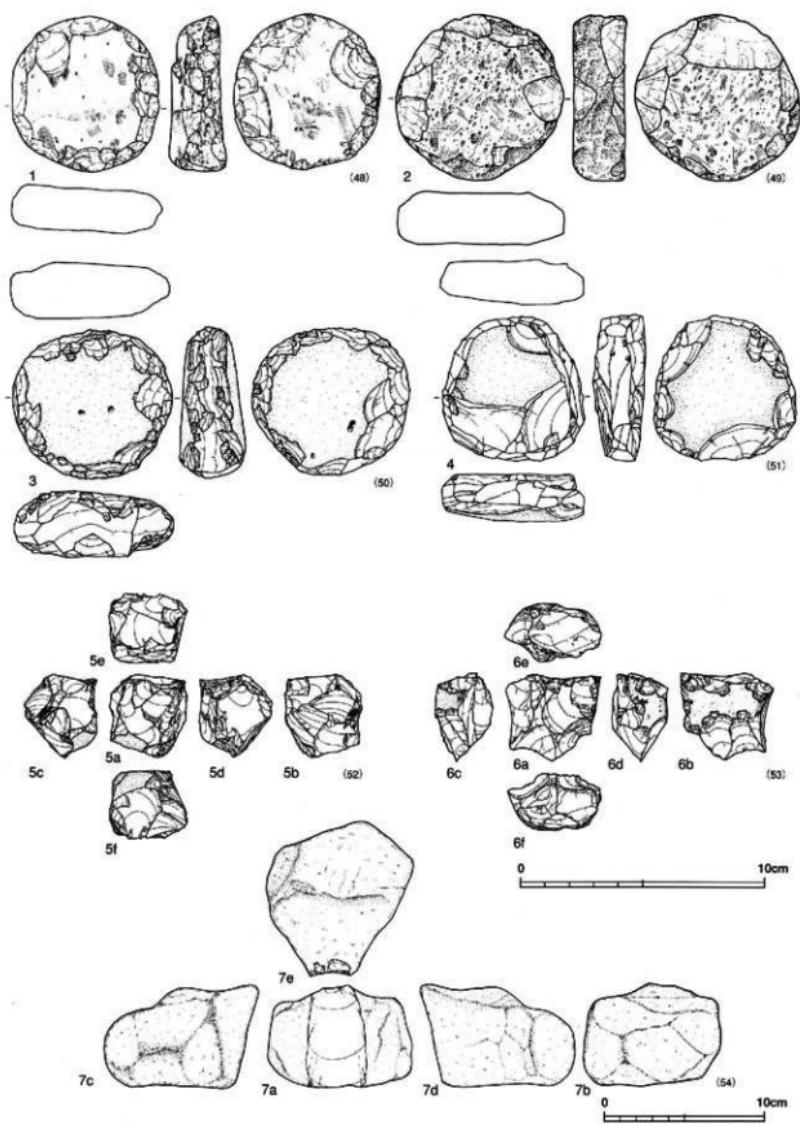
1 ~ 3 斧形石器 4 ~ 6 磨石
5 凹石



第13図版 山王閣遺跡出土石器
Stone implements from the Sanno-gakoi site

1～6 両面 7 石瓶

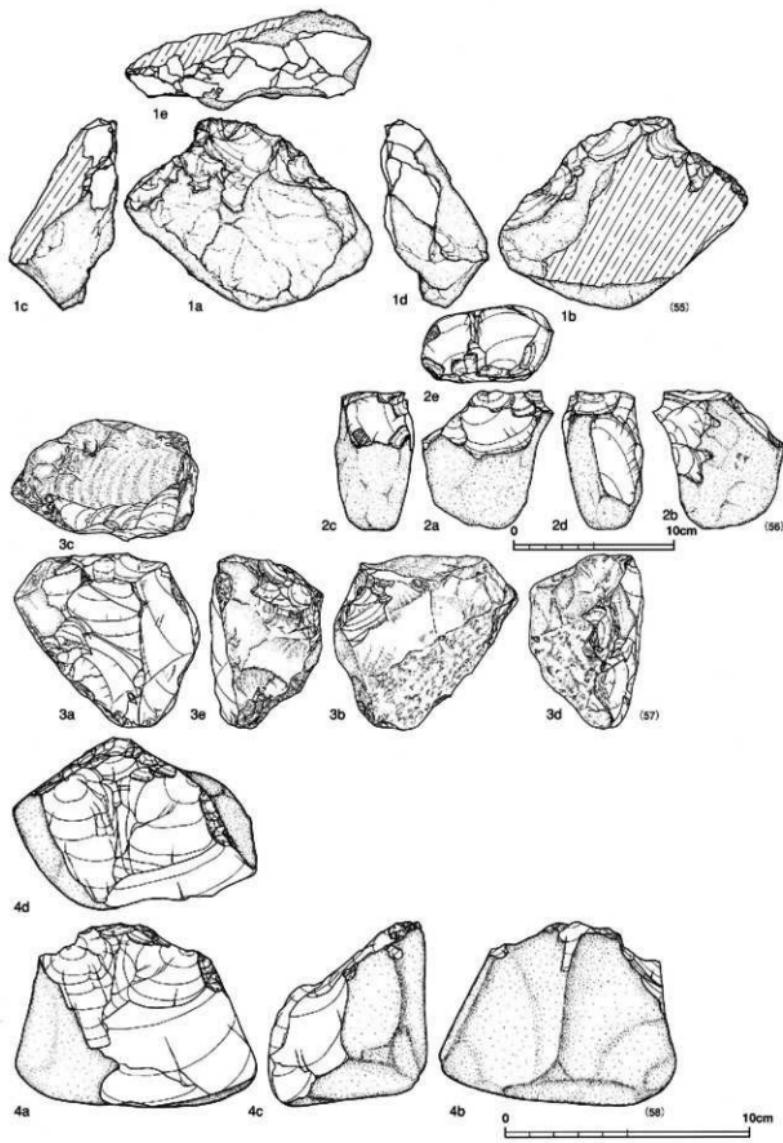
0 10cm



第14図版 山王团遺跡出土石器

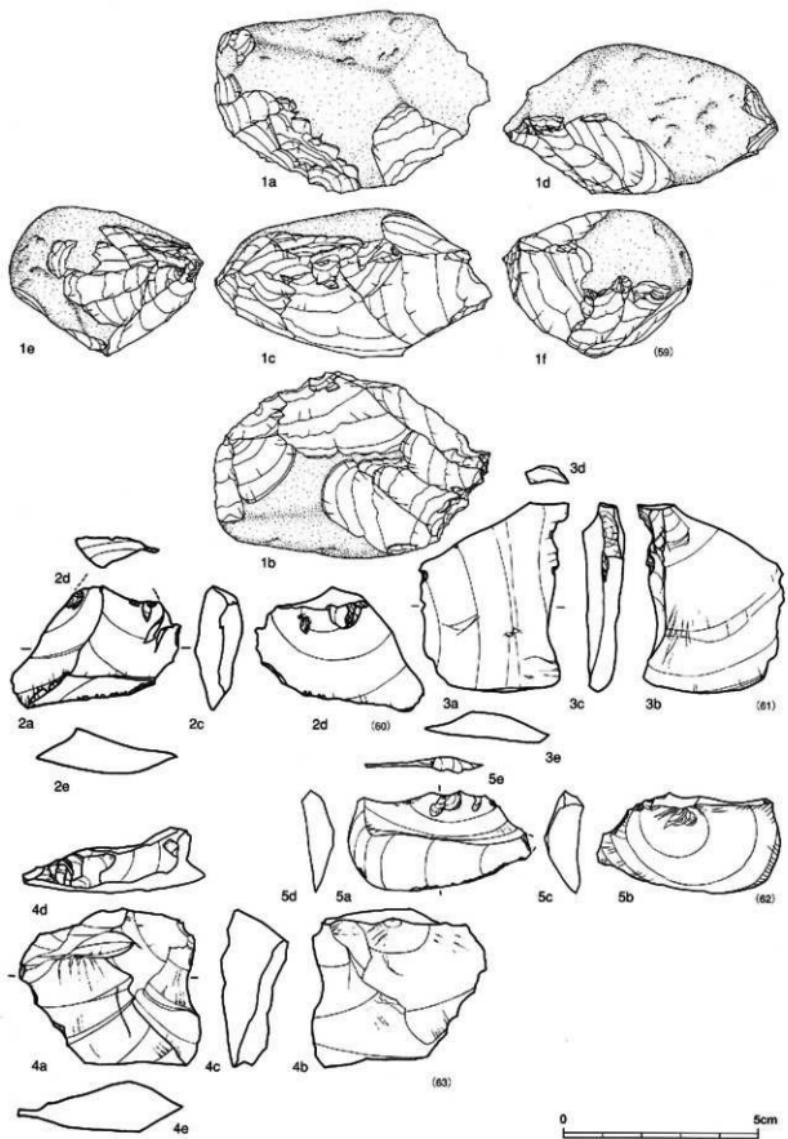
Stone implements from the Sanno-gakoi site

1 ~ 4 円盤状石器 5 ~ 7 石核



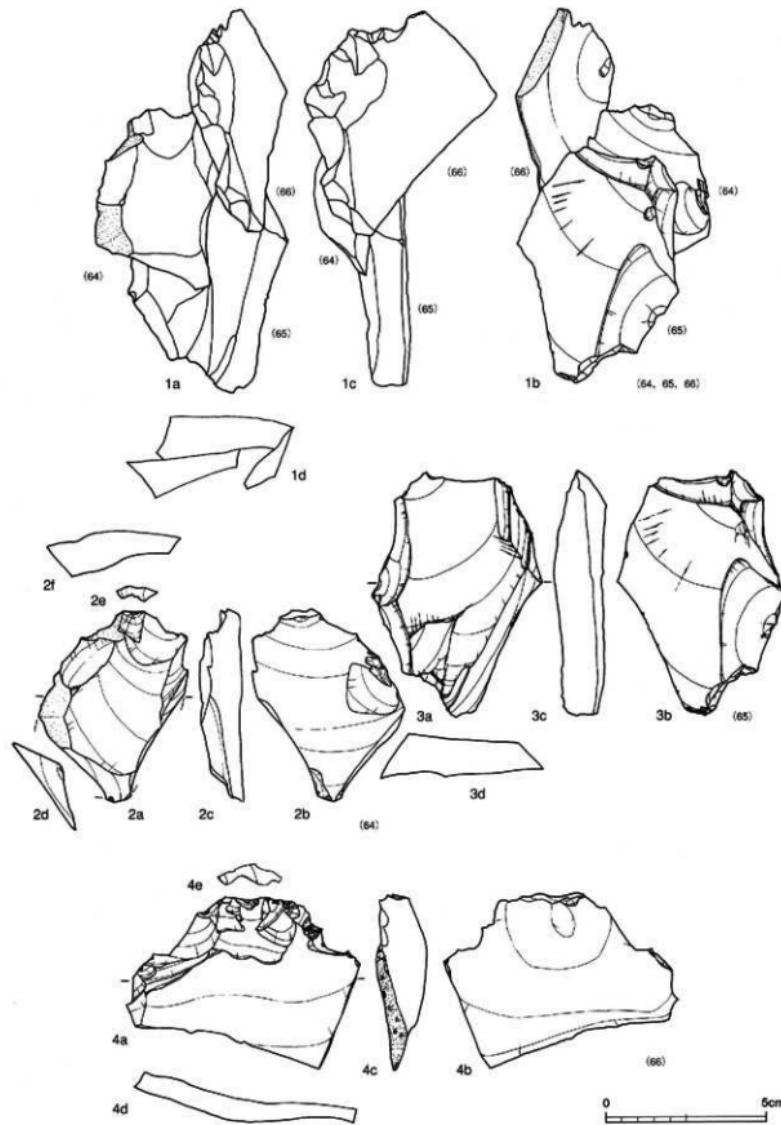
第15図版 山王園遺跡出土石核
Cores from the Sanno-gakoi site

1~4 石核



第16図版 山王閣遺跡出土石核・剥片
Cores and flakes from the Sanno-gakoi site

1 石核 2～5 剥片



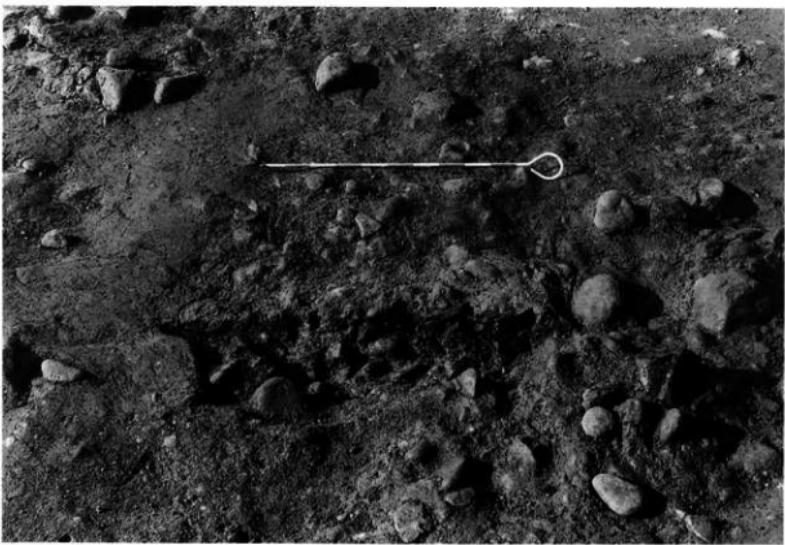
第17図版 山王園遺跡出土接合断片
Refitted flakes from the Sanno-gakoi site

1 断片接合図 2~4 接合断片

写 真 図 版



1 P区第3号配石造構および第15号土器埋設土壤 (南から)

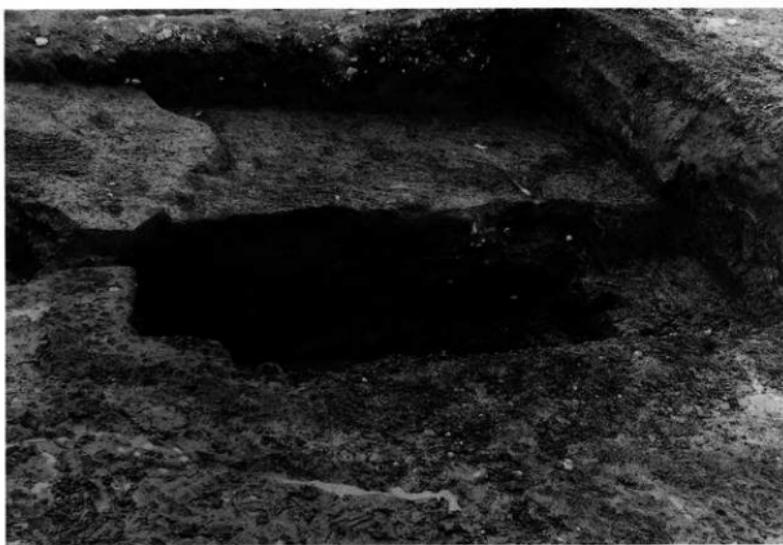


2 P区第1号焼上遺構 (南から)

P L. 1 P区第3号配石造構・第15号土器埋設土壤およびP区第1号焼土遺構
Stony feature3 and Pit15 with buried pottery and Burned soil feature 1



1 1965年時調査区（西区）北壁



2 1965年時調査区（東区）北壁

P L. 2 1965年時調査区北壁

View of excavated trench in 1965

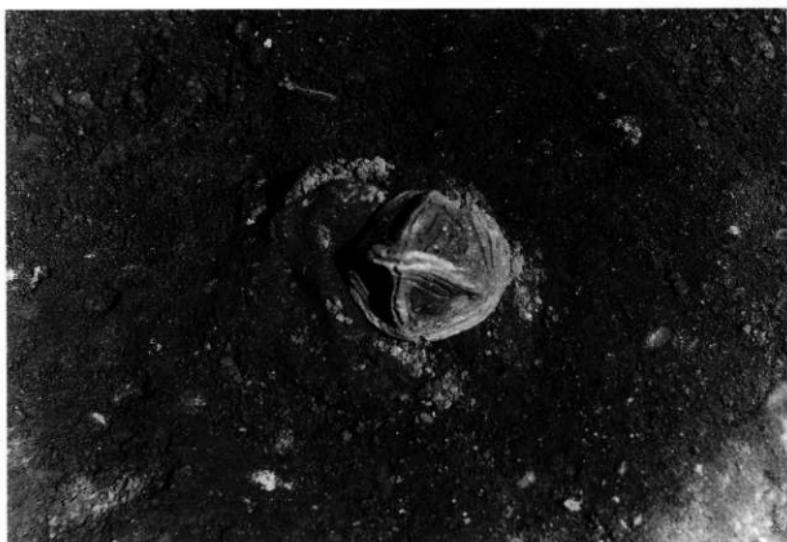


1 Q 東区全景

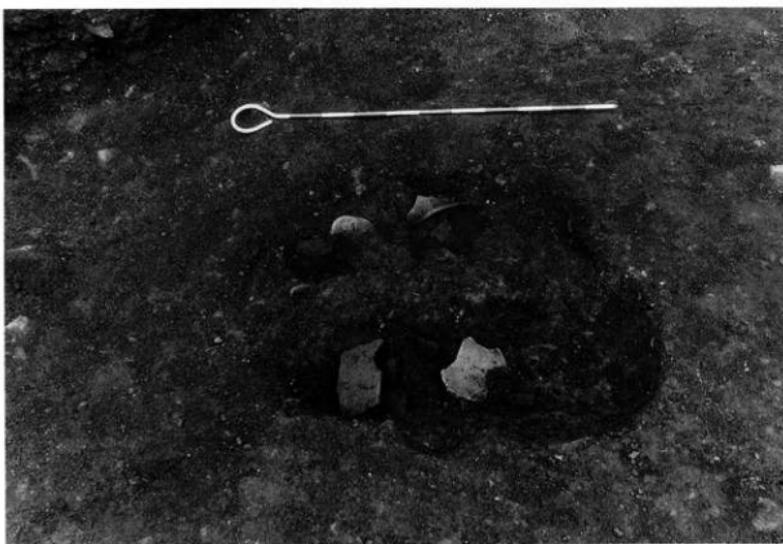


2 Q 東区第 1 号近世墓

P L. 3 Q 東区全景および第 1 号近世墓
View of excavated trench and Grave 1 in Edo era



1 R区蓋形土製品



2 R区ピット402

P L. 4 R区蓋形土製品出土状況およびピット402
Clay object and Pit402



1

(266)



2

(267)



3

(268)



4

(269)



5

(270)



6

(271)

P L. 5 山王廻遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1 P区第4号配石遺構 2・3 第5号配石遺構
4 第11号土器埋設土壤 5 第12号土器埋設土壤
6 第13号土器埋設土壤



P L. 6 山王圓遺跡出土土器
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1 P区第15号土器埋設土壤 2・3・7 P区10層
4・8 Q西区第1号竖穴状遺構 5 PI区11層
6 Q西区第14号土器埋設土壤



1

(280)



2

(282)



5

(284)



3

(281)



4

(283)



6

(287)

P L. 7 山王廻遺跡出土土器

Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1~4 Q西区11層 5 13層 6 16層



1

2

(285)



4

(288)



3

(289)

5

(291)



P L . 8 山王圓遺跡出土土器

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1 Q西区12層 2 ~ 4 22層
5 25層



1

(293)



2

(293) 3



(294)

P L . 9 山王開遺跡出土土器

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1 Q西区15層 2・3 24層



(295)



(296)

P L. 10 山王園遺跡出土土器
Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1・2 Q内区24層



1

(296)



2

(297)



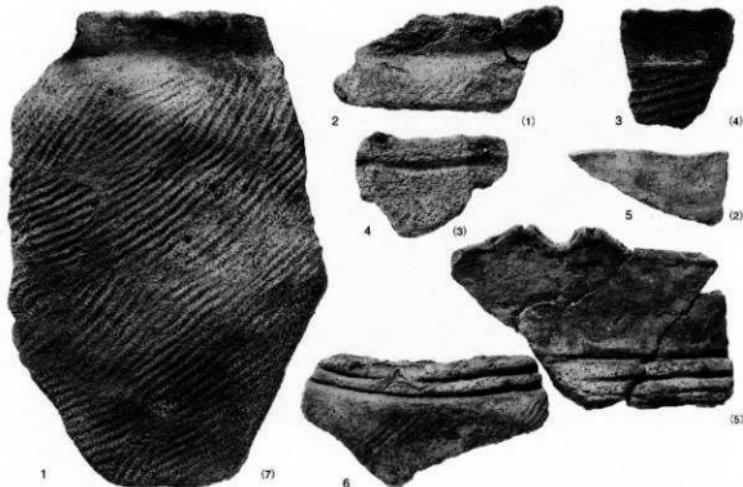
3

(298)

P L . 11 山王園遺跡出土土器

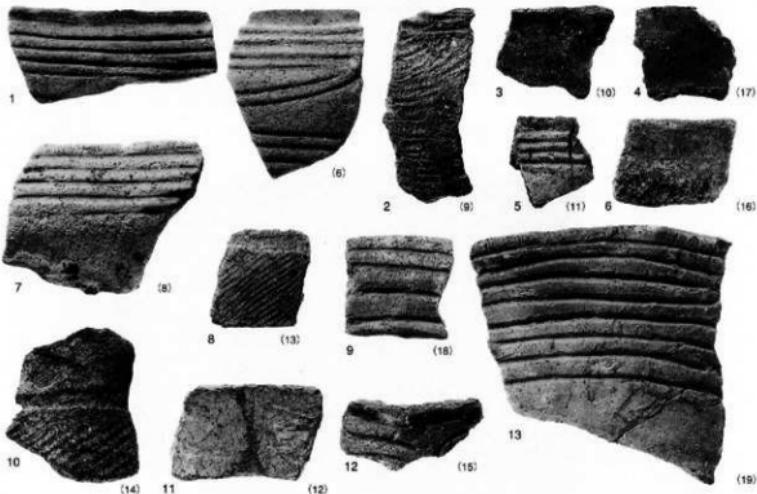
Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site

1・2 Q西区24層 3 Q北区9層



1 P区出土土器

1 P区第15号土器埋設土塊 2・4・5 第3号配石遺構
3 第4号配石遺構 6 第5号配石遺構



2 P区出土土器

1・2・7 P区第15号土器埋設土塊 3 P区4層
4・6・9・13 9層 5 8層 8・10～12 8a層

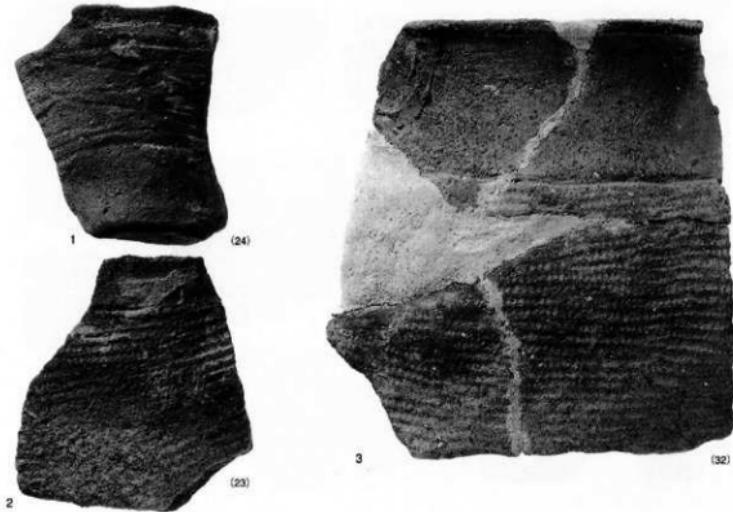
P.L. 12 山王廻遺跡出土土器

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



1 P区出土土器

1 - 2 P区10層

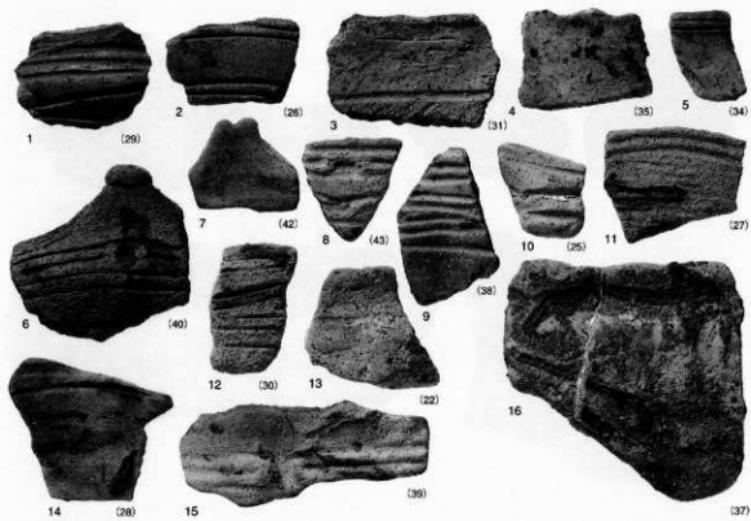


2 P区出土土器

1 - 5 P区10層

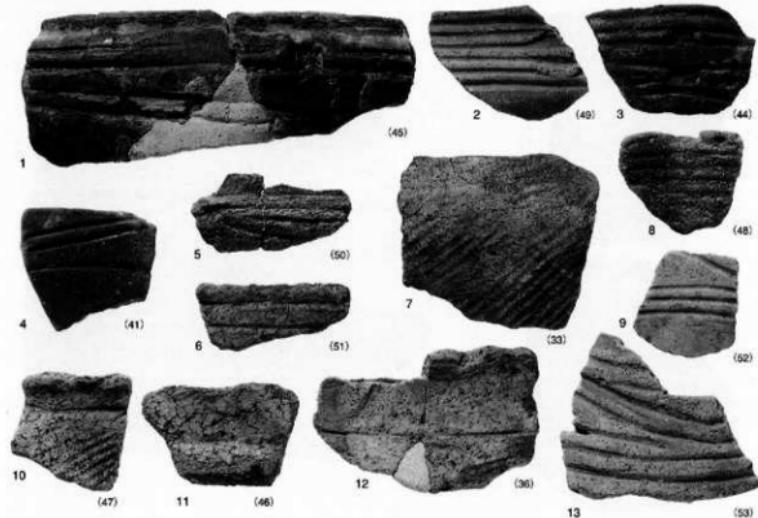
P L. 13 山王廻遺跡出土土器

Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



1 P区出土土器

1 ~ 16 P区10層

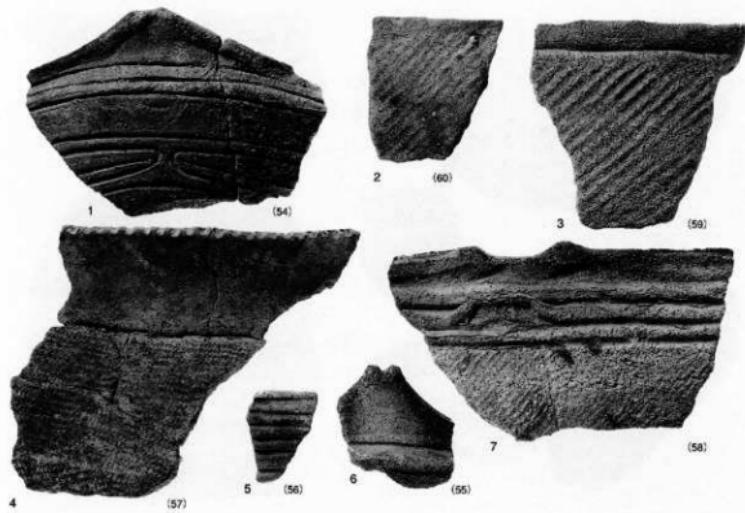


2 P区出土土器

1 ~ 8 • 10 ~ 12 P区10層 9 ~ 13 11層

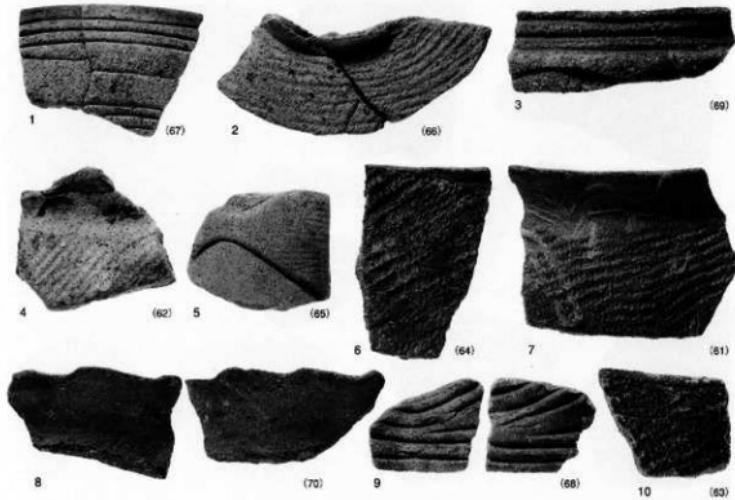
P L. 14 山王廻遺跡出土土器

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



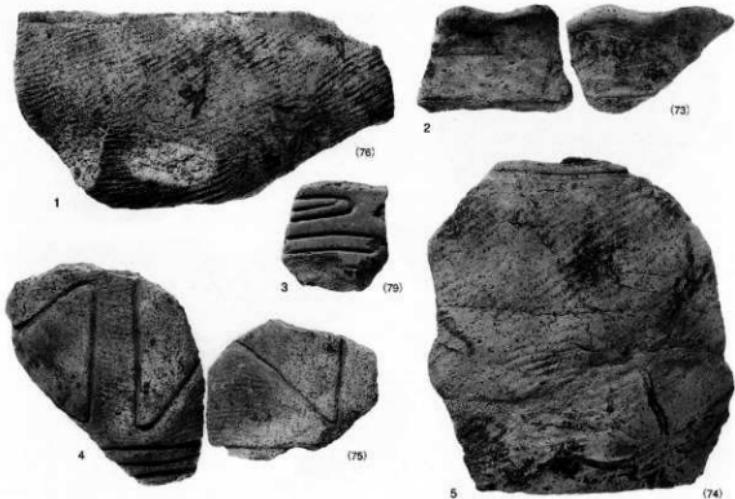
1 P区出土土器

1~7 P区11层



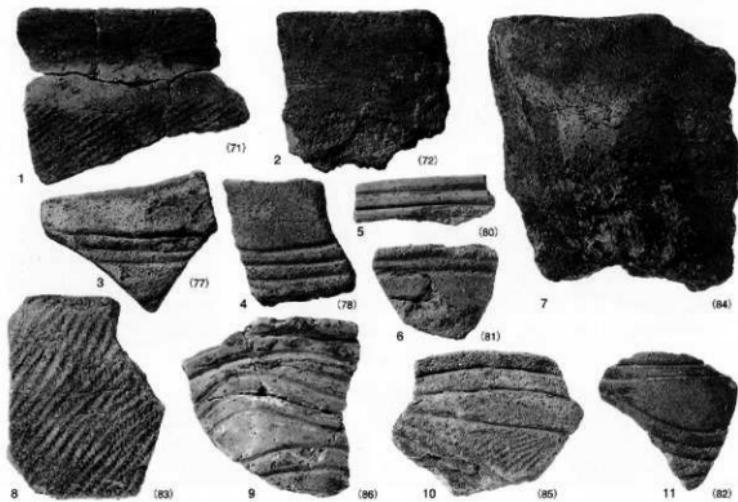
2 Q区出土土器

1~7・9・10 Q区第1号竖穴状遗構 8 Q区10層



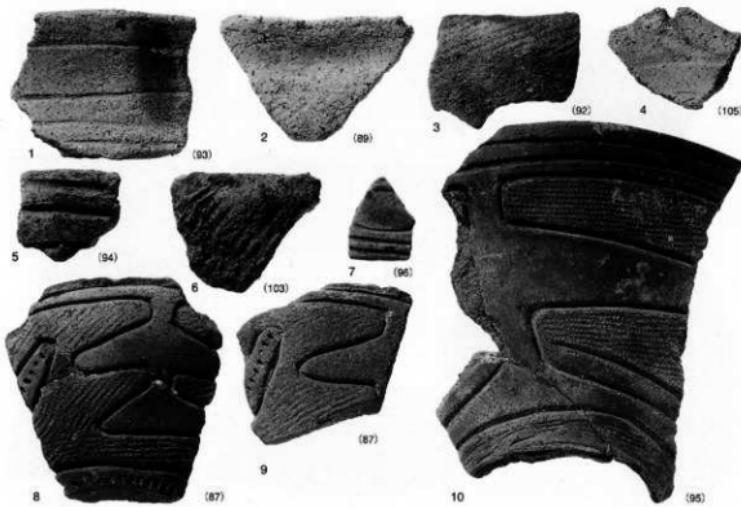
1 Q西区出土土器

1~5 Q西区11层



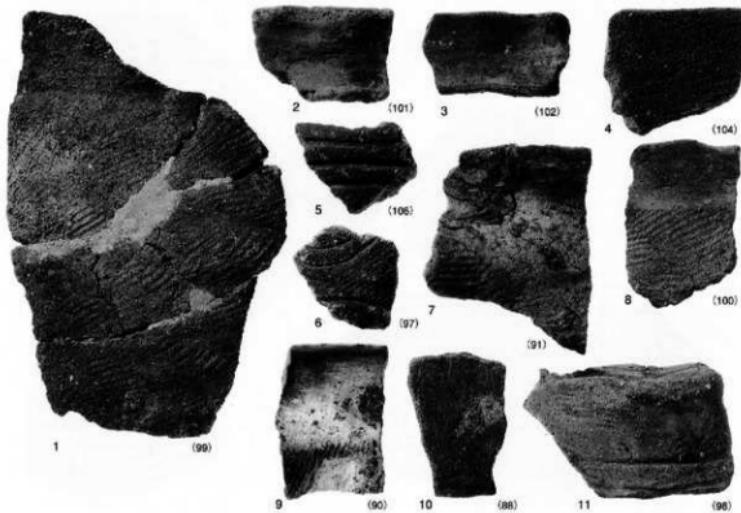
2 Q西区出土土器

1 Q西区11~12层 2~3·5·6 11层
4 11~13层 7~11 12层



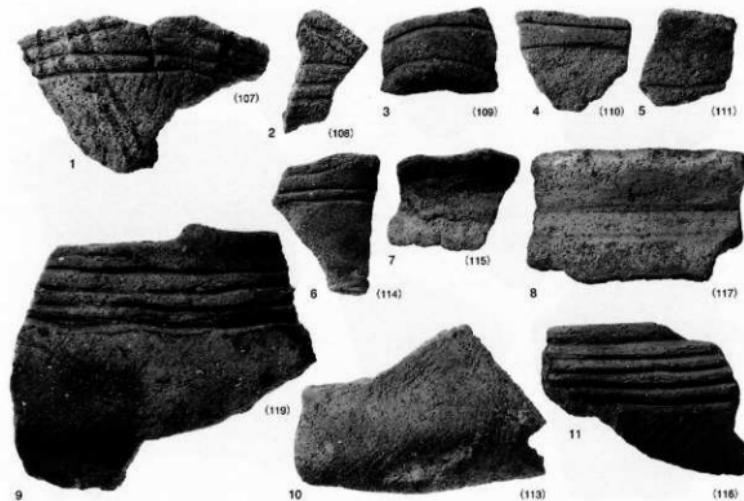
1 Q 西区出土土器

1 ~ 8 + 10 Q 西区13层 9 1965年调查资料



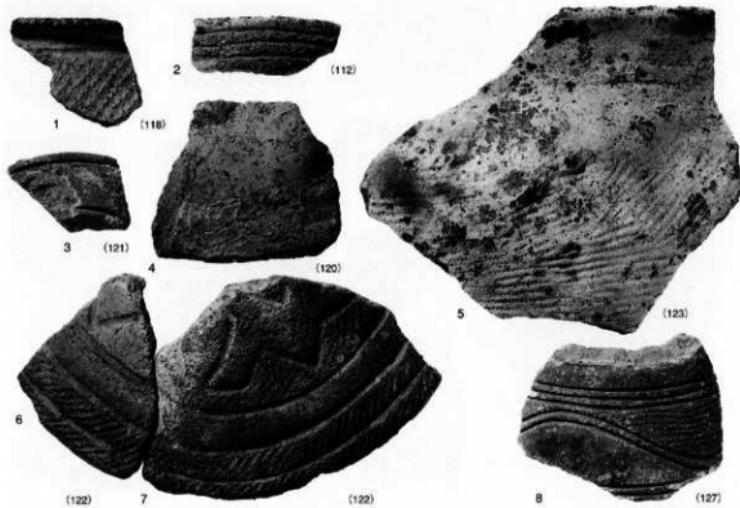
2 Q 西区出土土器

1 ~ 11 Q 西区13层



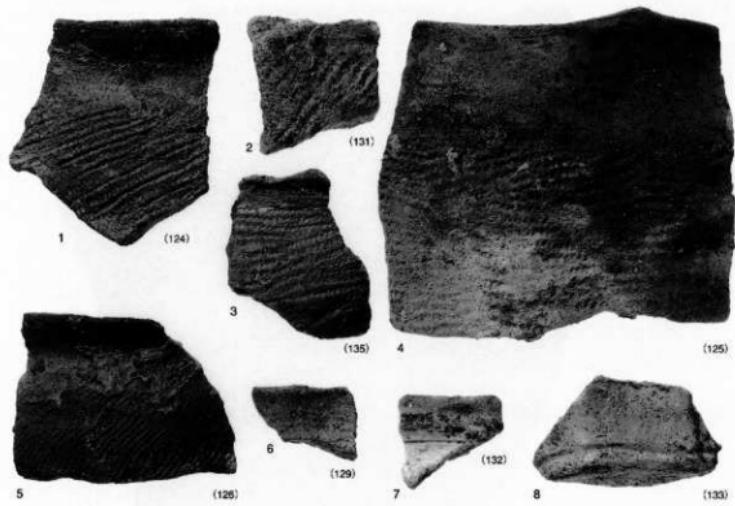
1 Q西区出土土器

1~8 Q西区13層 9 14層 10·11 13層



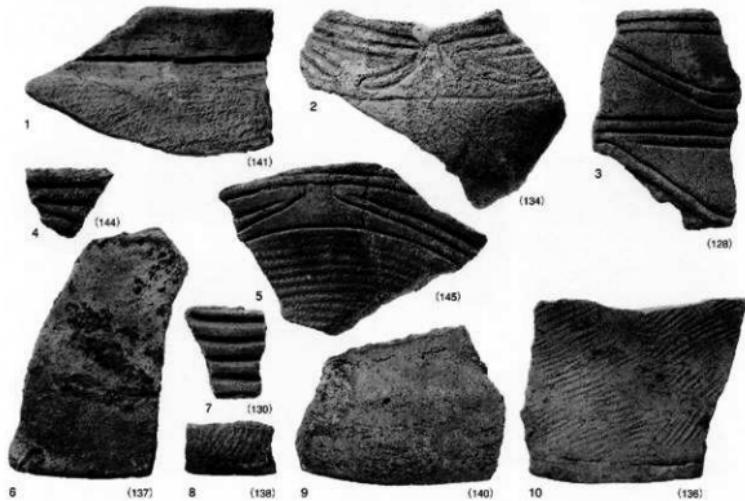
2 Q西区出土土器

1·2 Q西区13層 3 15層 4 14層 5·6·8 16層
7 1965年調査資料



1 Q西区出土土器

1~8 Q西区16层



2 Q西区出土土器

1·4·5 Q西区20层 2·3·6~8·10 16层 9 17层

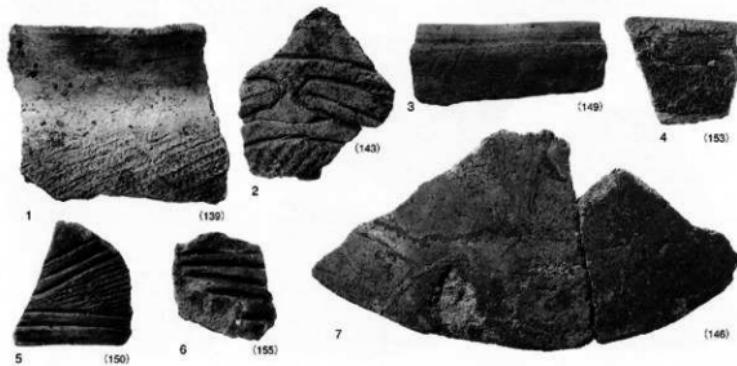


1

(142)

1 Q 西区出土土器

1 Q 西区16层

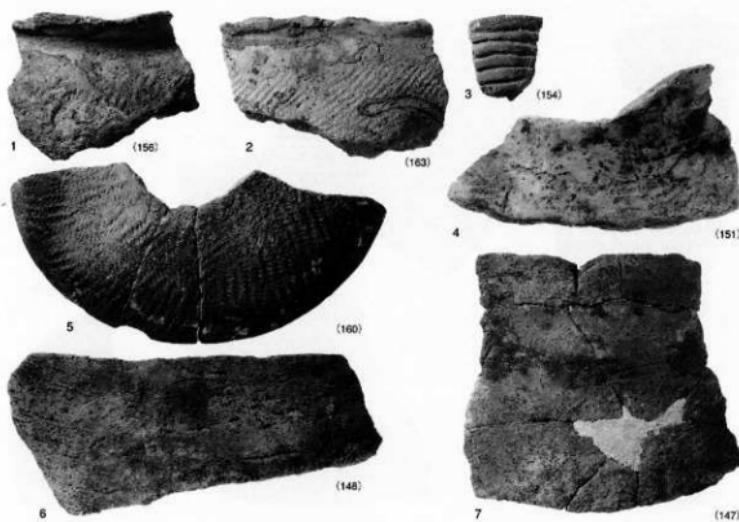


2 Q 西区出土土器

1 · 2 · 7 Q 西区20层 3 ~ 6 22层

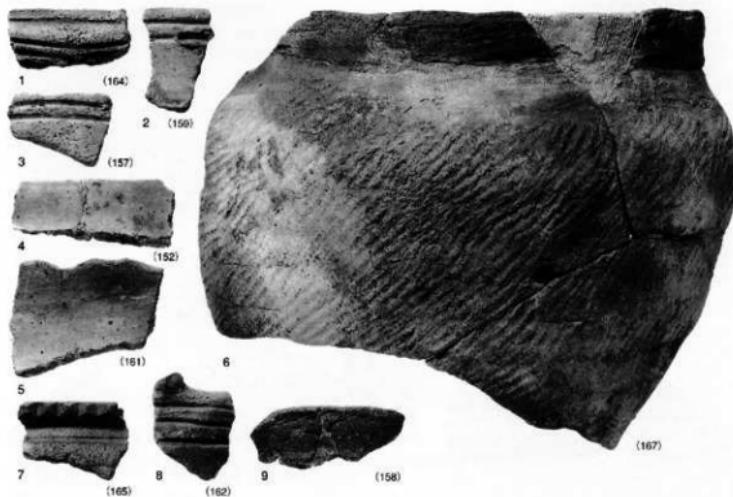
P L . 2 0 山王關遺跡出土土器

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



1 Q西区出土土器

1~7 Q西区22層

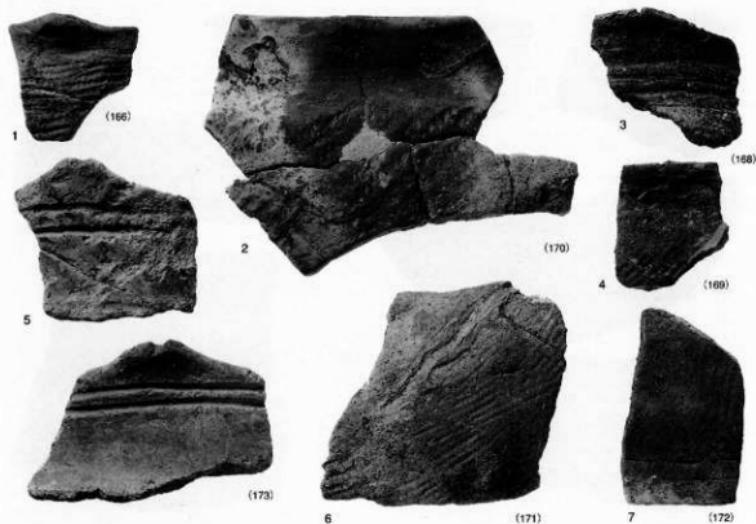


2 Q西区出土土器

1~5・7~9 Q西区22層 6 24層

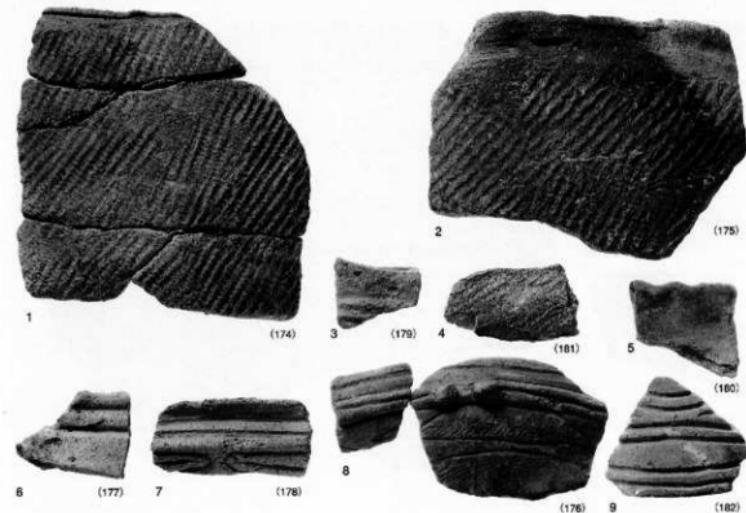
P L. 21 山王園遺跡出土土器

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



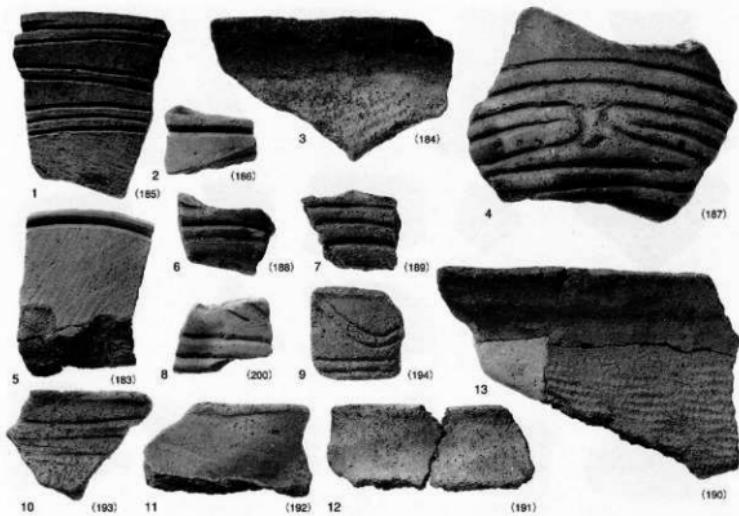
1 Q西、Q東区出土土器

1・3・6 Q西区24層 2・4・7 25層
 5 Q東区第10号土器埋設土層



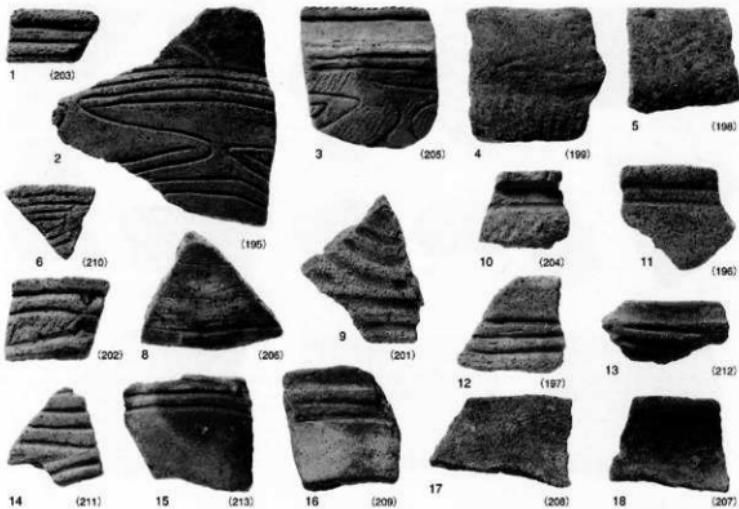
2 Q東、Q北、R区出土土器

1・2 Q東区第10号土器埋設土層 3・7 R区ピット396
 4・5・9 ピット397 6 Q北区包含層 8 Q北区9層



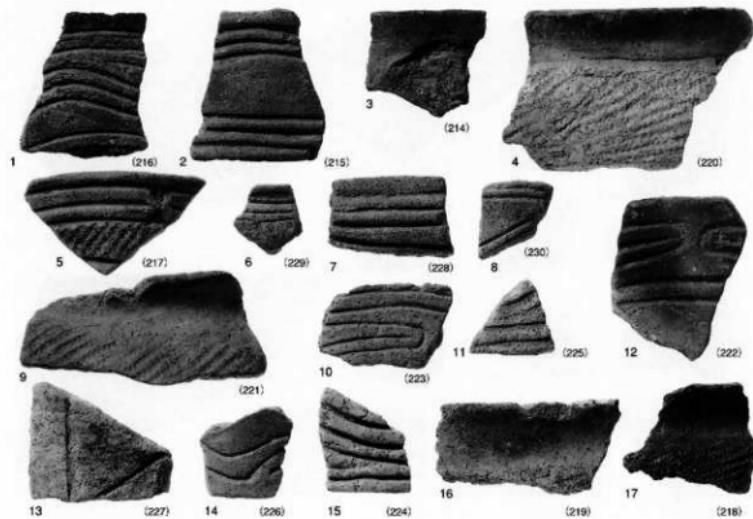
1 R区出土土器

1～4 R区ピット402 5 ピット399
6 ピット405 7 ピット406 8～13 1b層



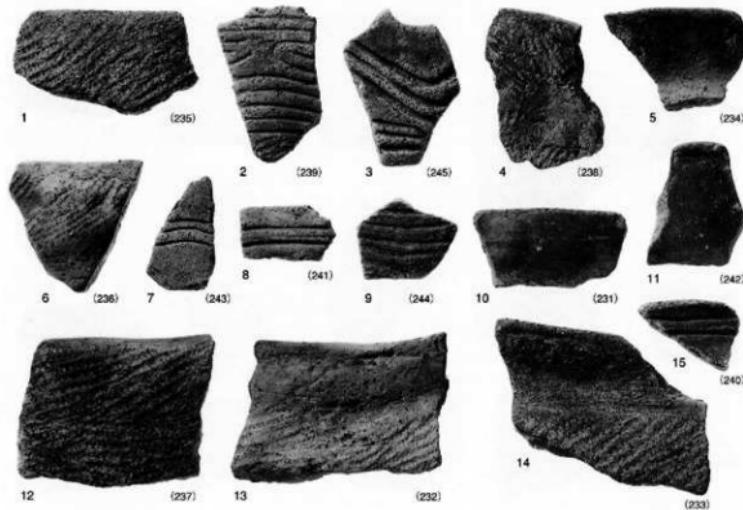
2 R区出土土器

1～5・7～12 R区1b層 6・13～18 2層上面



1 R区出土土器

1～3・5 R区2層 4・6～17 2b層

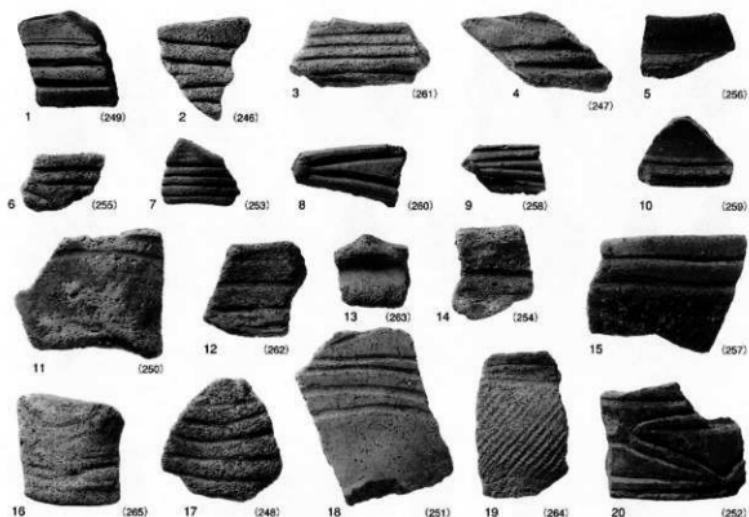


2 R区出土土器

1～15 R区2b層

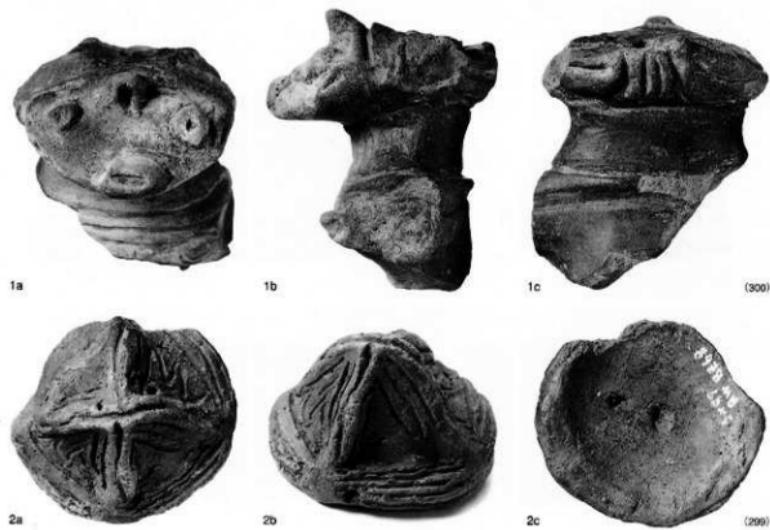
P L . 2 4 山王廻遺跡出土土器

Jomon and Yayoi pottery from the Sanno-gakoi site



1 R区出土土器

1～20 R区 2b層

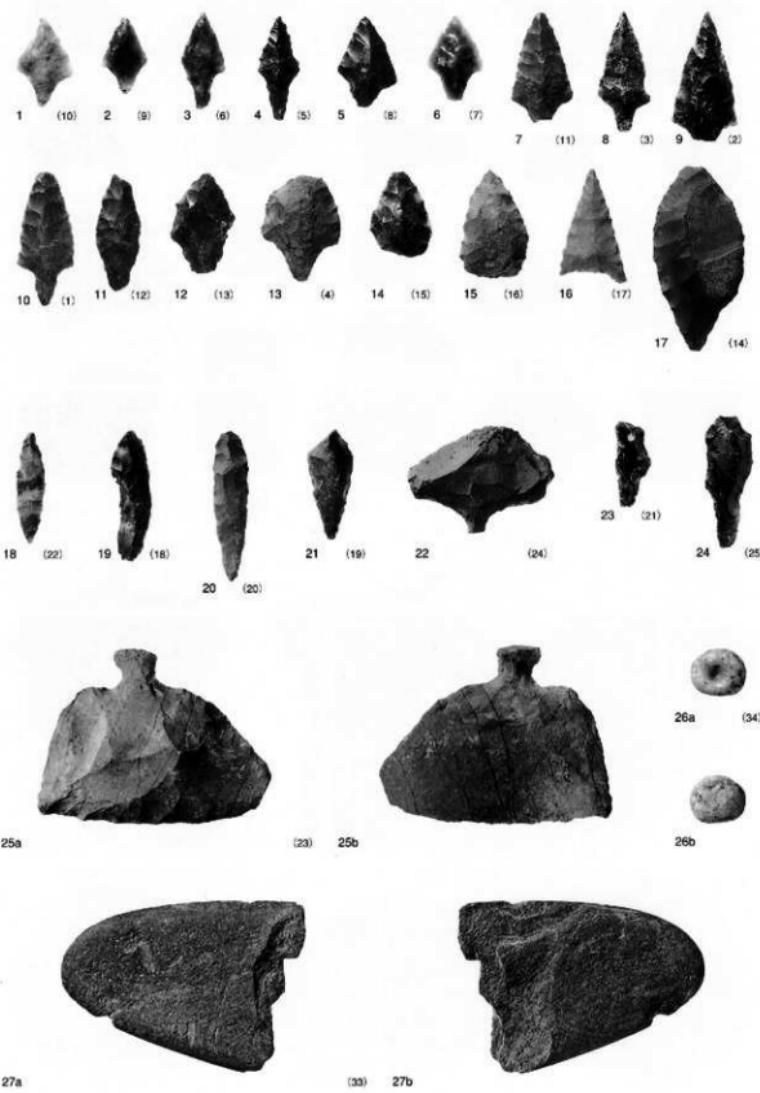


2 R区出土土製品

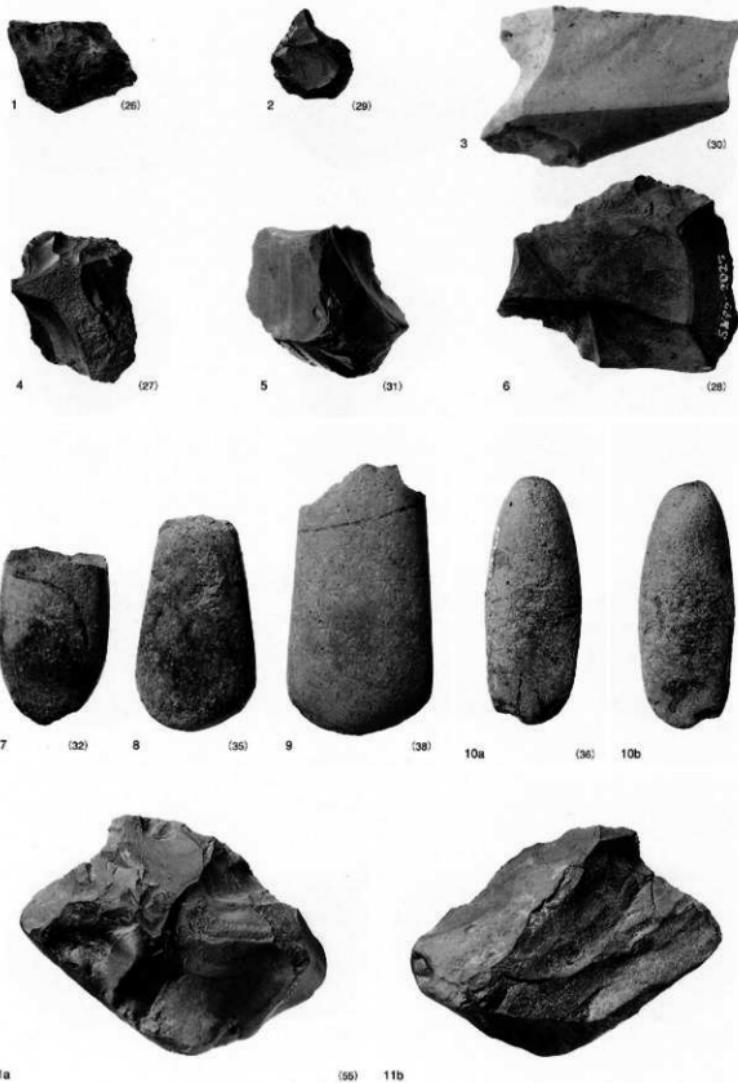
1 R区 2b層出土土偶
2 R区 2b層出土壺形土製品

P L . 25 山王園遺跡出土土器、土製品

Jomon and Yayoi pottery and clay objects from the Sanno-gakoi site



1~17 石鏃 18~24 石鋸 25 石斧
26 石鑿小長 27 石斧丁



1 楔形石器 2~6 不定形石器
7~10 整製石斧 11 石核



1 (58)

2

(59)

3

(54)



4 (52)

5 (53)

6

(57)

7

(56)



8a

(48)

9a

(50)

10a

(51)

11a

(49)



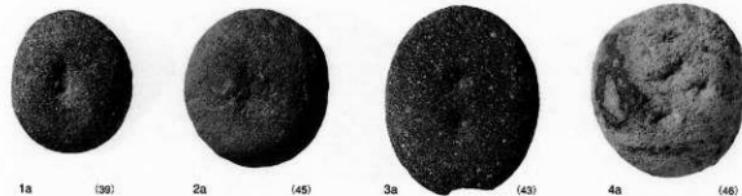
8b

9b

10b

11b

1~7 石核 8~11 円盤状石器



1a

(39)

2a

(45)

3a

(43)

4a

(46)



1b

2b

3b

4b



5

(37)



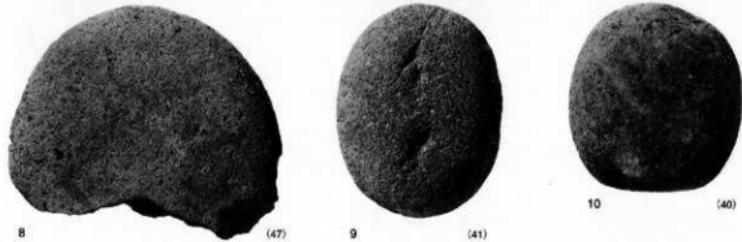
6

(44)



7

(42)



8

(47)

9

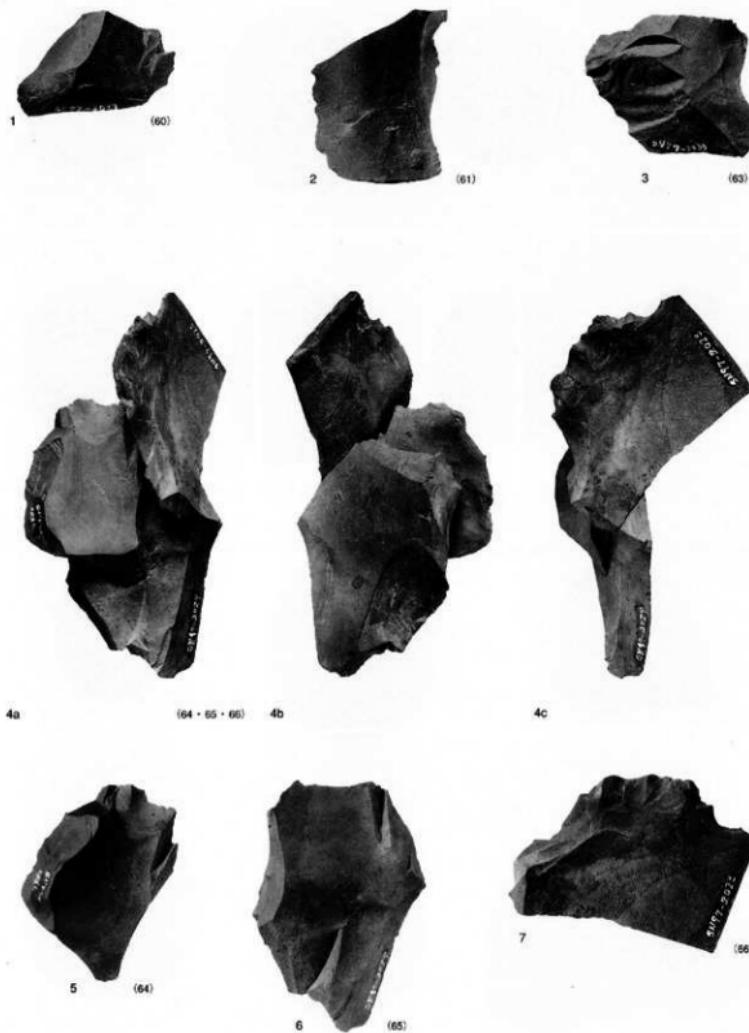
(41)

10

(40)

1~4 圆石 5 磨石 6·7 圆石
8 石皿 9 圆石 10 磨石

P L. 29 山王閣遺跡出土石器
Stone implements from the Sanno-gakoi site



1 ~ 3 刃片 4 刃片 No.64 ~ 66接合状態
5 ~ 7 接合刃片

国史跡 山王団遺跡

発掘調査報告書Ⅲ

平成10年3月10日 印刷

平成10年3月25日 発行

発行 宮城県一迫町教育委員会
栗原郡一迫町真坂字清水田河前5番地
TEL 0228-52-2111

印刷 (株) 平電子印刷所
福島県いわき市平北白土字西ノ内13
TEL 0246-23-9051

